

# 新原・奴山古墳群

宗像郡津屋崎町大字勝浦所在古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 54 集

1 9 7 7

福岡県教育委員会

しん ぼる      ぬ やま  
新 原 ・ 奴 山 古 墳 群

宗像郡津屋崎町大字勝浦所在古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 54 集

昭和 52 年

福岡県教育委員会

## 序

津屋崎町一帯は、県下でも最大の古墳密集地帯として知られております。

往時は、宗像地方を中心とする対外的な海上活動がさかんに行なわれ、それによる蓄積がこれらの規模・内容ともに秀でた古墳文化营造のエネルギーとなったと推察されます。

現在でも、周囲よりも一段高い水田あるいは畑の中には、かつての偉容を誇るかのように、円墳・前方後円墳が点々として並んでおり、たくましくして古墳公園となっております。しかも、これほど気軽にたずね歩けるところは他にはありません。

けれども、環境整備面については残念ながら遅れており、これらの文化財を活用しているとはいえないのが実状であります。この地域の学術上に占める意義の大きさに鑑み、当委員会では向後これに積極的に取り組む所存であります。ついては、各位の一層の御支援をお願い申し上げます。

最後になりましたが、御協力いただいた津屋崎町教育委員会、県文化財保護指導委員永島俊一氏、津屋崎町郷土史研究会ならびに地元柴田健助翁、花田敏昭<sup>氏</sup>に対して、心からの感謝の意を表します。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 実

## 例 言

1. 本書は、昭和51年度国庫補助事業の一環として行なった宗像郡津屋崎町大字勝浦字新原所在遺跡発掘調査結果についての報告書である。  
なお、事業名称は奴山遺跡群となっているが、本文中で述べる理由から、報告にあたっては新原・奴山古墳群と改称した。
2. 報告書作成への時間的制約から、現場で作成した図面の一部の掲載を割愛した。また、同じ理由で、遺物については土器の写真を掲載するにとどまった。いずれ機会を得たいと考えており、ご了解を願うものである。
3. 本書の執筆は、下記のとうりである。  
I～IV, V-4・5……………石山 勲  
V-1～3……………川述昭人
4. 掲載した挿図の作成は、挿図目次に示すとおりで、浄書はFig. 20～25を川述が、他は石山が行なった。図版のうち、遺物については全て九州歴史資料館石丸洋氏の撮影による。
5. 本書の編集は、石山が担当した。

# 目 次

I	調査の経過	1
II	位置と環境	2
III	各古墳の調査	
	1. 第17号墳	7
	2. 第123号墳	16
	3. 第18号墳	21
	4. 第124号墳	25
IV	結 語	
	1. 墳丘について	28
	2. 石室構造について	28
	3. 出土遺物と年代について	29
	4. 葬法について	30
	5. 土器の出土状態について	30
	6. “宗像君”と周辺地域との関係について	31
V	周辺の古墳と遺物	
	1. 第10号墳	34
	2. 第41号墳	38
	3. 勝浦浜第1号墳	42
	4. 鈴付鏡板	44
	5. 甕	44

# 図 版 目 次

本文対照頁

P L. 1	(1)	奴山古墳群全景（東側上空から）	2
	(2)	奴山古墳群全景（南東側上空から上方は玄界灘）	2
P L. 2	(1)	17・123号墳遠景（北側上空から）	7
	(2)	17・123号墳全景（西側から）	8
P L. 3	(1)	17号墳前方部葺石	9
	(2)	17号墳後円部葺石	9
P L. 4	(1)	17号墳丘縦断面全景	9
	(2)	17号墳丘縦断面（B～C）	9
P L. 5	(1)	17号墳墳丘縦断面（C～D）	10
	(2)	17号墳墳丘縦断面（E～F）	9
P L. 6	(1)	17号墳墳丘縦断面（F～I）	9
	(2)	17号墳石室構築状況	12
P L. 7	(1)	17号墳発掘後全景（西側から）	12
	(2)	17号墳石室天井石	12
P L. 8	(1)	17号墳石室前庭部堆積状況	14
	(2)	17号墳石室閉塞状況	14
P L. 9	(1)	17号墳石室閉塞石	14
	(2)	17号墳石室横口部	14
P L. 10	(1)	17号墳石室全景	14
	(2)	17号墳石室前庭部全景	12
P L. 11	(1)	17号墳石室前庭部左側壁	12
	(2)	17号墳石室前庭部右側壁	12
P L. 12	(1)	17号墳玄室左側壁	12
	(2)	17号墳玄室右側壁	12
P L. 13	(1)	17号墳玄室奥壁	12
	(2)	17号墳玄室奥壁左隅	15
P L. 14	(1)	17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（南西から）	15
	(2)	17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（北西から）	15
P L. 15	(1)	17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（拡大）	15
	(2)	17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（拡大）	15
P L. 16	(1)	17号墳石室羨道部第2次床面鉄鏝出土状態（南東から）	15
	(2)	同上拡大（北東から）	15

P L. 17	(1)	17号墳後円部甕 (K A I) 出土状態	15
	(2)	17号墳後円部甕 (K A I) 据付状態	15
P L. 18	(1)	123号墳全景(東から)	16
	(2)	123号墳発掘後全景(西から)	16
P L. 19	(1)	123号墳玄室右側壁	17
	(2)	123号墳玄室横口部	17
P L. 20	(1)	123号墳玄室奥壁	17
	(2)	123号墳玄室奥壁右隅	17
P L. 21	(1)	123号墳墳丘内南裾A・B土器群出土状況	19
	(2)	123号墳墳丘内南裾A・B土器群出土状況(東から)	19
P L. 22	(1)	123号墳A群土器出土状態	19
	(2)	同上(蓋除去後)	19
P L. 23	(1)	123号墳B群土器出土状態	19
	(2)	同上(蓋除去後)	19
P L. 24	(1)	123号墳C群土器出土状態(南から)	19
	(2)	123号墳C群土器出土状態(東から)	19
P L. 25	(1)	18号墳全景(南西から)	21
	(2)	18号墳石室全景(西から)	22
P L. 26	(1)	18号墳玄室奥壁	23
	(2)	18号墳玄室奥壁右隅	23
P L. 27	(1)	18号墳玄室右側壁	23
	(2)	18号墳玄室横口部	23
P L. 28	(1)	18号墳墓道	24
	(2)	18号玄室前壁左隅嚮出土状態	24
P L. 29	(1)	18号墳墳丘内南裾出土土器・盛土関係	24
	(2)	18号墳墳丘南裾出土土器(部分)	24
P L. 30	(1)	18号墳墳丘南裾土器出土状態(西から)	24
	(2)	18号墳墳丘内南裾出土土甕	24
P L. 31	(1)	18号墳墳丘内南裾出土甕	24
	(2)	18号墳墓道右肩出土土器・盛土関係	24
P L. 32	(1)	18・124号墳遠景	24
	(2)	124号墳近景	25
P L. 33	(1)	124号墳石室全景	25
	(2)	124号墳石室近景	26
P L. 34	(1)	124号墳石室閉塞状態	26
	(2)	124号墳墓道土器出土状態(北から)	27
P L. 35		17・123号墳出土A群土器	20
P L. 36		123号墳A・B群出土土器	20
P L. 37		123号墳B・C群出土土器	20

PL. 38	123号墳C群・北側周溝出土土器	20
PL. 39	123号墳墓道出土土器	20
PL. 40	18号墳墳丘内南側出土土器(1)	25
PL. 41	18号墳墳丘内南側出土土器(2)	25
PL. 42	18号墳墳丘内南側出土土器(3)	25
PL. 43	18号墳墓道南肩部出土土器	25
PL. 44	124号墳出土土器	27
PL. 45	10・41号墳 航空写真	34
PL. 46	10号墳 墳丘と石室	34
PL. 47	10号墳 石室	34
PL. 48	10号墳 遺物 杏葉など	36
PL. 49	10号墳 〃 鏡	36
PL. 50	10号墳 〃 馬具など	36
PL. 51	10号墳 〃 小札と鉾	36
PL. 52	10号墳 〃 鉄鏃, 短甲	36
PL. 53	10号墳 住居跡など	36
PL. 54	41号墳 遠景と墳丘	38
PL. 55	41号墳 石室	38
PL. 56	41号墳 石室	38
PL. 57	41号墳出土鏡	41
PL. 58	41号墳出土鏡と玉類	41
PL. 59	41号墳 遺物 大刀・劍	41
PL. 60	41号墳 遺物 鉄鏃・刀子	41
PL. 61	41号墳 遺物 ガラス玉など	41
PL. 62	勝浦浜1号墳 遠景など	43
PL. 63	勝浦浜1号墳 石室	43
PL. 64	新原・奴山古墳群全景(北西上空から)	4
PL. 65	新原・奴山古墳群全景(北東から)	4
PL. 66	(1) 第26・27号墳全景(北から)	5
	(2) 第29号墳全景(北から)	5
PL. 67	(上) 第26号墳石棚と奥壁	6
	(下) 第26号墳石棚と左側壁	6
PL. 68	(1) 第52~55号墳全景	6
	(2) 第56号墳遠景	6
PL. 69	(上) 第56号墳石室奥壁	6
	(下) 第56号墳横口部	6
PL. 70	第17・123号墳付近採取鈴付杏葉	44

## 插图目次

Fig. 1	新原・奴山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000) (作成・石山)……………	3
Fig. 2	新原・奴山古墳群全体図 (1/10,000) (作成・石山)……………	4
Fig. 3	17・123号墳地形測量図 (1/300) (実測・橋口, 佐々木, 日高, 石山)……………	8
Fig. 4	17号墳全体図 (1/300) (実測・中間, 佐土原, 石山)……………	9
Fig. 5	17号墳墳丘断面図 (1/60) (作成・石山)……………	9
Fig. 6	17号墳墳丘C～E, 後円部断面図 (1/60) (実測・中間)……………	10
Fig. 7	17号墳墳丘復元図 (1/300) (作成・石山)……………	11
Fig. 8	17号墳石室実測図 (1/60) (実測・佐土原, 石山)……………	13
Fig. 9	17号墳羨道部断面実測図 (1/60) (実測・佐土原, 石山)……………	14
Fig. 10	123号墳全体図 (1/200) (実測・日高, 佐々木, 石山)……………	16
Fig. 11	123号墳墳丘断面図 (1/60) (実測・橋口, 石山)……………	17
Fig. 12	123号墳石室実測図 (1/60) (実測・新原, 児玉, 宇野, 補測・石山)……………	18
Fig. 13	123号墳羨道縦断面実測図 (1/60) (実測・石山)……………	19
Fig. 14	18号墳全体図 (1/200) (実測・日高, 佐土原, 石山)……………	21
Fig. 15	18号墳墳丘断面実測図 (1/60) (実測・佐土原)……………	22
Fig. 16	18号墳石室実測図 (1/60) (実測・平ノ内, 佐土原, 補測・石山)……………	23
Fig. 17	18号墳墓道横断面実測図 (1/60) (実測・石山)……………	24
Fig. 18	124号墳石室実測図 (1/60) (実測・浜田, 佐土原, 補測・石山)……………	26
Fig. 19	17号墳出土把手付高杯実測図 (1/3) (実測・石山)……………	29
Fig. 20	10号墳墳丘測量図 (1/600) (実測・川述昭, 川述公, 鹿島, 沢田, 日高, 筒井)……………	35
Fig. 21	10号墳石室実測図 (1/60) (実測・〃)……………	36
Fig. 22	41号墳墳丘測量図 (1/600) (実測・〃)……………	39
Fig. 23	41号墳石室実測図 (1/60) (実測・〃)……………	40
Fig. 24	10・41号墳関係図 (1/2,000) (作成・川述昭)……………	41
Fig. 25	勝浦浜1号墳石室実測図 (1/60) (実測・〃)……………	43
Fig. 26	宮地獄付近出土藤実測図 (1/60) (実測・石山)……………	44

## I 調査の経過

現在、主要地方道若松・芦屋・福間線の改良工事が進行中であり、昭和51年度建設予定地内に埋蔵文化財が所在することから、路線決定のための資料を得るため、昭和51年度国庫補助事業の一環として発掘調査が実施された。

同地方道に関しては、既に昭和50年度国庫補助事業として10・41号墳についての調査が実施されている（註1）。従って、今回の調査は第2次にあたる。10号墳については、当初前方部過半の削平が予定されていたが、管轄の宗像土木事務所との協議の結果、設計変更が行なわれ、前方部先端を失なったものの前方部石室は辛じて破壊を免れた。不幸中の幸と喜ぶとともに、御尽力いただいた同事務所各位に対して深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和51年度の調査は、事前の分布調査で確認された17・18・123号墳の計3基の古墳と前後の散布地を対象としたが、調査中に124号墳の所在が明らかとなり、これをも含めた。

調査の期間および関係者は下記のとおりである。

期 間 自 昭和51年10月22日

至 昭和52年2月5日

宗像土木事務所

所 長 大戸甫夫 工務課第2係長 森山武八  
技 師 渡辺 誠

教育庁管理部文化課

総 括 課 長 藤井 功 課長補佐 武久 耕作  
参事補佐 松岡 史 技術主査 宮小路賀宏  
庶務担当者 庶務係長 大淵幸夫 主 事 大神 新  
調査担当者 技 師 石山 勲  
調査補助員 佐土原逸男 日高正幸 平ノ内幸治 宇野慎敏

この他、文化課技師橋口達也・浜田信也・新原正典・中間研志・児玉真一・佐々木隆彦の六氏の来援を得た。調査の実施にあたっては、阿部静男氏をはじめとする津屋崎町教育委員会諸氏、ならびに県文化財保護指導委員永島俊一氏の御協力による所が大きい。また、津屋崎町歴史研究会の熱心な活動により、11月3日と12月19日の計2回にわたり現地説明会が開催されて多数の参加をみた。なお、同会の諸氏からは現地にも度々御教示を得、感謝にたえない。

報告書の作成にあたっては、松岡史氏から有益な御教示を、遺物撮影については多忙にも不拘九州歴史資料館の石丸洋氏の御尽力を、また土器復元については同館岩瀬正信氏の御高配を得た。

なお、散布地については、トレンチ調査の結果遺構・遺物を確認できなかったため、本報告からは除外した。

## II 位置と環境

ここに報告する17・18・123・124号の計4基の古墳は、いずれも宗像郡津屋崎町大字勝浦字新原に所在し、これまで周辺の古墳を含めて奴山古墳群と称されてきた。けれども、実際は大字勝浦字新原と大字奴山とにまたがっており、名称は必しも適切とはいえない。従って小稿では新原・奴山古墳群と称している。また、数回にわたって分布調査が行なわれているがその度毎に新たな遺跡番号が設定されており、混乱を避けるために本報告では、昭和46年度実施の分布調査時の番号を踏襲している。この成果については、昭和51年度市町村別遺跡等分布地図作成事業の一環として現在印刷中である。従って詳細はそれに譲り、ここでは概略を述べるにとどめたい。

津屋崎町は、県下でも有数の古墳密集地帯として著名である。県下の前方後円墳数は、昭和51年現在で約180基が確認されているが、当町では既に16基が知られており、湮滅・未確認分を加えると二十数基に達するとみられ、集中度は県下随一である。

立地は、東西に延びる低丘陵上と、東の宮地獄・対余見山、西の大峯山・森山から派生する支脈上およびその斜面とに二大別できる。総体としては、前者に立地する古墳の方が規模も大きく、営造期も先行する傾向にある。つまり、前者は前方後円墳を中核として形成され、後者は小規模墳で構成される群集墳として把握される。

これまでのところ、5世紀中葉代に遡る前方後円墳は知られていず、北端の10・41号両墳が当該地域では最初に出現する前方後円墳となっている。以後、相次いで築造されたとみられるが、前方後円墳ではないが豪華な出土品と巨石墳として著名な宮地獄古墳に象徴されるように、概して南部にあるものが後出するかのようである。ただし、大字在自字名呑では方形周溝墓が発見されており（註2）、またFig. 26で示すように宮地獄山麓部からは古式須恵器が出土しており、円墳等の築造はむしろ遡る可能性もある。ともあれ、主として南部と西部とに群集墳が集中することは事実で、北部との明確な相違点として注意を要する。

当該地域の古墳は、北端の勝浦地区、略中央の新原・奴山地区、南接する生家地区、中央部

- 円墳
- ◐ 前方後円墳
- 円墳群
- 箱式石棺
- ◻ 箱式石棺群

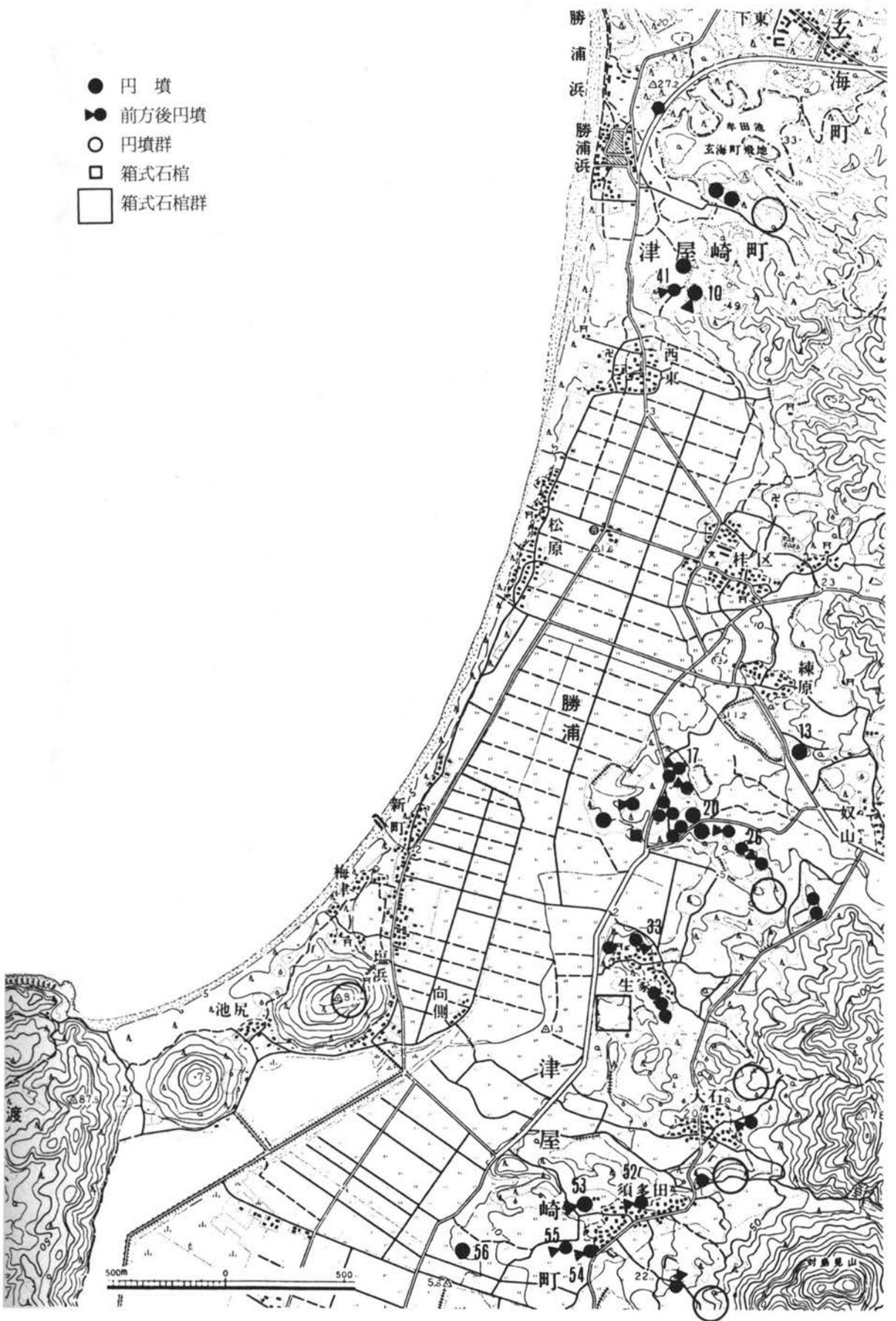


Fig. 1 新原・奴山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

の須多田地区、南端の在自・津屋崎両地区、西端の森山・大峯山両地区の計8地区に主として集中しており、これらのうちの前5者に前方後円墳が含まれ、就中新原・奴山、順多田の両群が各前方後円墳5基以上を中核として最有力となっている。

筑紫君一族の北域と見故されている八女丘陵に現存する前方後円墳が9基であることを想起する時、勝浦・奴山、須多田両群を含む当該地域の重要性が自ずと知られる。

以下、周辺の前墳について、その概略を述べたい(註3)。

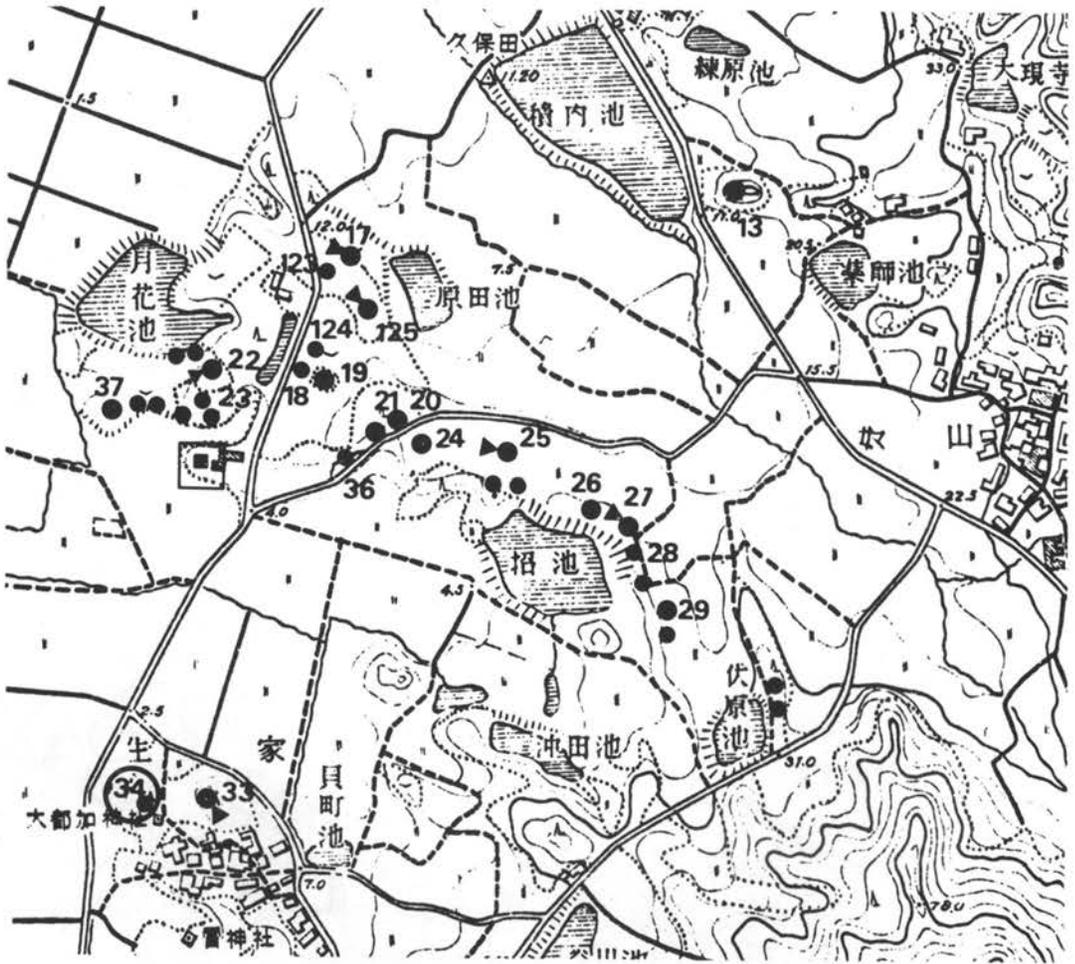


Fig. 2 新原・奴山古墳群全体図 (1/10,000)

第19号墳 (大字勝浦字新原3773—No.350034)

円墳。18・124号墳の東側至近距離にある。石室の位置は確認されていない。

第20号墳 (大字勝浦字新原3780—No.350038)

現存内径56m,周溝を含めた復元外径67mに達する超大型円墳で、県下では最大のグループに

入る。墳頂部は削平され、かつては縫殿宮が奉祀され、現存高約7m。巾4m前後の周溝をめぐらす。主体は未確認。

**第21号墳** (大字勝浦3783-No.350037)

現存径約20mの円墳。20号墳に西接し、5.6mしか離れていない至近距離にある。墳頂部に、「新原の百塔」として知られる板碑群が建立されている。文永十一年銘(1278)をもつ碑もあり県指定考古資料。

**第22号墳** (大字奴山-No.350039)

前方後円墳。現存全長44mで、前方部を略南西に向ける。現存前方部巾30m、同くびれ部巾21m。後円部裾部を改変されているが、全体的に遺存度は良好。前方部・後円部共に現存高約5mで、17号墳に比し発達している。後述する23号墳の石室構造からみても、17号墳よりも後出するとみられる。前方部右隅角から約11m離れて、径約11mの円墳2基が営なまれている。

**第23号墳** (大字勝浦-No.350032)

円墳22号墳に南接する雑木林中にあり、至近にさらに2基の円墳がある。奥壁最上段の石材が抜かれているが、他は完全に残る。柱状玄武岩割石を多用し、整齊な感を受ける。石室高は4m前後とみられ、側壁の持ち送りは急である。複室と思われる。地形との関係か、他墳とは異なり、略東に開口する。

**第24号墳** (大字勝浦-No.350040)

20号墳と道路をはさんで相対する位置にあり、現存径約33mと大型の円墳。高さ5mで、隆々としている。主体は未確認。

**第25号墳** (大字奴山字原-No.350046)

前方後円墳。前方部頂部が削平されているため、後円墳が異常なほど高く見える。現存全長56mで前方部を北西に向ける。現存前方部巾39m、同くびれ部巾17m、同後円部径31m、同後円部高8m。前方部が発達している。南接して半壊した2基の円墳がある。

**第26号墳** (大字奴山字原の前-No.350042)

現状は20×18mの長円形を呈するが、前方後円墳である可能性を残す。玄室右側壁上段の石材が抜かれている他は完存。複室とみられるが、注目すべきは奥壁に設置された石棚で、奥行1.8mの長大なものである。玄室長は約4m、巾2.1m、高さは3mを軽くこえる。23号墳よりは、みかけは劣るが、基本的には同工とみられる。

**第27号墳** (大字奴山字伏原-No.350043)

26号墳とは十数mしか離れていない。現存全長43mで、前方部を南西に向ける。現存前方部巾16m、同くびれ部巾10m、後円部径22mとスマートである。前方部は改変著しい。後円部には略西に開口する横穴式石室が営なまれ、左側壁上段が破壊されている。割石が多用され、26号墳石室よりも整齊な感を受け、23号墳石室に近い。

**第28号墳** (大字奴山字伏原-No.350044)

27号墳に東接し、現存径11mの円墳状を呈する。大きな陥没がある。

**第29号墳** (大字奴山字伏原-No.350045)

現存径18mの円墳。前方後円墳の可能性もあるが、前方部とされる部分は、稍低きに過ぎるキライがある。東接してさらに1基の小円墳がある。

**第33号墳** (大字生家-No.350051)

前方後円墳。前方部は家屋建設により大破している。前方部を山つきの南東側に向ける点が特徴的である。

**第34号墳** (大字生家-No.350049)

大都賀神社拜殿の西側にある。墳丘は大破しており、石室天井石の一部が露出している。北に延びる尾根上・斜面にも数基が営なまれたものと推定される。

**第36号墳** (大字勝浦字新原3790-2 -No. )

旧火葬場内にある。円墳と思われるが、過半を失っている。

**第37号墳** (大字勝浦字新原 -No. )

墳形は稍判断に苦しむ。畑中に草地としてあるが、余り高くはない。石材の露出が、西・南側にみられる。東方の道路際にも裾部を削平された円墳2基がある。

**第50号墳** (大字須多田字立石-No.300096)

周囲を削平され、円墳状となっているが、前方部を思わせる痕跡がある。とすれば、立地上他例とは稍異なる。略南に開口する複室と思われる石室の奥壁最上部が破壊され、前壁の一部も露出しているが、遺存度は良好。高さ4.3m前後と高い玄室となり、両側壁は急角度で持ち送られる。石積は美事であり、27号墳に近い。

**第52号墳** (大字須多田字上ノ口-No.350095)

前方部を略西に向ける。前方部と北側縁に周溝が遺存する。主体は未確認。

**第53号墳** (大字須多田字下ノ口-No.350097)

天降神社が後円部南側に建立されている。現存全長80mの大型前方後円墳。現存前方部巾56mと発達している。前方部は2段築成で、前方部南側縁には周溝・周堤が現存する。後円部背面が改変著しい他は遺存度は良好。踏査時に、前方部外表から円筒埴輪片と須恵器甕片を採取した。

**第56号墳** (大字須多田字二夕塚-No.350099)

通称二夕塚。台地先端の現水田中に屹立し、ひと際目立つ存在である。現存径36m以上の大型円墳。墳丘上位に略南に開口する単室横穴式石室が営なまれている。右側壁上部が破壊されているが、閉塞石をも含めて他は完存する。玄室は、長さ3m、巾約1.6mの長方形プランで側壁最上段では巾0.9~1.15mと狭まる。奥壁の腰には大石を配し、高さ1.6m以上。周壁には

赤色顔料が塗布され、天井には 2.2～ 2.4m を超える巨石 2 枚を架構する。41号墳石室と相似た構造をとり、須多田古墳群中では最古式の横穴式石室と思われる。

#### 第125号墳 (大字勝浦字新原3751-No.350035)

17号墳の東南にあり、現存全長54m で前方部を北西に向ける。現存前方部巾18.5m，同くびれ部巾15m，同後円部径32m。現存前方部高 5 m，同後円部高 7 m。前方部右隅角が削平されている他は遺存度は良好。17号墳よりもひとまわり大きいのが、プロポーションは同じとみられる。後円部背面には、巾約 3 m の周溝と周堤が遺存する。後円部西南側中段に盗掘孔らしき陥没があるが、未確認。

有力古墳群内部では、須多田古墳群に典型的に認められるように、西から東へと漸次築造されたと思われるが、空白部分（湮滅）が多いのが惜しまれる。また、第20号墳は、規模では周辺の前方後円墳を凌ぎながらも、円墳にとどまっておき、内・外の規制を受けたと思われる。

## III 各古墳の調査

### III-1 第 17 号 墳

#### 墳 丘 (Fig. 3・5・6 参照)

低丘陵の縁辺部に営まれた前方後円墳で、前方部を北西に向ける。十数年前に、果樹園等造成のため、北半が削平されている。前方部右隅角部は南接した畑の耕作時に漸次削平されているが、他は比較的旧規をとどめている。

墳丘は全て盛土から成り、主軸上では後円部で3.2m，前方部で2.4m の厚さがあり、葺石を置く。盛土作業に先行して表土を除去して黄褐色土 (Fig. 6 のドットを付す部分) を露出させているが、B点以北とH～J間 (約 8 m) はカットされて下の赤褐色土 (Fig. 6-1) に達している。このカット作業は削り出し技法と称すほどのものではなく、墳丘範囲決定を主たる目的としたとみられる。盛土の大部分はこの二層の地山土が用いられている。

前方部では、まずB～C間を土堤状に盛っており、次に内側のDまでを埋めている。そしていったんF～G間を盛った後円部の土盛が一段落したところでこれをE点まで延ばしている。B・E点ではいずれも黄褐色土を前面に積み、強化に意を尽している。こうして前方部と後円部の核とを形成した後にE～D間を埋めている。B～C・F～G間は基礎部にあたっておりきめ細く盛られるが、他の部分には、多量の土砂が投じられているが、叩き締めは念入りに行なわれている。現存両端はA・I点にあるが、いずれもカット点よりも外側にあり、これは作業

の過程で当初の予定が変更されたことによるとみられる。

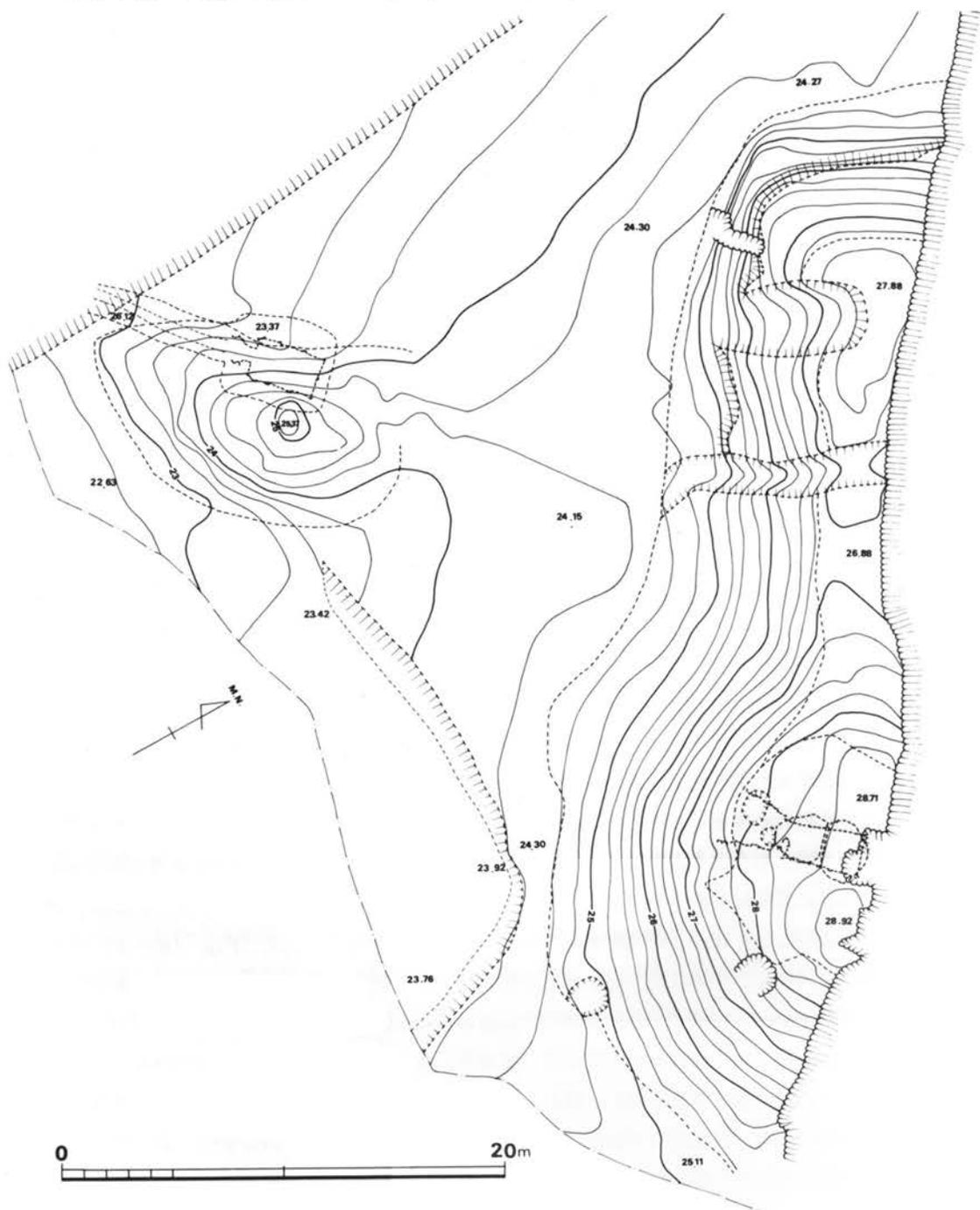


Fig. 3 第17・123号墳地形測量図 (1/300)

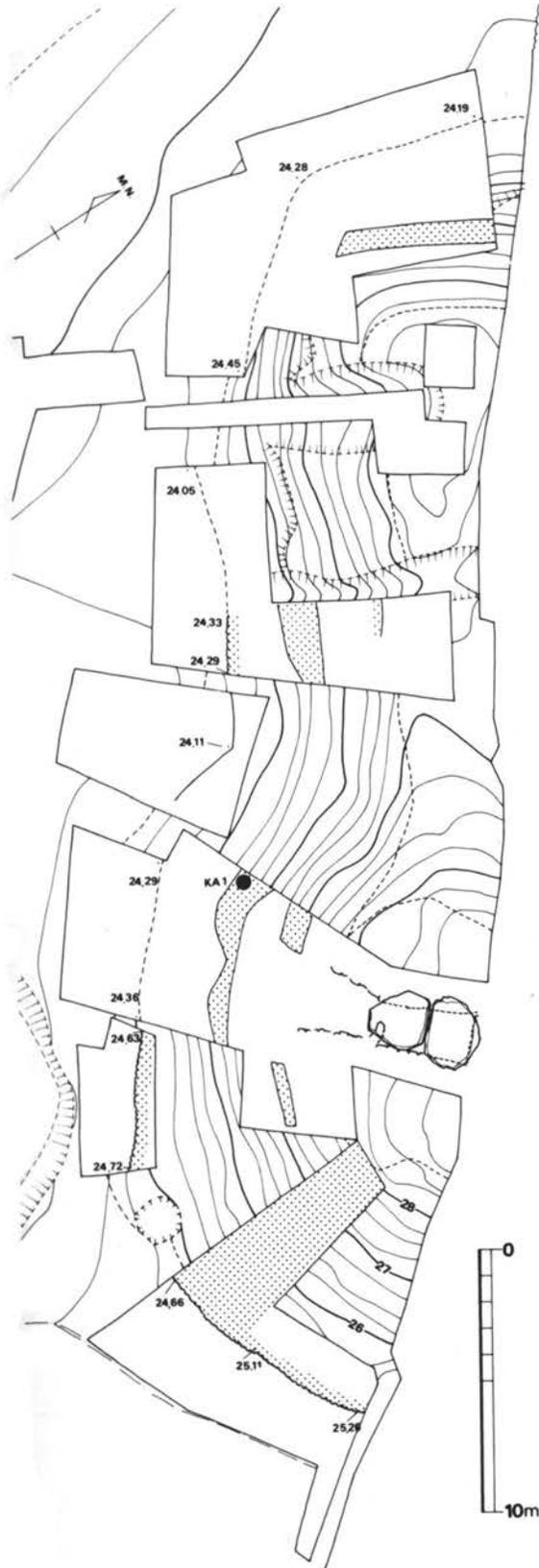


Fig 4 第17号墳全体図 (1/300)

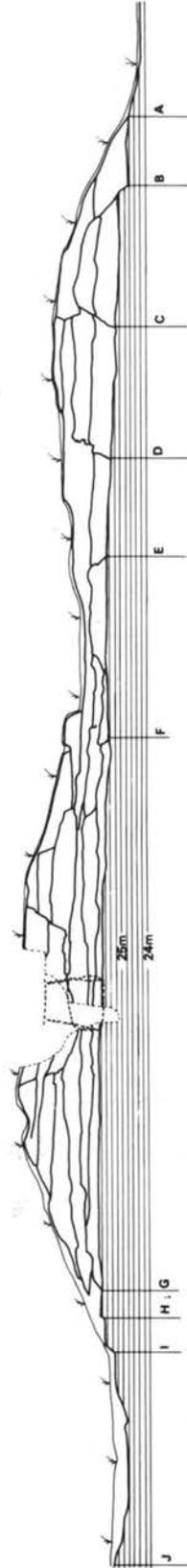


Fig 5 第17号墳墳丘断面図 (1/300)

墳丘の旧規のうち、後円部端はI点にあり、径約29mと復元される。前方部前縁裾は、裾部葺石の根石が既に除去されているが、上段葺石の遺存度からみて現在の地形変換線とさほど変わらないとみられ、とすれば全長約50mと復元される。くびれ部の接続点は、前後の葺石の根石あるいは据付痕が確認されており、巾17.7m前後とみられる。前方部の巾は、3案が考えられる。A案は接続点から前方部側縁葺石の根石（据付痕）線約2.5mをそのまま延長するもので、巾約19m。B案は、A案の根石線からこれに続く地形変換線（途中で外側に屈折する）を延長したもので、巾約28.6m。C案は、前方部のコンター線と略平行させて設定したもので、巾約31.4m。A案は、後述する本墳の所属年代を考慮すると古様を帯びすぎるキライがあ

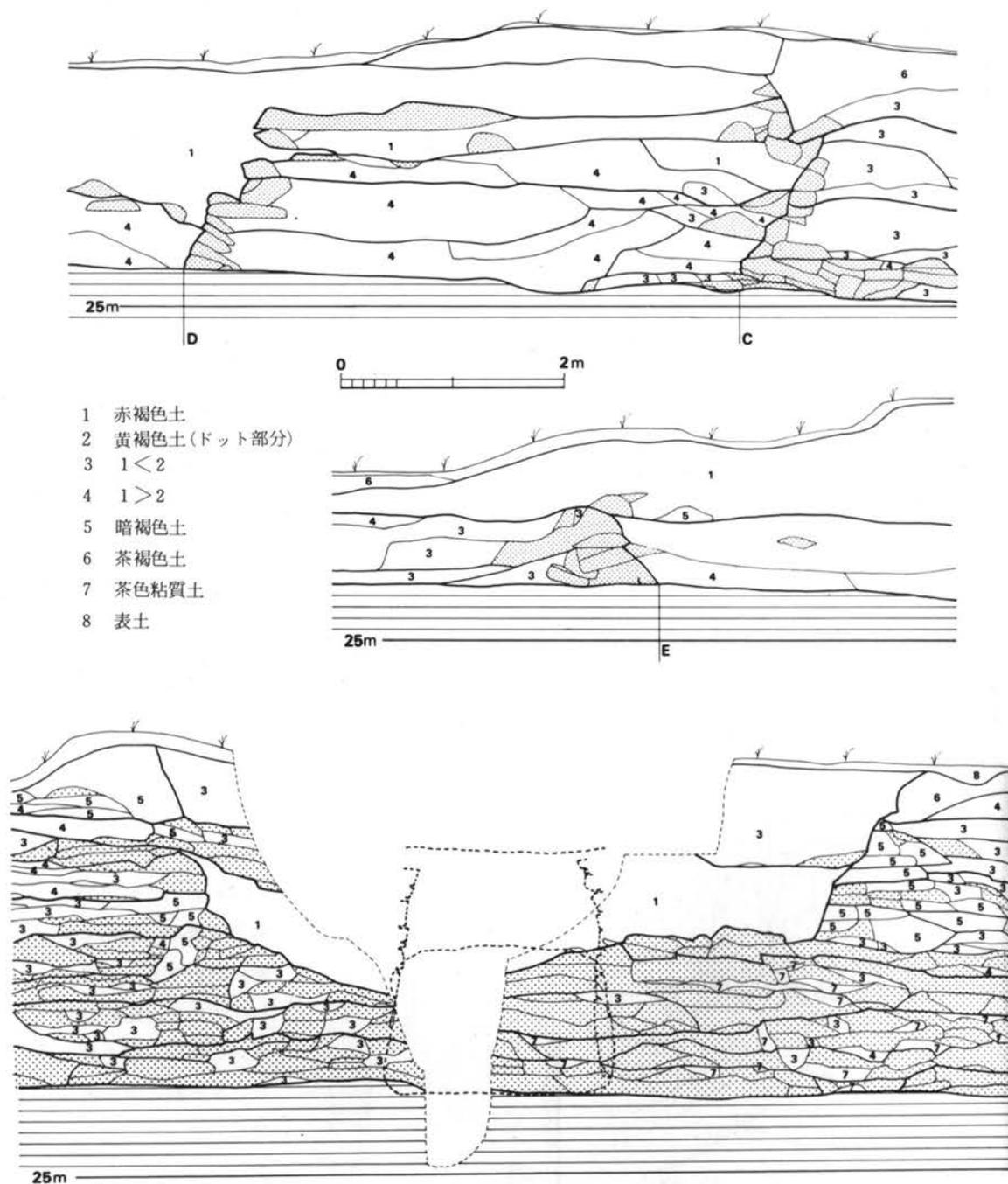


Fig. 6 第17号墳墳丘断面図 (1/60)

る。現状に最も忠実であるのはB案であるが、それにしてもなお後円部径よりも少しく狭い点と、屈折する点で疑問が残る。C案は、前方部巾が少しく後円部径をこえ、石室の年代観と合

致するが、現況と齟齬している。以上3案のいずれもが難点を有するが、ここでは、31m前後としておきたい。

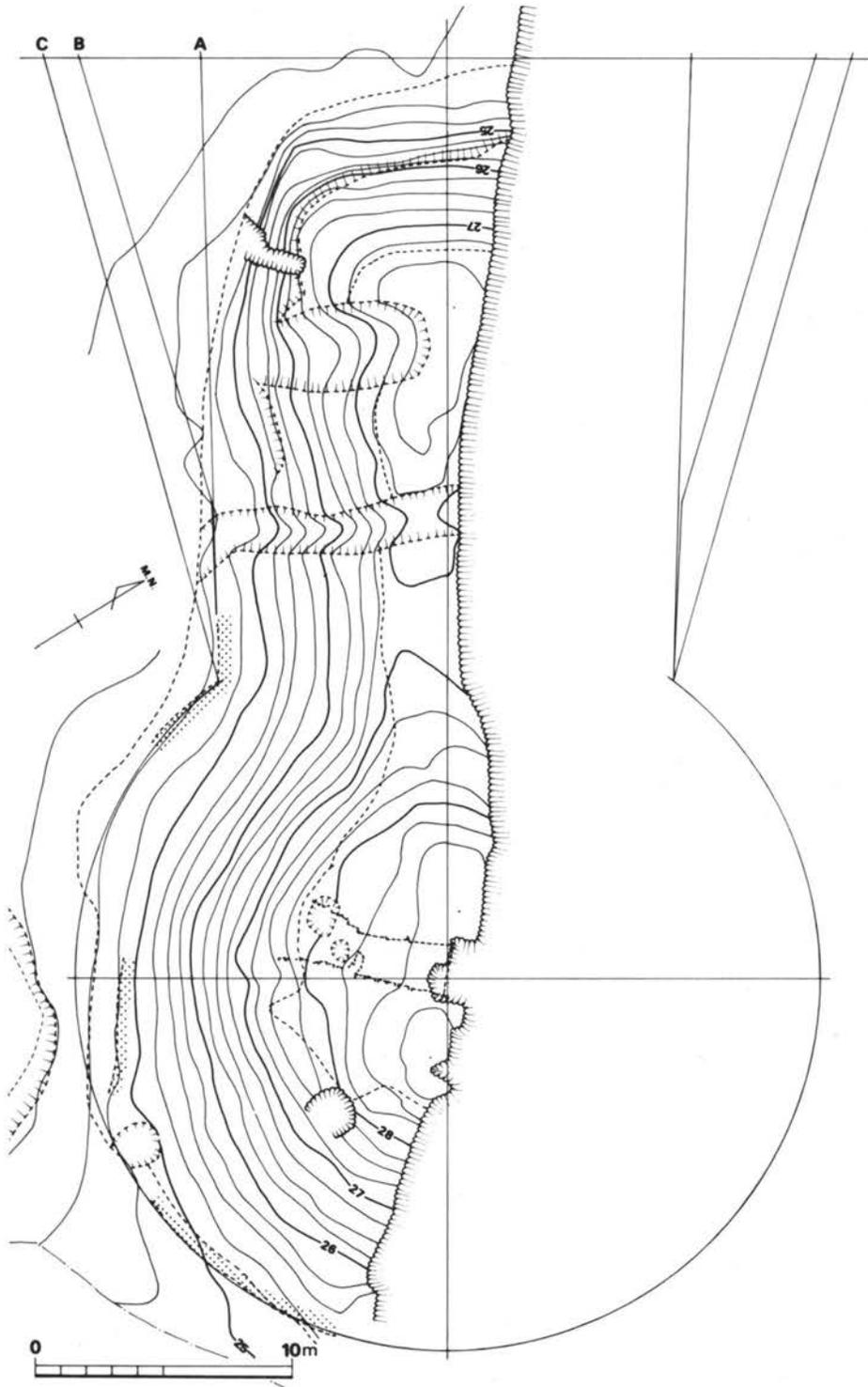


Fig. 7 第17号墳墳丘復元図 (1/300)

現存高は、前方部で約3.7m、後円部で約4.6mである。当初は、各約4m、約5mであったと推定される。段は明確ではないが、2段と思われる。

### 石室 (Fig. 8・9)

略南西に開口する単室横穴式石室で、墳丘北半削平時に奥壁を中心として破壊を受けたが、予想以上に遺存度は良好である。石室は、いったん後円部G～F間を略石室高まで盛った後これを掘り割った墓壇内に構築されている。奥壁腰石は地山2層目の赤褐色土層に少しく食いこむが、地形が南に傾斜する関係で爾余の腰石は盛土中にある。

石室全長は6.5mに達し、玄室内法は、長さ約3.3m、巾は奥壁部で2m、横口部で1.65mとなり羽子板状のプランを呈する。高さは中央部で1.5m強と低い。右側壁前半を除く周壁基部には腰石が据えられ、その高さの過半が埋めこまれている。以上には玄武岩天石 (Fig. 8で▲印を付す石は玄武岩を築造時に割ったもの) が積まれるが石材の選択に余り意は払われておらず、実用一点張りの感を受ける。右側壁前半は盗掘時の破壊により強く内傾しているが全体に内傾度は緩く、直方体に近い。

床には全面にわたって玉砂利が敷かれ、周壁と同様に赤色顔料が塗布されている。奥壁前面は3石から成ったと思われる仕切石で区切られ、そのうちの1石が現存し、14cm程突出する。仕切石によって画された屍床は巾1.1～1.2mと広く、床は仕切石前面よりも一段低かったと見られる。

天井は、厚さ0.3～0.4m、巾2.2～2.3m、長さ2～2.25mに達する巨石2枚から成るが、崩壊の危険性があったため手前の1石はブルドーザー(D60S)にて除去した。

横口部は、左偏して2本の柱状玄武岩が側壁に接して立てられ、袖を形成するという特異な構造をとる。左のそれは石室内に横倒しに近い状態となっていたため除去した。同材は長さ1.6mにおよぶが、約0.7mあまりが埋めこまれており、強度に対する配慮を窺える。この柱状の袖の上面は左右で高さが異なり、また左側壁の上段に先端の折れた玄武岩一石が突出しており、この上面に天井石が庇状に架構されている。横口部の高さは、上述の突出する石材が右袖石上に達し、また床面に仕切石が置かれたとすれば、1.1m前後と推定される。巾は、上部で0.3m、床面で0.5m弱と極めて狭い。右袖石に接して前壁状に見える部分は、前庭部の始まりでもある。横口部が左に偏在するのは、袖石を両壁に接して立てると予め用意した閉塞石では巾が不足し、このため設計変更を余儀なくされた結果とみられる。

閉塞は、この袖石に長さ1.3m、最大巾1.1mの石をもたせかけ、基部を中心として数石を置いて裏ごめとしているが、これは追葬時のもので、初葬時には第2次墓道最先端近くに現存する石材を裏ごめに用いてより念入りに行なったと推定される。

横口部前面には、天井石が架構されない袖状の羨道側壁が接続する。左壁は2.25m、石壁は2.9mと長さが異なり、巾は横口部で1.3m、先端で2.3mと「ハ」の字状に開く。石材は概して

小ブリとなり、積み方もより雑となり、盛土を切りこんだ椁壁内側に、玄室側壁先端を支える

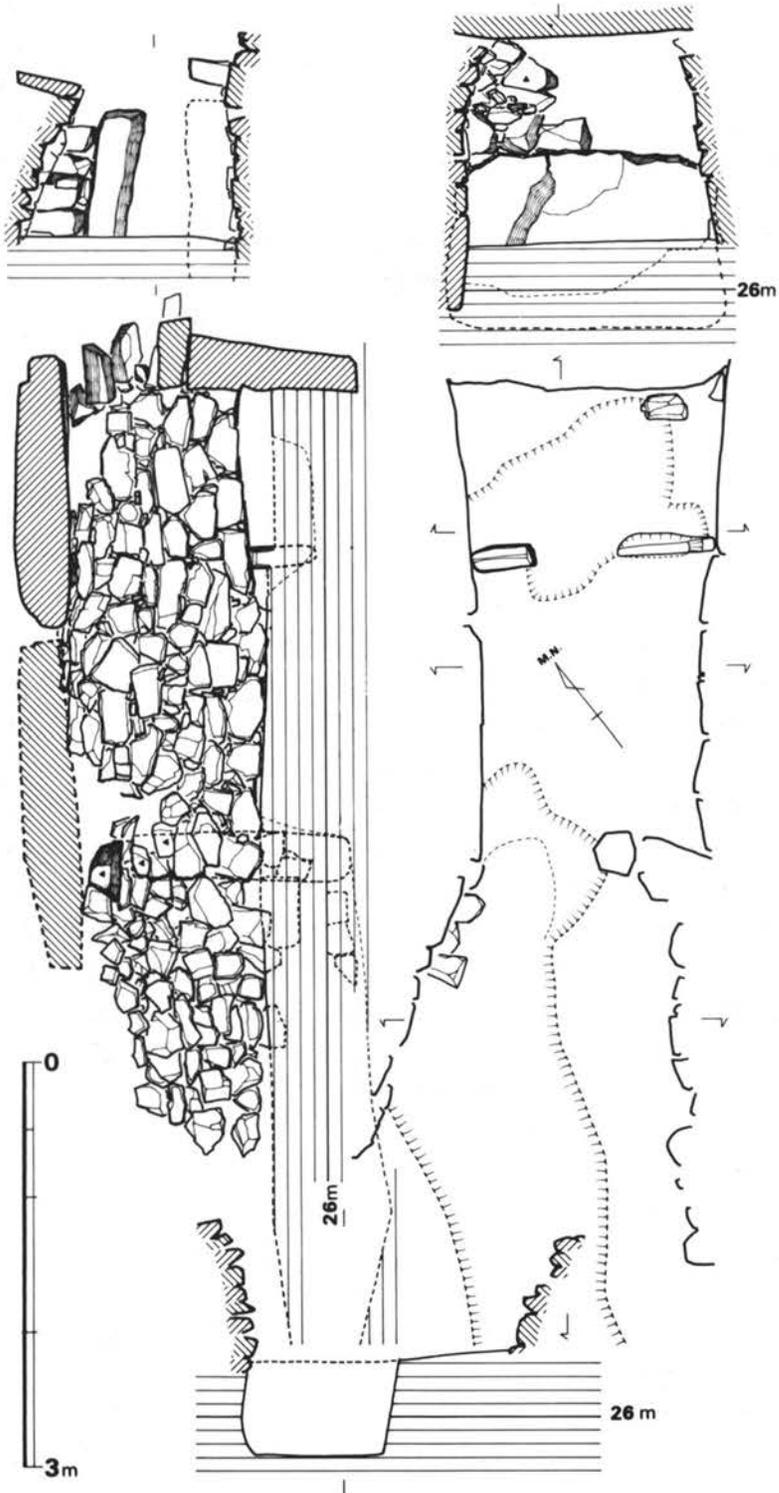
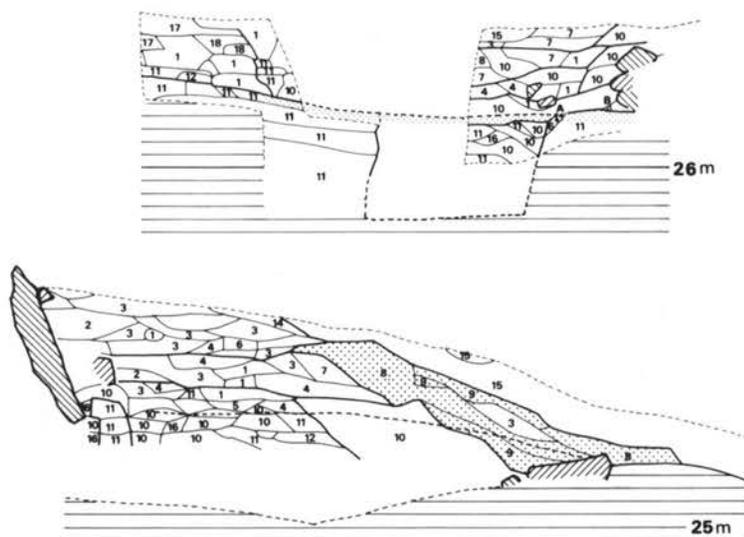


Fig. 8 第17号填石室実測図 (1/60)



- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 黄色粘質土(混炭性)   | 10 褐色弱粘質土(混炭粒) |
| 2 褐色粘質土        | 11 赤褐色弱粘質土     |
| 3 黄褐色弱粘質土(混炭粒) | 12 灰褐色粘質土(混炭粒) |
| 4 3+赤褐色土(混炭粒)  | 13 暗赤褐色粘質土     |
| 5 1+赤褐色土(混炭粒)  | 14 黄赤褐色粘質土     |
| 6 暗褐色弱粘質土(混炭粒) | 15 14+8        |
| 7 6+3          | 16 10+11       |
| 8 黒褐色弱粘質土      | 17 茶褐色粘質土      |
| 9 8+3          | 18 17+1        |

Fig. 9 第17号墳羨道部土層図 (1/60)

形で外傾させて積まれている。先端近くでの高さは0.9m。羨道部で注目されたのは、閉塞石基部においてよりもっと明瞭に追葬が確認された点である。初葬時の前庭部の床面は Fig. 9 の11層にあたる赤褐色土(地山第2層)であるが、これを巾1~1.35m、深さ0.7~0.9mにわたって掘りこんだ第2次墓道が設定されているからである。これが左に偏在するのは、右側壁寄の初葬時床面に供献された鉄製工具類を意識してのことと理解されるが、一段掘り割る点については不可解である。

### 遺物出土状態

#### 墳丘内

前方部に主軸と直交して設定したトレンチの所見では、器台を中心とする破片が平・立面的に散在しており、0.9mのレベル差をもって同一個体に属すると思われる破片の出土例すらある。

### 墳丘外表

羨道左側壁略延長線上とあたる中段から、須恵器大甕（KA1）が原位置を保って出土した。同器は底部を穿たれており、一石を置いて据え置かれていた。把手付高杯片は、石室前面の葺石間から採取された。

上記の他に裾部葺石根石付近から、多くの破片が採取されている。後円部背面からは須恵器大甕（KA2）片が、前方部石側縁からくびれ部にかけての位置からは器台・甕・壺片が出土している。

### 玄室内

徹底的な盗掘を受けており原位置を保っての出土例はないが、屍床内に甲冑の一部が置かれた形跡がある。

### 羨道部

右壁沿いの初葬時床面上から、供献された多数の鉄製工具類が一括状態で出土している。木・鍛造工具類に限られ、農・漁撈具を含まないことが注目される。

### 第2次墓道

鋒を玄室に向けた鉄鎌が、5～10cmのレベル差をもって上・下2群に分れて出土した。

### 出土遺物

#### 石室内

装身具	ガラス小玉		
工 具	手斧 1	刀 子	
武 具	衝角付冑（小札鋌留式）1	鋳 片	2セット分？
	短 甲（鋌留式）	小 札	
	頸 甲	肩 甲？	
武 器	直 刀	劍	
	短 刀	短 劍	
	鉄 鎌	鹿角刀装具片	
馬 具	鍔 片？		
その他	鋌留金具片	縁金具片？	
	鉄地金銅張金具片	不明棒状銅製品	
	糸切底土師器		

#### 石室羨道部

工 具	鑿 （3種）	錐 （2種）
	鉋 （3種）	鑿 （2）
	鉄鉗 （1）	不明大形銑状鉄器（1個体片）

その他 木心鉄板張金具 (1)

墳丘中

土器 須恵器 器台片

土師器片

石器 石斧

墳丘外表

土器 須恵器 把手付高杯 1 大甕 2  
甕 壺  
高杯

土師器片

### Ⅲ-2 第 123 号 墳

墳丘 (Fig. 3・10・11参照)

17号墳裾部とは10mと離れていない位置にある。伐採直後の墳丘は15m×8mの長円形を呈し、南側からのみかけの高さは約2.7mあり、頂・裾部には玄武岩立石数基があった。調査の結果、内径13.3m前後の墳丘の北西側過半が削平されていることが明らかとなった。

墳丘築成に際し、表土を全て除去しており、南東側ではまずA点までが盛られている。ここまでは、石室構築と平行して盛土され、天井石架構後これを覆ってB点までが盛られている。

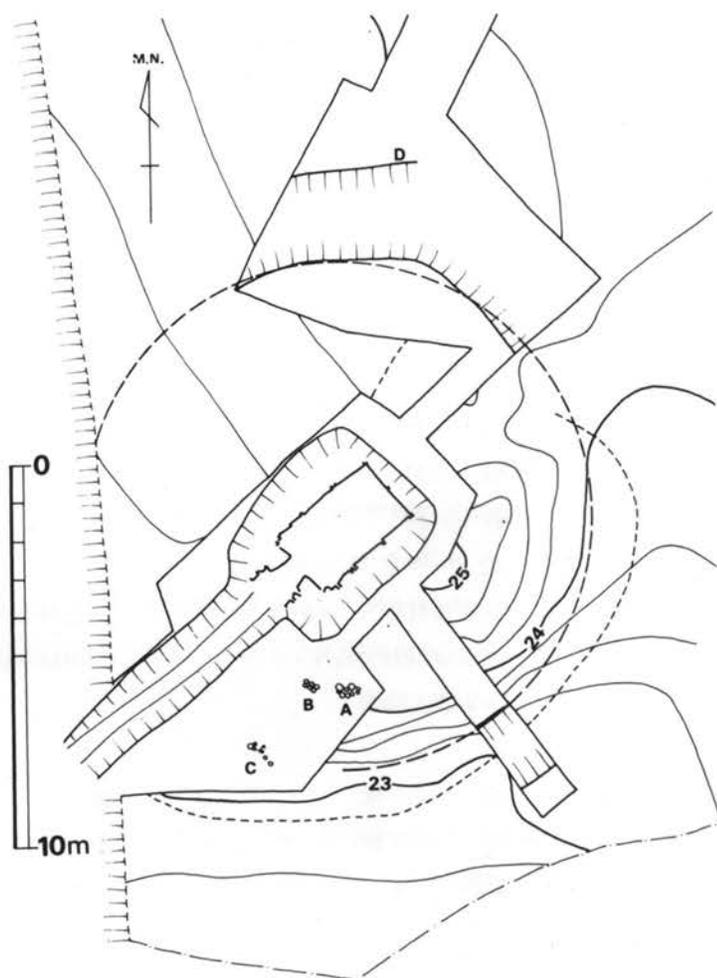
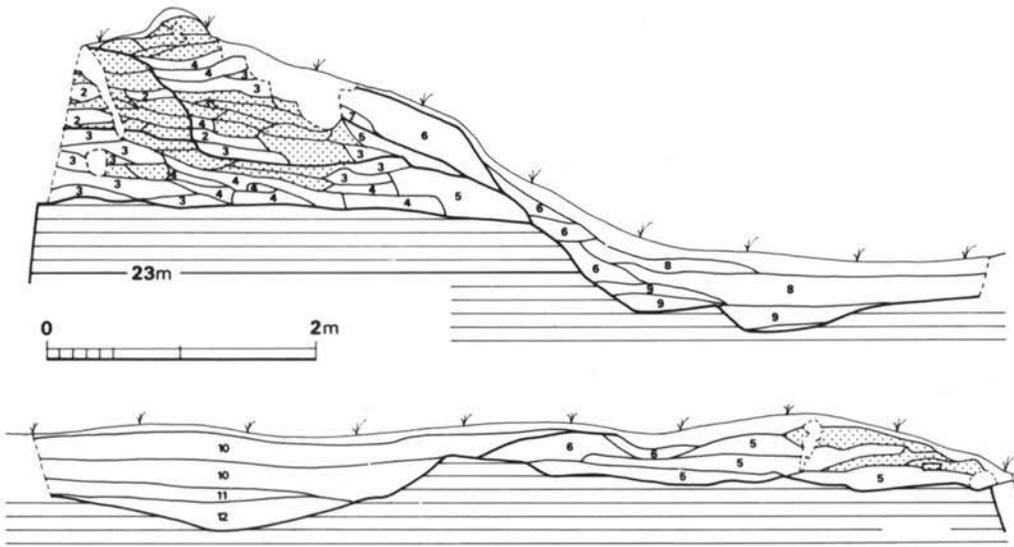


Fig. 10 123号墳全体図(1/200)



- |           |              |           |
|-----------|--------------|-----------|
| 1 褐色粘質土   | 6 暗褐色        | 11 2 + 5  |
| 2 茶褐色粘質土  | 7 5 + 6 弱粘質土 | 12 11 + 5 |
| 3 赤茶褐色粘質土 | 8 黒褐色粘質土     | 13 黄灰色粘質土 |
| 4 赤褐色     | 9 8 + 6      | 14 2 + 6  |
| 5 赤色      | 10 4 + 9     |           |

Fig.11 第123号墳丘断面図(1/60)

この表面を地山第一層の黄褐色土 (Fig.11でドットを付す部分) を用いて固め、これを墳丘の核となしている。次にC点までを盛るが、ここまでの作業は緻密であり、見事である。最後に墳丘規模と外観とを整えるための盛土が行なわれるが、一転して層は厚くなる。周溝は浅く、北側で巾2.5mと少しく広がっている。

### 石室 (Fig.12)

地山を1.6~1.95mの深さに穿った墓壇底に営まれているため、石室上部を失ないながらも遺存度は比較的良好であった。墓壇は、4×4.8m (上端値)の不整長方形プランを呈し、短辺の一辺をさらに掘り割って墓道を設けている。

石室は、全長4.15mの単室横穴式石室で、略南西に開口する。玄室長は、2.95m。巾は、奥壁部で1.8m、前壁近くでは2mと少しく広がるが、前壁両隅角は直角とならず、前壁では1.6mと狭まる。現存高は2m。

周壁基部には、過半を埋めこんだ腰石を配しているが、みかけの高さは最高でも0.4mと低く特徴的である。構築に際しては、玄武岩天石を控えを長くとり要所に小石を充填しつつ積み上げ、強度・みかけの両面において見事であり、整齊な感じを受ける。石材も柱状材が多く、吟味が行なわれている。基部から除々に持ち送られ、両側壁では1.3mの高さで1.6m弱に狭ま

る。隅角部は両壁にまたがって石材を置く部分（□印を付す部分）もあるが、未だ部分的な使用にとどまっている。床には、下段に平石を置き、この上に円礫を敷いたとみられるが、全て盗掘時に除去されている。

横口部は、高さ0.7m、巾は上部で0.5m、下部で0.6mと狭小である。

これに巾1mで稍外開きの天井石が架構され、短筒な羨道部が続く。玄室周壁に比すれば、粗雑の感を免れない。

墓道は、巾1.6m前後、深さは羨道前面で1.3mあり、現存長は6.2mに達する。地形が開口方向の南西へ向けて傾斜してはいるが、少なくとも隣接する現在の道路の中央に達していたことは間違いない。なお、底面には、横口部仕切石外側から長さ約

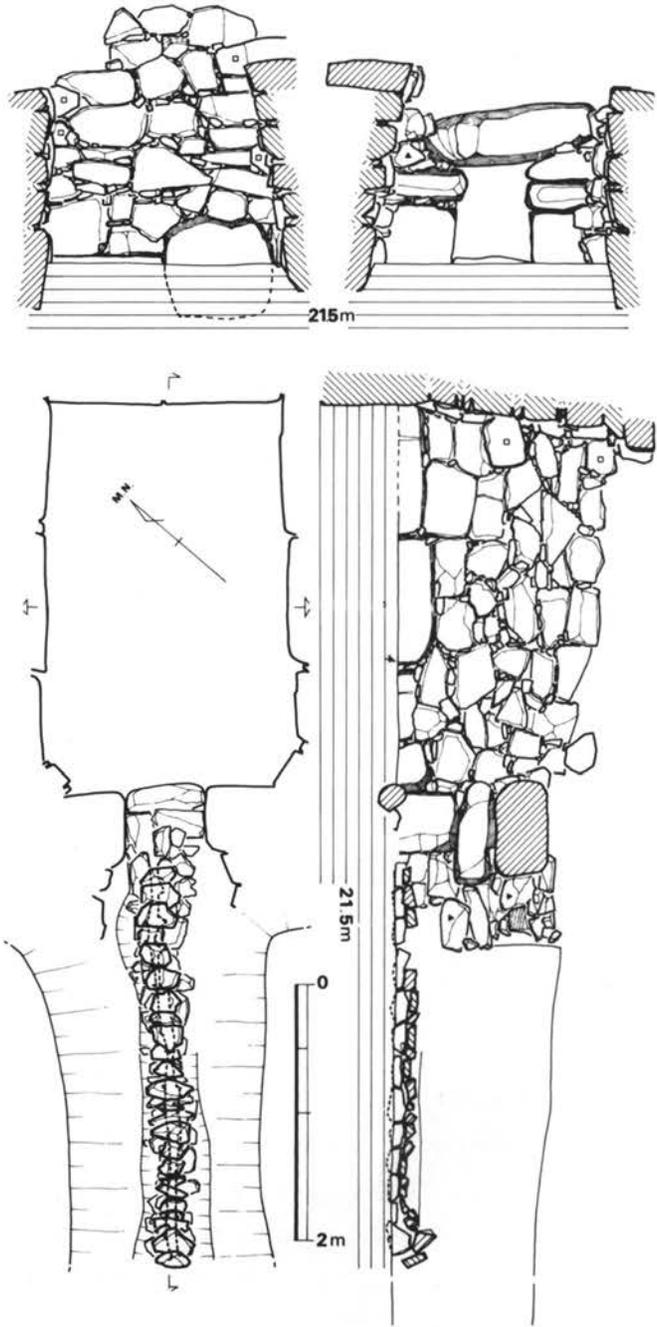


Fig12 第123号墳石室実測図（1 / 60）

3.4mにわたる排水溝が付設されている。巾4~10cm程度と狭まき、蓋石が置かれている。初葬時の閉塞根石あるいは羨道部敷石と思われる平石上に、最先端の側石が置かれていることから、この排水溝は追葬時に設置されたものと見做される。また溝底と玄室床面との高低差は

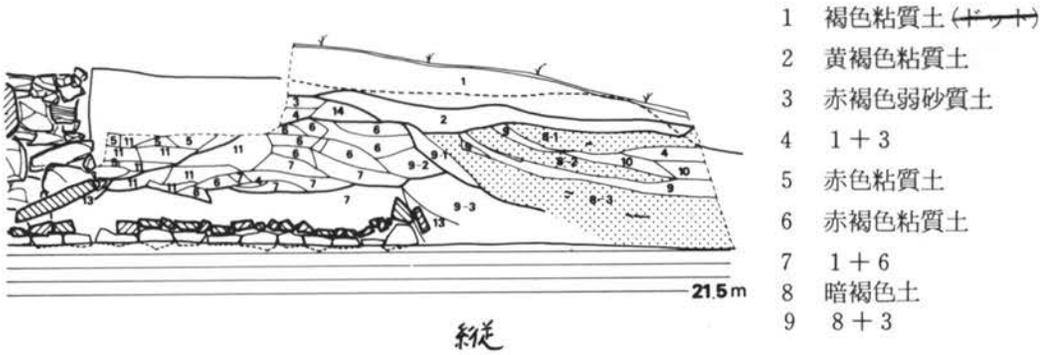


Fig. 13 第123号墳墓道態断面図 (1/60)

極く僅かであり実用的ではないが、死者への思いやりのほどが偲ばれる。

### 遺物出土状態

#### 玄室内

まさに徹底的に荒されており、原位置を保つものはない。

#### 墳丘内

南側裾部盛土中 (Fig. 11のC~D間に相当) 地山から十数cm上位から2群から成る土器群が原位置を保って出土した。A・B両群ともに、蓋を被せて東西方向に各2段3列に並置された容器としての状態にあることが注意される。器形は須恵器杯を主体とし、B群はこれに限られるが、A群には短頸壺 (8・7 A) と土師器大形杯 (3 A・6 A) とが含まれる。供献後、これらの土器群は注意深く土砂で覆われ、これを以て墳丘築成が完了している。

#### 墳丘外

A・B両群の南西約2mの裾部から、やはり供献用容器とみられる土器群が発見された。高杯・甕・台付壺等をも含み、器種は豊富であるが、A・B両群同様様飲食器を含まない。

北側周溝の外側肩部およびFig11の12層中からも、一群の土器を採取した。肩部の出土品は大形甕で、特異な形態をとる。他は高杯2個体分片、甕片であるが、甕は墓道出土例に近い。

墓道堆積土各層からも若干の土器が出土している。Fig.13の13-2層から無蓋高杯片、台付甕片が、9-3層からは、台付長頸壺片・土師器の高杯・壺各1個が、8-3層からは甕・平瓶・土師器片が出土している。土師器と須恵器との間に型式差があり、また層の乱れが認められないにもかかわらず、甕・長頸壺のいずれの脚部をも欠失することを考慮すると、これらの須恵器は破片となった状態で墓道内に埋め房された可能性を残す。ただし土師器は、両器とも略一括状態で底面近くから採取されている。

### 出土遺物

#### 石室内

装身具	碧玉管玉	1	水晶丸玉	1
	ガラス大玉	2	ガラス丸玉	1

	ガラス小玉		土製小玉	5
武器	鉄鏃			
その他	不明鉄器片			
土器	須恵器 甕片			
墳丘内				
土器	A群			
	須恵器 蓋杯	3セット	短頸壺	1
	同 蓋	1	杯(身)	4
	杯(蓋)	1		
	土師器 大形杯	2		
	B群			
	須恵器 蓋杯	6セット		
	赤焼き 杯	1		
墳丘外裾部				
土器	C群			
	須恵器 杯(蓋)	1	杯身	1
	高杯	1	長頸壺	1
	甕	1	短頸壺	1
	同 蓋	1		
	土師器 大形杯?	2	高杯	
	高杯脚部	2		
北側周溝	須恵器 甕	2	杯	1
	有蓋高杯	1	甕	
墓道土器	13-2層			
	須恵器 無蓋高杯	1		
	9-3層			
	須恵器 台付長頸壺			
	土師器 高杯	1	埴	1
	8-3層			
	須恵器 平瓶	1	赤焼き 甕	1
	他			
	須恵器 台付甕	1		

### III-3 第 18 号 墳

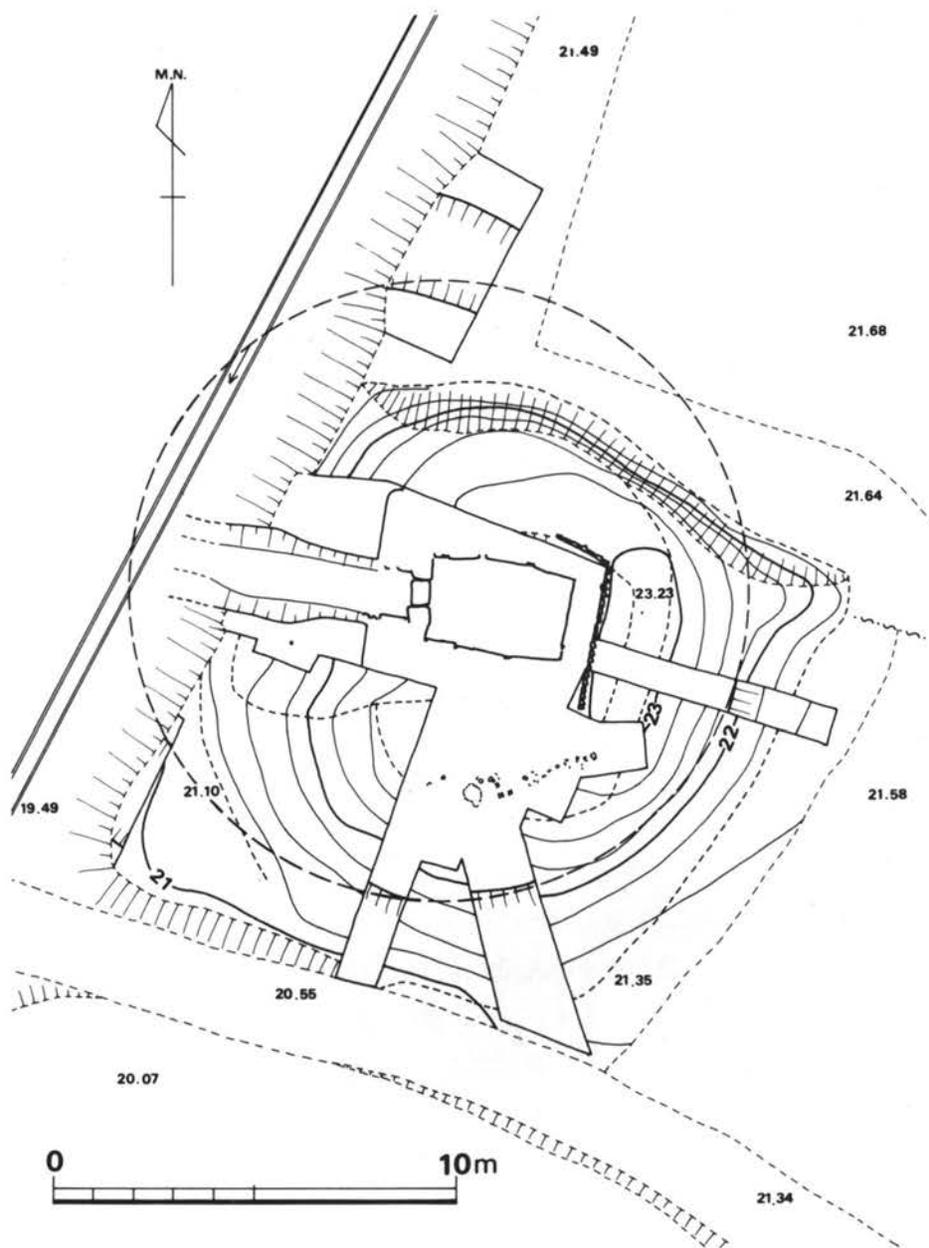


Fig. 14 第18号墳全体図 (1/200)

#### 墳 丘 (Fig. 14・15)

123号墳と同様に県道に面しており、伐採直後では、高さ約1.9m、1辺16m前後の方形墳のような外観を呈していた。浅い周溝をめぐる円墳で、内径約15.3mと、123号墳よりもひとまわり大きい。

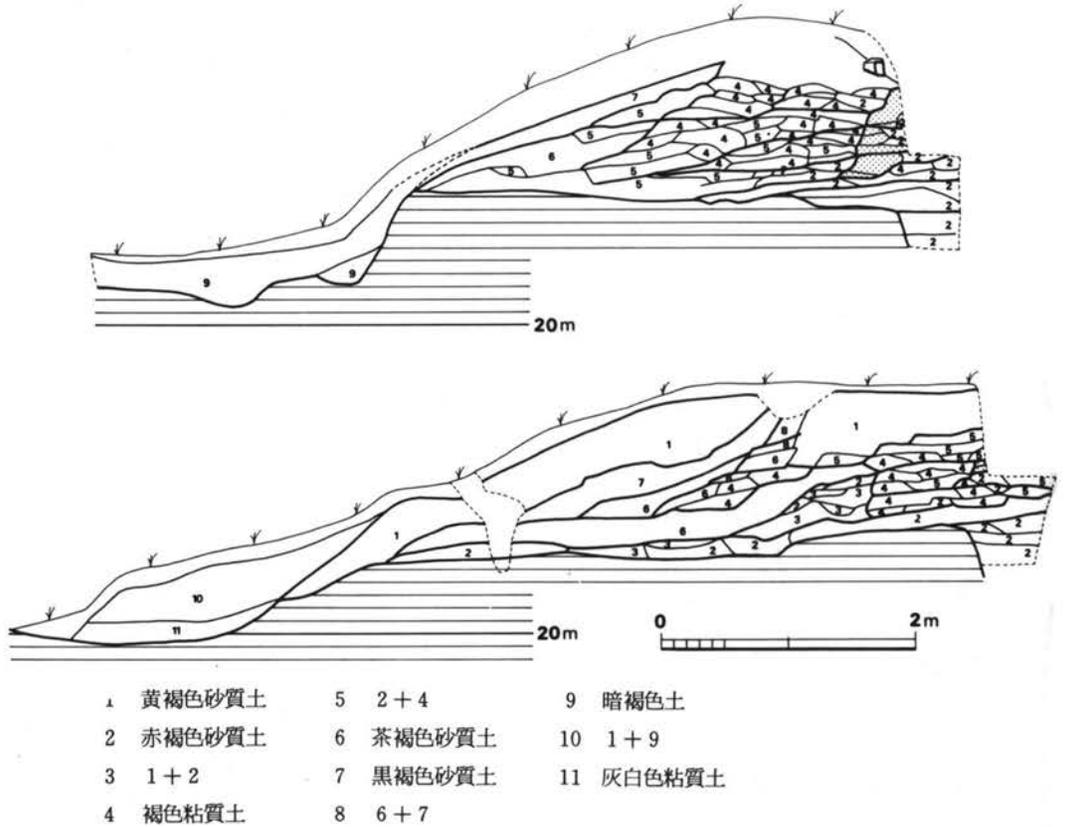


Fig. 15 第18号墳墳丘断面実測図 (1/60)

墳丘築成にあたっては、石室と同様123号墳と基本的には同一手法をとる。ただ天井石架構後これを覆う中核の築成に際してその表面に地山土ではない白色粘質土 (Fig.15でドットを付す部分) を用いる点が異なるだけである。なお、墳丘上位に、石室背後を鍵形に囲む形で、面を石室側に揃えた列石がめぐっている。墳頂部に立てられていた小石祠に伴なうものと思われる。

### 石室 (Fig. 16)

略西に開口する全長4.92mの単室横穴式石室で、地山を約1.6m穿った墓<sup>墓</sup>墳底に営まれている。天井石は全て石室内に落下し、周壁上端部は損壊を受けているが、他の部分の遺存度は頗る良好であった。

玄室は、長さ3.56m、巾は奥壁部で2m、中央部で2.3m強、前壁部で2.1m強と少しく胴張りとなり、123号墳よりも大形である。構築手法は123号墳と同様であるが、仕上りはこれを上まわり、より整齊な感を受ける。玄武岩柱状天石を選択しており、またこれを築造時に割った石材 (Fig.16の▲印部分) の使用も調査古墳中では最も多い。腰石のみかけの高さは奥壁部で45cm、周壁では15cmと低い。周壁は、いづれも床面から0.7m前後までを略直立させるが、以上は

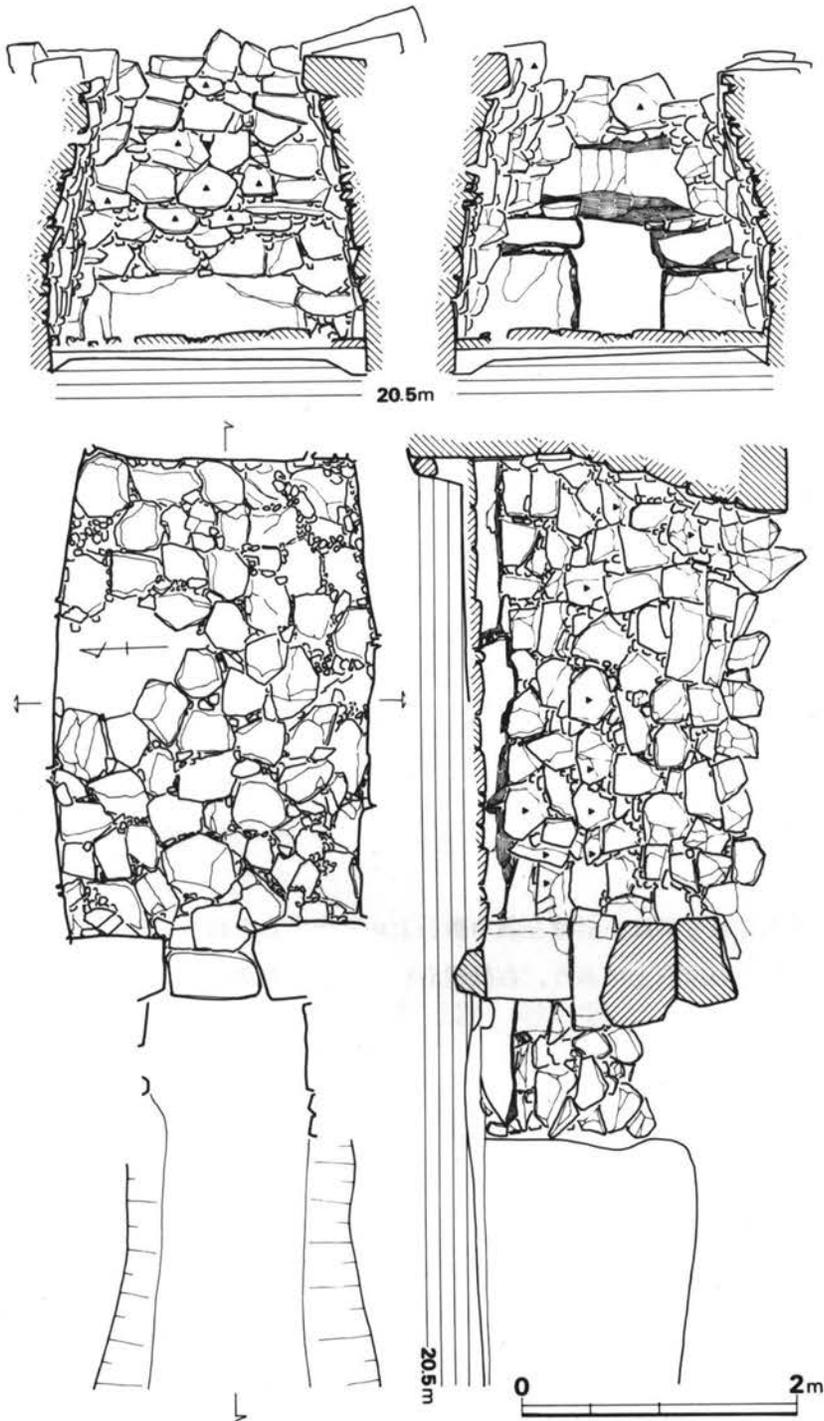


Fig. 16 第18号墳石室実測図 (1/60)

除々に内傾させ、1.8mの高さで側壁間は1.55mと狭まる。現存高は2.25mで、当初は約2.5mと推定される。裏込土は、123号墳と同様地山第2層の赤褐色土が用いられ、十分に叩き締められ

ている。

床には下層に平石を敷き、この上面に円礫を置く。

前壁部袖石間には仕切石を置き、横口部は、巾が上部で0.5m、下部で0.6m、高さは0.85mと狭小である。

横口部に続く羨道部は、天井石の架構されない巾1.1m強、長さ1mの短簡なものである。

閉塞もまた同様で、板石1枚を主体とし、これを袖石外側にもたせかけている。

1	褐色粘質土	6	4+1
2	赤黄褐色粘質土	7	2+1
3	黒褐色粘質土	8	7+5 (弱砂質)
4	暗褐色粘質土	9	緑黄褐色粘質土
5	赤褐色粘質土	10	4+2

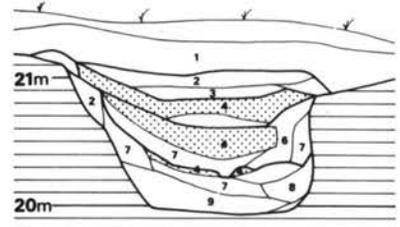


Fig. 17 第18号墳墓道横断面図 (1/60)

墓道は現存長4.1mであるが、西に傾斜する地形と周溝外径とを考慮すると、当初は8mを少しく超えたと推定される。巾は取付部で1.7m弱、現存先端では広がって2.1mとなっている。深さは取付部で1.6m。墓道内は、123号墳と同様に最終追葬時に肩までは完全に埋め戻されている。

### 遺物出土状態

#### 石室内

原位置を保つとみられるのは、前壁左隅角敷石上から出土した鏡板付轡のみである。刀子 (T 5) は同右隅角近くの床石上にあり、右側壁沿いから奥壁右隅にかけてからは鉄鏃片が集中して出土した。

#### 墳丘内

南側墳丘中 (Fig.15のA~B間に略相当する) から約3.4mの長さにわたって略東西方向に並置された一群の土器が出土している (P.L.25-2のA)。西端に完形の甕を置き、甕・壺・高杯が大部分で、杯は1個体に過ぎず、小形容器類を主体とする点で、123号墳のA・B両群と軌を一にする。多量の土砂が盛られ、これによって土器群は覆われて、墳丘が完成したとみられる。

この他に墓道南側肩部からも、一群の土器が出土しているが (P.L. 25-2のB)、これには追葬時の供献品と思われる土器が含まれている。

### 出土遺物

#### 石室内

装身具	金環	1セット	ガラス丸玉
-----	----	------	-------

	土玉		7		
工 具	刀 子		3	手斧	1
武 器	直刀片			鉄鏃片	(2タイプ以上)
金 具	素環鏡板付轡		1		
その他	鉄環?			鋳留鉄板片	
	緑金具片?			須恵器	
墳丘内					
土 器	須恵器	杯 (蓋)	1	有蓋高杯	5
		同蓋	2	小形有蓋高杯	1
		壺	3	壺	1
		脚付壺	2		
	赤焼き	高杯	1		
墓道肩部	須恵器	有蓋高杯	1	高杯脚部	1
		台付壺	1	杯 (蓋)	3
		杯 (身)	3	撮付蓋	1
	土師器	甗 片	1	高杯片	
		甗 片			
盛土中	石 器	石 斧			

### III-4 第 124 号 墳

#### 墳 丘

畑地に開墾する時点で墳丘は完全に削平されており、不審があったためか石室周辺部のみが辛じて巾広の畔として残され、小石祠が建てられた。周溝をめぐらしているが、道路建設用地内に限定された調査のため、全容は明らかではない。ただ周溝の中心を石室中央に仮定すると内径約13.5mの円墳となる。

#### 石 室 (Fig. 18参照)

略南西に開口する全長3m強の単室横穴式石室で、過半を失なっているが、基部の遺存度は良好であった。墓壙は現存上端で、巾2.9m、長さ3.6m強の隅丸長方形プランで、深さ約0.7m。玄室は長さ1.96m、巾は奥壁で1.68m、前壁部で1.56mと方形に近い点が注目される。現存高は0.8m。基部には壙底を少くし掘り下げて腰石を据え、以上は玄武岩天石を積むが、柱状を呈するものはない。同一材を二分割したとみられる石 (Fig. 18の▲印) が、両側壁に別れ

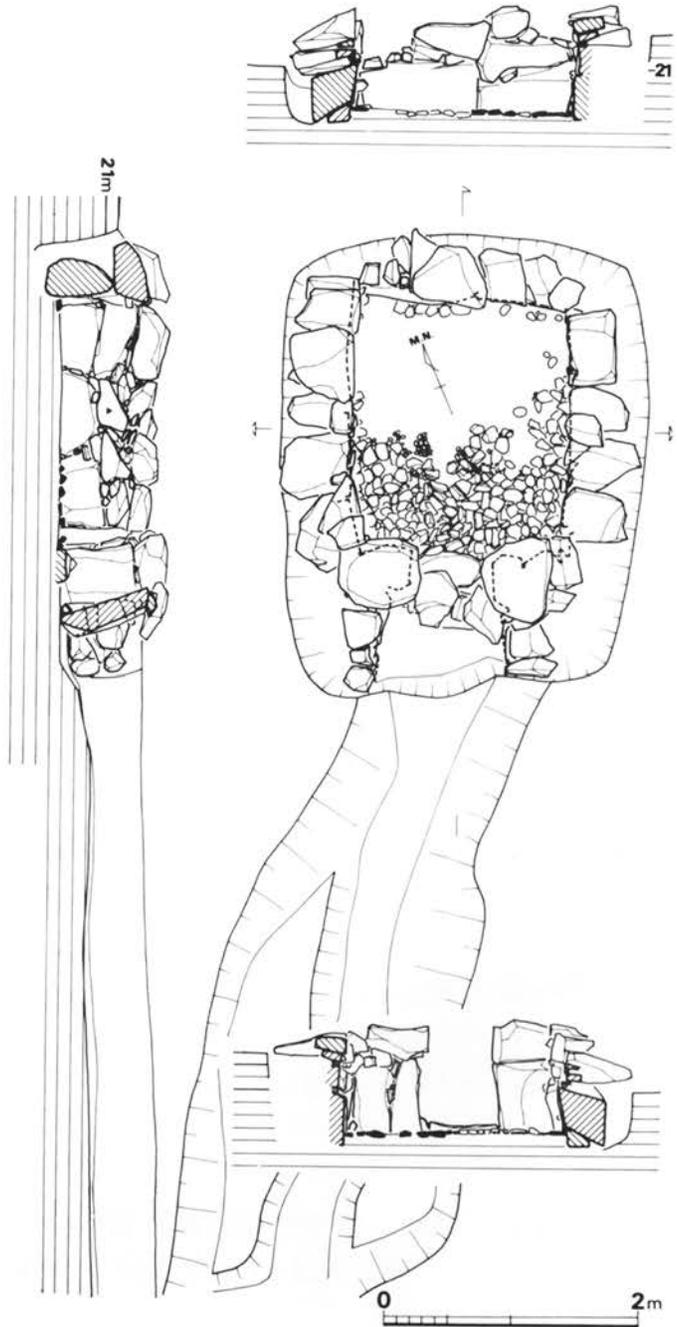
て用いられている。現存部分は直立する。床面には比較的大き目の円礫が敷かれているが、主軸沿いの巾約 0.5mの間は角礫が用いられている。

横口部の巾は 0.5~0.6mで、床に仕切石を置き、現存高は0.8m。

閉塞は1枚の板石を主とし、間隙を小石で充填しており、追葬時のものと思われる。

羨道は、長0.5~0.8mの短筒なもので、先端で巾1m強で、稍裾開きとなる。

墓道は石室主軸と斜交して西に偏り、周溝へと続く。巾1.3~2.2mの不整形で玄室床面よりも一段高く、かつ周溝に向って緩い登勾配となっている。



遺物出土状態  
玄室内

Fig. 18 第124号墳石室実測図 (1/60)

主として2群に分れる。一群は左壁沿いにあり、鉄鏃、刀子を含む。他の一群は右壁沿いにあって刀子と瑪瑙勾玉を持つ。上述の角礫のあり方との関連を想起させる。

墓 道

底面にはなく、暗褐色土の間層上から一群の土器が出土している。

出土遺物

石室内

装身具	銀 環	1	瑪瑙勾玉	1
	管 玉	2	水晶丸玉	1
	ガラス丸玉		ガラス小玉	
工 具	鎌	2	刀子	2
武 器	短 刀	1	鉄 鏃	
その他	縁金具?			
人 骨				

墓 道

土 器	須恵器	高 杯	1	提 瓶	2
		変形甕	1		
		土師器片			

## VI 結 語

### 1 墳丘

調査した4基とも、斜面に近い台地縁辺に立地しており、17号墳は前方後円墳、123・18・124号墳は周溝をめぐらす円墳である。17号墳は全長約50m、後円部径約29m、前方部巾約31m、前方部高約4m、後円部高約5mとみられる。123・124号墳は略同大であるが、18号墳はこれらよりもひとまわり大きい。

124号墳は不詳であるが、残り3墳の墳丘はいずれも殆ど盛土からなり、表土を除去して裾部を地割を兼ねて少しく削り出す点で共通し、作業は極めて周到・緻密である。

### 2 石室構造について

いずれも単室横穴式石室であるが、17号墳石室が先行し、123・18号墳には若干の先後関係があり、次いで124号墳が営まれたと思われる。

17号墳石室は、後述する41号墳石室を小型化したかのような印象を受ける。地山を穿った墓壙底ではなく、旧表土に近く盛土を掘り割った墓壙底に営まれる点でも共通して古式の様相を帯び、両者の営造時期が極めて接近していることを思わせる。10・41号石室は、V-1・2で述べるように極めて特色ある構造をもち、後者を41号タイプ石室と仮称すると、小異はあるが17号墳石室がこれに含まれることは明らかである。その特徴は、1、玄室は奥壁が巾広の羽子板状プラン、2、直方体に近い玄室立面、3、奥壁と平行する屍床の設置、4、天井への巨大石材の使用、5、天井石が架構されない「ハ」の字形に裾広がりとなる短簡な羨道部等に求められる。10号墳石室は、明確な前壁をもたず構造的には竪穴系溝口式石室の範疇に含まれ（註4）、より古式の様相をおび41号タイプとは異なり、10号タイプ石室として独立させるべきと考える。

123・18号両墳が形態・手法ともに酷似することは既述したとおりである。41号タイプとは異なり、地山を深く穿った墓壙底に営まれ、この結果羨道部はより一層短簡となる。また、周壁の隅角をつぶしてこれをドーム状に近くし、柱状玄武岩天石、同割石を多用して、控えを長くとした石積技術は確かなもので、みかけ・強度ともに県内でも指折りと評価され、これを18号タイプと仮称する。

周壁構築に際しての隅角の処理上18号墳に一日の長があり、構造的には少しく後出する。18号の玄室プランは少しく胴張りとなっているが、これは隅角の処理手法—石室強化法の向上と関連し、予め基部より上部の胴張りに備えたことによる。つまり先行する41号タイプ石室では巨大な天井石を架構しているが、これは直方体の玄室立面、換言すれば周壁構築技術と密接な関係にある。18号タイプでは、既述のように天井石の小型化と周壁の強化とを図るために、内傾させて一種のドーム状とする手法をとるにいたっている。41号墳石室の巨大な天井石2枚に

対して精神的支柱である石柱を敢えて立てた経験が、かかる改良の伏線となったと思われる。墓道の長大化は、墓壙の深さと不離の関係にある。

124号墳石室は、開口方向もさることながら玄室プランが正方形に近く、尚上記タイプとは異なり124号タイプと仮称したい。構築手段上では、墓壙と腰石の埋めこみが浅くなっている他は18号タイプと大差ない。

18号・124号両タイプに後続する石室は、東郷1号墳（スベットウ古墳一註5）石室にみられる単室で玄室高が4 m近くと高くなるタイプと、複室で玄室高がやはり高くなるタイプとが想定される。後者の実態が未調査のため、両者の関係は明らかではないが、後者の例としてはⅠで簡単にふれた23・26・27・50号墳が該当するとみられる。いずれも先行する18号タイプの発展型式であり、両側壁最上段間が1 m未満と狭められる点が特徴で、隅角の処理手法も一段と上達し、よりドームに近づいている。

### 3 出土遺物と年代

未整理状態にあるので、出土遺物の意義・性格について論及できないが、营造時期等について敢えて言及しておきたい。

17号墳では、甲冑の出土が被葬者の性格と生活基盤とを暗示している。現存する武器は量的には鉄鏃を主体とするが、当初は、10・41号墳と同様、多種多量の副葬があったと推定される。羨道初葬時床面での多量の工具類の供献状態は、被葬者の掌握する生産体制の一端を示唆し、就中鍛造工具の出土が注目される。

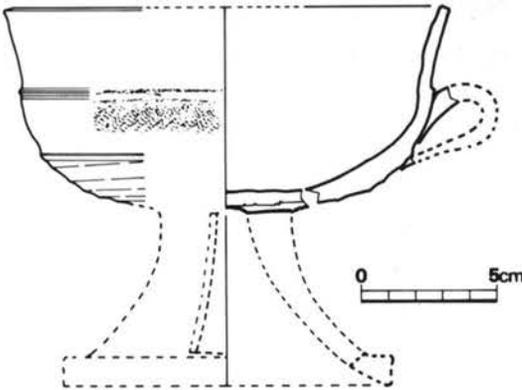


Fig. 19 第17号墳出土把手付高杯実測図(1/3)

土器は、主として墳丘中にあったため盗掘を免れ、良好な資料を採取し得た。17号墳出土例中では、把手付高杯片（Fig.19）が小札鉾留式衝角付冑とともに略石室構築時期を示すとみられる。石室前面から出土した高杯（PL, 35の左列最上段）は明らかに後出する形態をとる。123号墳出土例中、築造期を示すのはA・B両群（PL, 35～37）であり、北側周溝肩部出土の大形甕（PL, 38の右列3段目）も同様と思われる。しかし甕片（同右列最下段）は後出する形態をとる。墓道出

土の須恵器は、A・B群よりも明らかに後出する型式にあたるが、9-3層出土の土師器（PL. 39の左列3・4段目）は須恵器よりも古様をおびる。18号墳の墓道肩部でも、墳丘内出土土器（PL. 40～42）に近い有蓋高杯および台付壺（PL. 43の左列1・2段目）と追葬時の供献品とが混在していた。

以上を要約すると、17号墳の营造期は5世紀末を下限とし、123号墳は6世紀中葉前後に比定され、18号墳は123号墳より少しく後出するとみられる。124号墳の墓道出土土器は、床面よりも一層上にあり、築造期の所産か否かは不明である。けれども提瓶の形態は6世紀後半代に比定され、これを下限として略誤りないと思われる。

#### 4 葬 法

17号墳石室への追葬が構造的に確認されたことは、既に述べたとおりである。主たる被葬者が奥壁と平行する屍床内に安置されたとみられるが、追葬時の埋葬位置は明らかでない。また鉄製工具類の遺存度と第2次墓道の位置からみて、追葬期は初葬時の記憶が生々しいうちと推定される。123号墳では、排水溝の設置状況と土器形式観とからやはり追葬が確認され、三次に及んだ可能性がある。18号墳は、構造的には確認し得ないが、墓道南肩部の土器群に型式差が認められやはり追葬が行なわれている。124号墳も同様であり、墓道出土の提瓶と異形甕との間に型式差を認め得る。

埋葬遺体の位置は、123・18号墳では、玄室プランと内法からみて主たる被葬者を奥壁前面のこれと平行する位置に想定でき、17号墳と同様とみられる。これに対して、124号墳では、遺物の出土状態と敷石の構成とから主軸と平行し両側壁沿いに安置されたとみられ、この差異が玄室プランの方形化を促したと思われる。

#### 5 土器の出土状態について

17号墳出土土器の殆どは、墳丘裾部から破片となって散在した状態で採取されており、原位置を保っていたのは大甕（KA1）のみである。同器は、底部が穿孔されさらに石を置いて安定を図りつつ据え置いている点が注目される。

古墳における古式須恵器のあり方について筆者の考え方を述べたことがあるが（註6）、KA1に関する限りこれを容器と見做せば飲料供献は形式的であり、また意識的に破碎・撒布されていない点で本墳出土の他の土器とは異なる。器台・甕等の破片は石室前面にも散布していたが、主としてくびれ部から前方部右隅角付近から採取されており、個体数が比較的多くまたその本来の機能からみて、いったんは飲食物供献のための容器として用いられたことは明白である。恐らく、供献後にKA1を除く土器群（恐く穿孔されていない）は破碎され破片が撒布されたのであろう。とすれば器種が比較的多く、また破碎・撒布する点で、粕屋郡須恵町・乙植木2号墳例（註6）に近いといえる。けれども、17号墳ではこれまでの所杯類が確認されておらず容器のみに限られる点で、儀礼の構成が異なると考えられる。

石室背後の攪乱土中から鉄鏃、ガラス玉等と共に甕片1が採取されている。41号墳石室内でも須恵器が出土しており、17号墳でも原位置が玄室内であった可能性を残す。当該期の石室内出土例は飲食物供献のための容器である場合と副葬品（他品を納める容器である場合を含む）に限られるが、そのいずれであるかは不明である。

古式須恵器の古墳でのあり方は、位置的には墳頂部に置く例が先行し、次の段階で墳丘内裾部あるいは石室内へと移動している。17号墳では、墳丘外裾部正確にはその石室前面への供献例が確認され、葬送儀礼の多用な展開と新しい葬法が定着期に入ったことを示唆している。

なお、前方部盛土中出土例は、上記とは様相を異にする。墳丘築成の過程で意識的に破片を撒布したことは明らかで、死者に対するものではなく、墳丘完成の無事と平穩を願っての儀礼に係わると推定される。

123号と18号墳での出土状態は、位置における小異を除けば全く同様である。石室完成後、123号墳では食物が、18号墳では飲・食物が死者に対して供献され、儀礼終了後これらの土器群を覆う形で最後の盛土がなされ、墳丘が完成する。追葬時にも同様に飲食物の供献が行なわれるが、当然、位置は墳丘外表裾部あるいは墓道肩部へと移動している。玄室内からも甕の破片の出土をみるが、主体は石室外にあったと考えられる。

古式須恵器の時期にあたる17号墳と、これより後出する123・18号両墳との間には、供献に用いた土器を破砕する・しない点という明確な差異があり、死者あるいは死に対する思想の推移を偲ばせる。

容器としてのみで、飲食器としての出土状態にあるものが確認されていない点については、先に述べたように二つの場合が考えられる。一つは、もともと飲食行為がなされなかった場合であり、他の一つは、行なったが持ち帰った場合である。123号・18号両墳の場合は、その整然とした並置状態からみて、前出乙植木2号墳で筆者が想定した参会者による飲食行為はなされなかったものと推定される。

## 6 『宗像君』と周辺地域との関係について

『宗像君』を当該地域を統轄する一大在地首長と規定すれば、遅くとも五世紀後半以降は、その根拠地を上述の有力古墳群が所在する津屋崎町一帯に求めることができる。

これ以前の前方後円墳としては、宗像郡宗像町・東郷第4号墳（高塚一註7）1基が知られているに過ぎない。北接する同郡玄海町・上高宮古墳は、鏡・銅鏃・三角板革綴短甲等の豊富な副葬品が目されるが、主体を箱式石棺とする円墳である（註8）。短甲の型式から、10号墳に少しく先行するとみられるが、統轄する首長であったとは考えにくい。が、後述する沿岸地帯の精力的な活躍を示唆する好例の一つではある。

従って、現在の知見では、5世紀中葉を過ぎて突如として沿岸地帯に前方後円墳の築造が開始され、以後相次いで多数の後方後円墳とこれを核とする円墳群が营造されたとするしかないのである。

### 前

これらの有力古墳を築造し得た経済的基盤は、立地からしてそれを農業経営に求めることはできない。現在の津屋崎町一帯は、専業農家が多く、水稻と疎菜を中心とする都市近郊型の農業経営を主要な生産活動としているが、これは塩田を水田化した近世以降の努力の結果による。

従って、往時の主たる経済的基盤は、立地を活かしての交易活動に求められる。10・41号両墳からは夥しい武器・武器が出土しており、特に武器類は大型・実戦的で、その活動がエネルギーであったことが推測され、V-4で紹介する鈴付杏葉、あるいは清田浦9号墳の小規模石室からの出土した金銅装直刀（註9）は、その活動の所産と思われる。こうした沿岸地域集団の積極的活動が、畿内政権によって評価・重視され、それがまた一層の拍車をかけたとみられる。

なお、17号墳羨道部出土の鍛造工具と木工具は副葬品ではなく供献品であり、被葬者が鉄器生産をも管掌していたことを示唆して重要である。前段階の製鉄まで行なわれた可能性もあるが（註10）、6世紀中葉までは主たる交易品が鉄原材であったとも考えられ、即断できない。所謂バイキング行為も行なわれたと思われるが、主体はバーター貿易と考えられ、その場合の交易品の一部が海産物であった可能性がある。そのための漁撈活動も盛に行なわれたと推定され、この意味で小規模墳の調査が期待される。ともあれ、経済的基盤は数本の柱から成っており強固なものであったことが推察されるのである。

宗像君、が単なる在地首長にとどまらなかったことは、周辺地域の古墳文化へ与えた影響からも読み取れる。41号タイプ石室を短小化した形態は、前出粕屋郡須恵町・乙植木2号墳にみられる。18号タイプは、鞍手郡鞍手町・高木B2号墳の主体として営なまれており、しかも墳丘における供献形態も軌を一にする（註11）。粕屋郡古賀町・原口1号墳石室は、複室式であり、両側壁は合掌するかのように持ち送られており、また奥壁と平行する屍床が設置されており（註12）、これまた、18号タイプに後続する石室と酷似する。従って、現在の行政区画でいえば宗像・遠賀・粕屋・鞍手4郡所在の古墳については、上記の観点からの考究が望まれ、その結果の積み重ねが宗像君、の実像を浮き彫りにすると思われる。

10号墳から出土した環鈴は、一種の特殊遺物であり、九州では北部を中心とする各地に散在している点に注意される。環鈴自体については既に詳述したことがあるのでそれに譲るが（註13）、これを伴なう主体構造が古式横穴式石室に略限られ、年代も500年を中心とする極めて限定された時期に集中する。しかも、一部を除いて略例外なく甲冑を伴ない、各地域での盟主墳たる例が多く、被葬者像を所謂「国造軍」を率いて渡海した一軍の将と想定できるのではあるまいか。環鈴自体に、型式差・時期差があり、全て同一時期に行動を共にしたとは考えられない。けれども、環鈴を伴なう嘉穂郡穂波町・森原1号墳石室（註14）が41号タイプを小型化したものであるとみられることは偶然とは思われず、その背景に上記のごとき直・間接的な交流の存在を想定せざるを得ない。

26号墳への石棚の設置は、筑後換言すれば筑紫君との関連を思わせる。北接する玄海町牟田尻・桜京古墳では石屋形が設置されているが複室であり、相似た構造をとることから26号墳もまた同様と思われる。従って、嘉穂郡桂川町・王塚古墳（註15）が、石屋形の設置では先行す

るとみられる。これを逆流とみるか、直接交流とみるかが問題となるが、小稿では敢えて保留しておきたい。

論ずべきは、多々ある。特に、群間および群内部で看取される格差および营造時期の相違は『宗像君』の実態を如実に示す。調査は緒についたばかりで、また今回の調査で採取した遺物の報告すら果していない。それらを含め、他日機会を得てその責を果したく、御了解を願うものである。

## V 周辺の古墳と遺物

### 1 第 1 0 号 墳

**所在地** 福岡県宗像郡津屋崎町勝浦字藤三ヶ浦

**墳 丘** (Fig. 20)

3段築成の前方後円墳であり、全長70m、後円部径約37m、前方部幅約37m、後円部の高さは7mである。響灘をのぞむ低丘陵に墳丘は築造されており、頂部の標高は37mである。周濠は存在しないが、墳丘には葺石が施されている。また円筒埴輪の小片を検出している。

**主体部** (Fig. 21)

調査は前方部だけを実施した。前方部に主軸と直交して北西方向に開口する竪穴系横口式石室がある。石室の規模は、長さ4.2m、幅は奥壁部で1.35m、横口部で0.95mである。天井石は盗堀により持ち去られているため床面からの高さは不明である。現存高は1.3mを測り、残存状態から当初もこの数値と大差はないものと思われる。石室の基底部は地山に到達しておらず盛土の途中である。壁面は玄武岩の割石を石材として、やや持ち送り気味に構築している。盗堀は床面にまで及んでいて攪乱されていたが玉砂利を敷いていたことが確認された。本墳も41号墳と同様、壁面には赤色顔料を塗布している。

横口部は石室の腰石に用いたと同じ位の大きさの石材を二段、横積みして閉塞している。墓道には左側（奥壁に向って）は三段積みの壁面が1m程、右側では0.4m程の石積みの壁面がある。この墓道部の床面は玄室の床面よりも約50cm程高い位置にある。

特記すべき点は前方部に竪穴系横口式石室を有する事である。県内で前方部に横穴式石室を有する古墳としては、5世紀初頭から中葉に比定される福岡市老司古墳4号石室と5世紀後半代に比定される浮羽郡吉井町塚堂古墳等4例しかない。前二者とも竪穴系横口式石室であり、特に老司古墳の場合では墓道の床面は小口壁の上端の高さであるため、石室内へ入るために小口壁に棚状の構造をもうけている。この10号墳においては、前述の如く墓道床面は石室床面より上方に造られており、横口式石室の初現的形式を踏襲している。ちなみに各石室の規模は、老司古墳4号石室は長さ2.22m、幅0.79m、塚堂古墳の石室は長さ3.12m、幅1.59m、高さ1.94mである。

第10号墳の築造年代は、出土遺物や古式の石室形態である竪穴系横口式石室を内部主体としているという石室の形態から、5世紀後半代に比定されよう。なお、鉾留の短甲片が出土していることから5世紀の中葉には遡らないものと考えられるが、須恵器を伴わない事や地域性を考えると、5世紀後半よりも遡る可能性もある。

なお、前方部盛土下では墳丘築造以前の住居跡が3軒検出されており、その年代は5世紀初

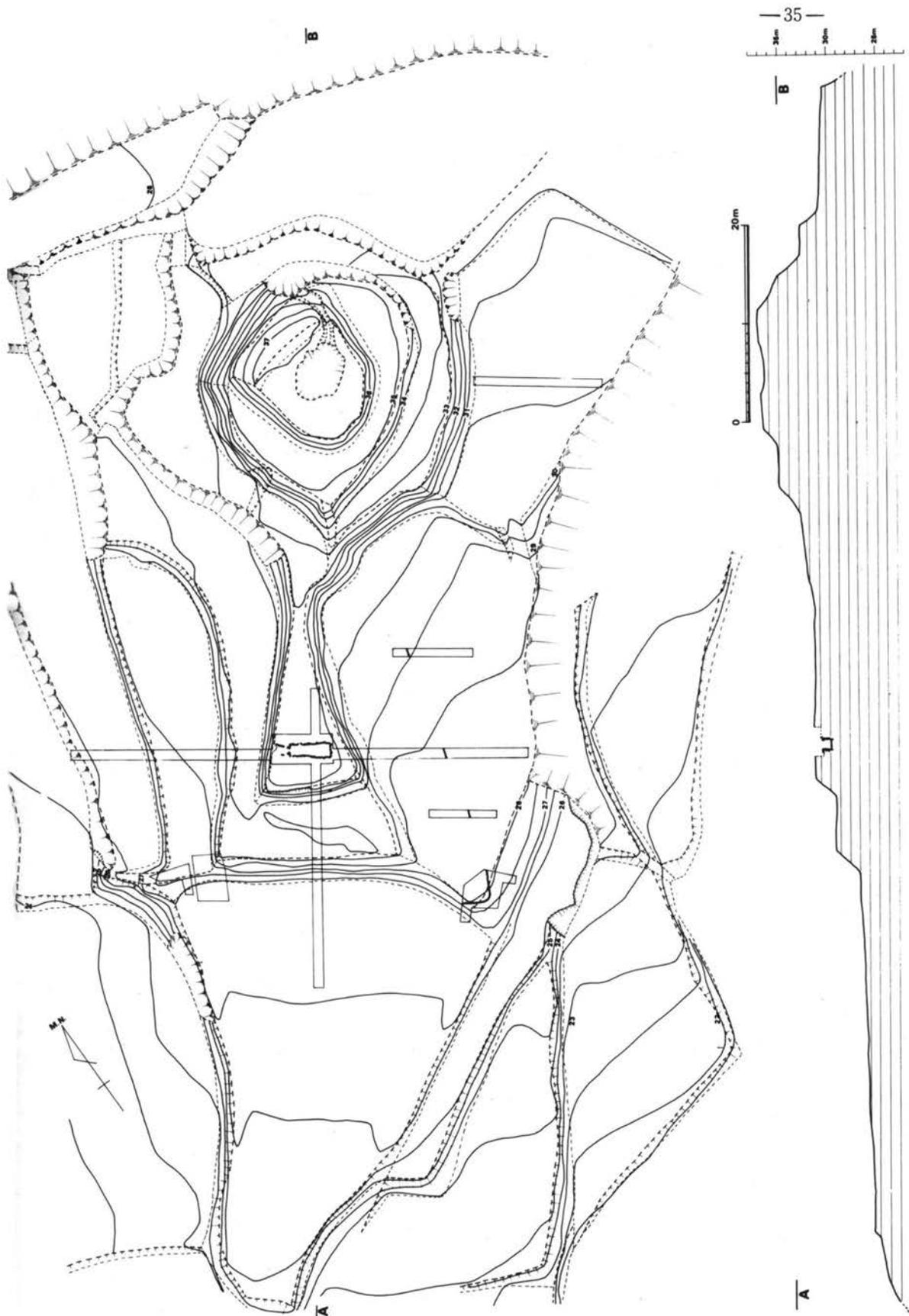


Fig. 20 10号墳填丘測定図 (1/600)

頭頃に比定できよう。

### 出土遺物

後述するように多数の遺物を検出しているが石室内からは須恵器、土師器は出土していない。出土遺物のうちで鏡と環鈴について若干述べておく。本墳出土の鏡は輪鏡と壺鏡の2通りあるがいずれも木心鉄装のものである。輪鏡は4面を鉄板で覆うが壺鏡は3面を覆う。増田精一氏（註16）によると壺鏡には三角錐形木心鉄装壺鏡と杓子形木心鉄装壺鏡の2通りがある。前者の例では福岡県桂川町王塚古墳、大阪府富木車塚古墳などがあり、後者の例では本墳出土品と福岡県山ノ神古墳、和歌山県大谷古墳などがあげられる。なお材質は異なるが、福岡県宮地嶽古墳からは金銅製の杓子形壺鏡に属するものも出土している。

環鈴は鈴の数から三環鈴と四環鈴にわけられるが四鈴式は福岡県

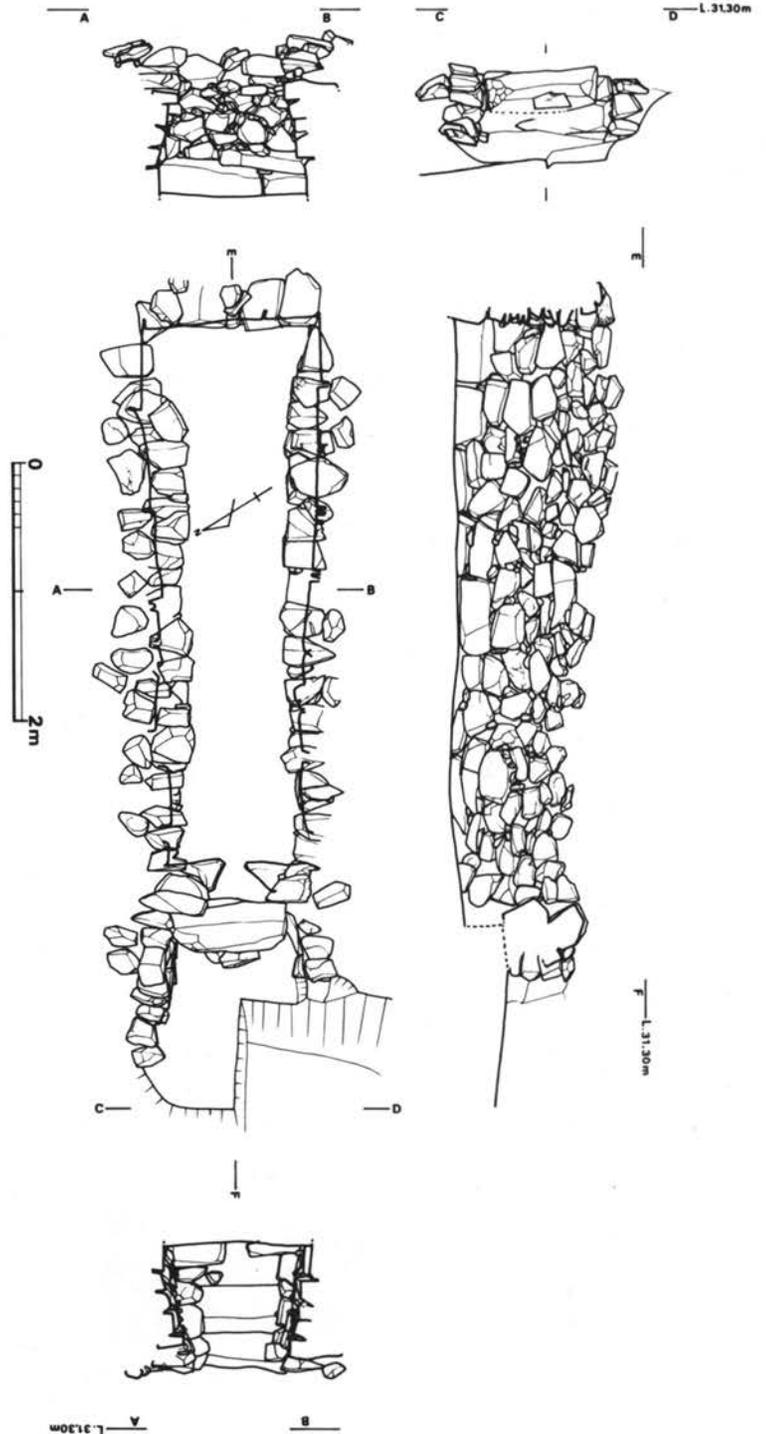


Fig. 21 第10号墳石室実測図 (1/60)

甘木市茶臼塚古墳出土例が知られているが僅かであり、大部分は三環鈴である。本墳出土品は鈴は1個しか残っていなかったが環状部から判断して三環鈴であると言える。県内出土地は、行橋市稲童21号墳、浮羽郡吉井町月の岡古墳、嘉穂郡穂波町森原1号墳などであり、本墳を含めて8箇所9個の出土例である(註17)。

出土遺物は次の通りである。

- |     |     |                  |        |           |         |  |
|-----|-----|------------------|--------|-----------|---------|--|
| (1) | 土器  | 須恵器              | 5個体以上  | (石室外出土)   |         |  |
|     |     | 土師器              | 5個体以上  | (盛土中)     |         |  |
| (2) | 埴輪  | 円筒埴輪片            | 1本     |           |         |  |
| (3) | 武器  | 鉄 鉾              | 11本    | 石 突       | 2個      |  |
|     |     | 鉾以外の石突           | 6個     | 挂甲鉄小札     | 約3,000枚 |  |
|     |     | 挂甲金銅張小札          | 51枚    | 短甲片       |         |  |
|     |     | 三尾鉄(横矧板鉾留衝角付冑片も) | 2      | 大 刀       | 1       |  |
|     |     | 鉄 鎌              | 160本以上 |           |         |  |
| (4) | 工具  | 鉄 斧              | 2      |           |         |  |
| (5) | 馬具  | 三環鈴              | 1      |           |         |  |
|     |     | 鉄地金銅張杏葉          | 10個    | 木心鉄板被壺鍔   | 1対      |  |
|     |     | 木心鉄板被輪鍔          | 1対     | 鉄地金銅張鉾留金具 | 22      |  |
|     |     | 鉾留金具             | 10     | 鉾 具       | 10      |  |
|     |     | 轡                | 2      | 金銅張磯金具    | 若干      |  |
|     |     | 銅製鞞              | 2      | 鞍金具       | 若干      |  |
|     |     | その他              |        |           |         |  |
| (6) | 装身具 | 六葉形金具            | 1      |           |         |  |
|     |     | 10号墳下住居跡出土遺物     |        |           |         |  |
| (1) | 土器  | 土師器              | 10個体以上 |           |         |  |
| (2) | 装身具 | 滑石製勾玉            | 1      |           |         |  |
|     |     | 滑石製管玉            | 2      |           |         |  |
|     |     | ガラス製小玉           | 3      |           |         |  |

## 2 第 41 号 墳

**所在地** 宗像郡津屋崎町勝浦字井ノ浦

**墳 丘** (Fig. 22)

開墾により削平されているが、復元すると、全長97m、高さ 6.8m の大形の前方後円墳である。その規模においては宗像郡内の二十数基の前方後円墳中では最大のものである。また福岡県内においても全長 100m を越える規模のものは豊前の石塚山古墳・御所山古墳、筑前の銚子塚古墳、筑後の石人山古墳・岩戸山古墳とその数は少なく、これらにつぐ規模のものである。墳丘には葺石を施している。なお埴輪片を検出している。

**主体部** (Fig. 23)

後円部に位置し、南南西方向に開口する単室の横穴式石室である。石室の規模は長さ4.3m、幅は奥壁部で2.5m、玄門部では2.15m とやや奥が広がる、いわゆる羽子板状の平面形を呈する。壁面は玄武岩の割石を石材として、1.8m ほど、ほぼ垂直に積みあげる。石室前面には丈の低い石積みの墓道が、開き気味に3.15m 程のびる。この部分には天井は架構していない。

玄門間には柱状の仕切石が置かれ、ここに一枚の板石を扉状に立てかけて閉塞石としている。石室内は壁面から天井まで赤色顔料を塗布しており、墓道の石積みにまで及んでいる。

特筆すべき事は、石室の中軸線上にあたかも石室を3等分するかの位置に2本の石柱が立っている事である。この石柱は玄武岩の柱状節理した石材で、床面を掘りくぼめて立てられている。恐らくは我国初見の特異な石室形態であろう。この石柱のもつ意味としては、次の様な事が考えられる。

①天井石を支えて、石室をより強化するため。

②石室を区画するためのもの。

③中国などの墓制にみられる「家」の思想の影響。

などが考えられる。

奥壁側の石柱は、これを要として奥壁と平行に柱状の石材を横たえて仕切りとして屍床を形成している。このことから石室を区画するための意味をもつものとも考えられるが、あと一つの石柱には仕切石がないため、石室を区画するものと即断することはできない。屍床をもつ石室は、佐賀県、熊本県には数多く見られるが、県内では、古賀町原口1号墳、荻田町御所山古墳、筑紫野市埴安古墳、久留米市日輪寺古墳、甘木市茶臼塚古墳、広川町山の前1号墳、八女市真浄寺2号墳、宗像町相原古墳、若宮町金丸古墳、鞍手町銀冠塚などでその例は少い。石室の形態は古式の横穴式石室であり、類例は佐賀市関行丸古墳に求められる。なお石室内には、もと須恵器が所在した事は確認されたが、調査前に盗掘により持ち去られたので詳しい事がわからないのはよくやまれる。築造年代は5世紀後半に比定され、石室の形態から第10号墳よりは

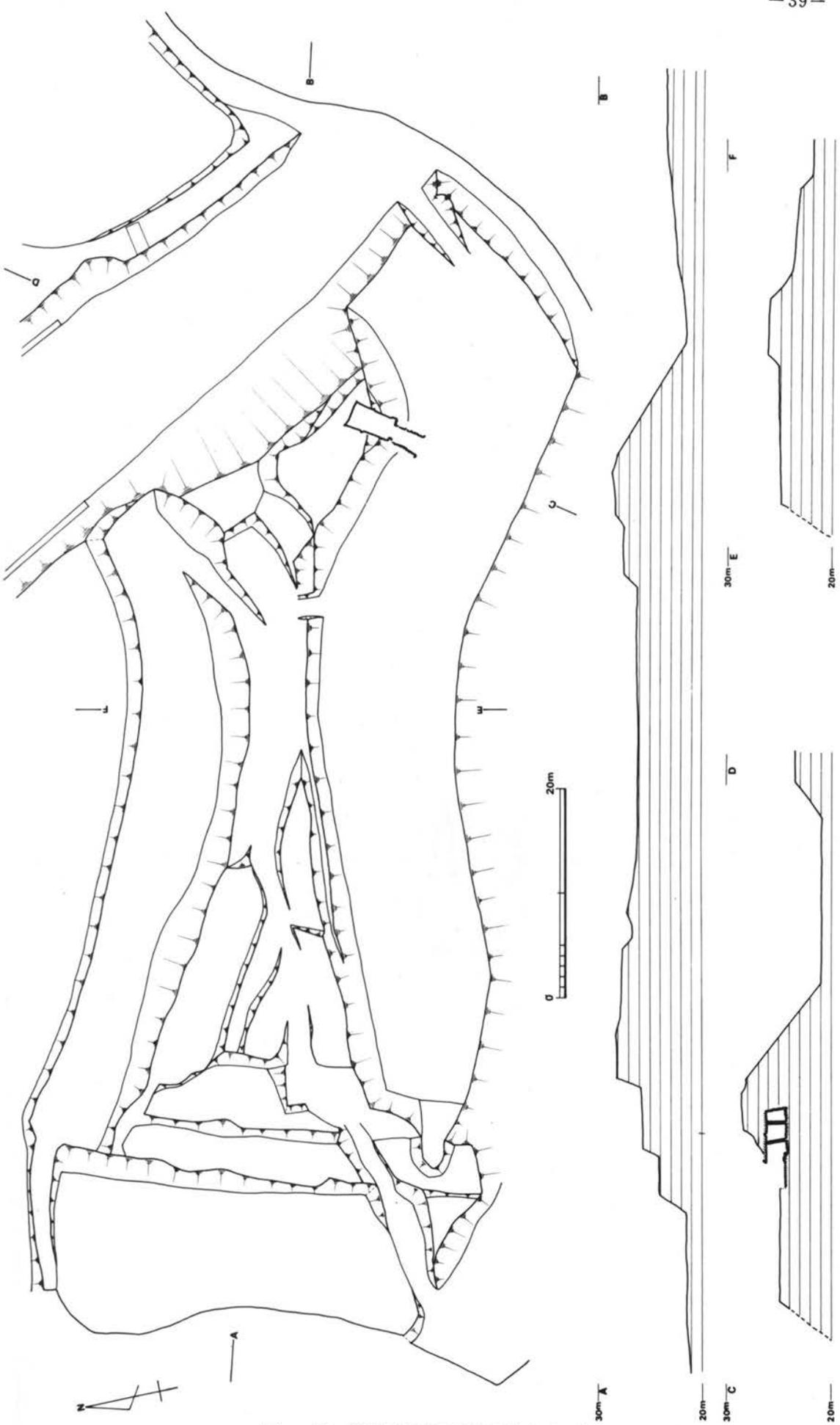


Fig. 22 第41号墳填丘測量図 (1/600)

やや後出するものと思われる。

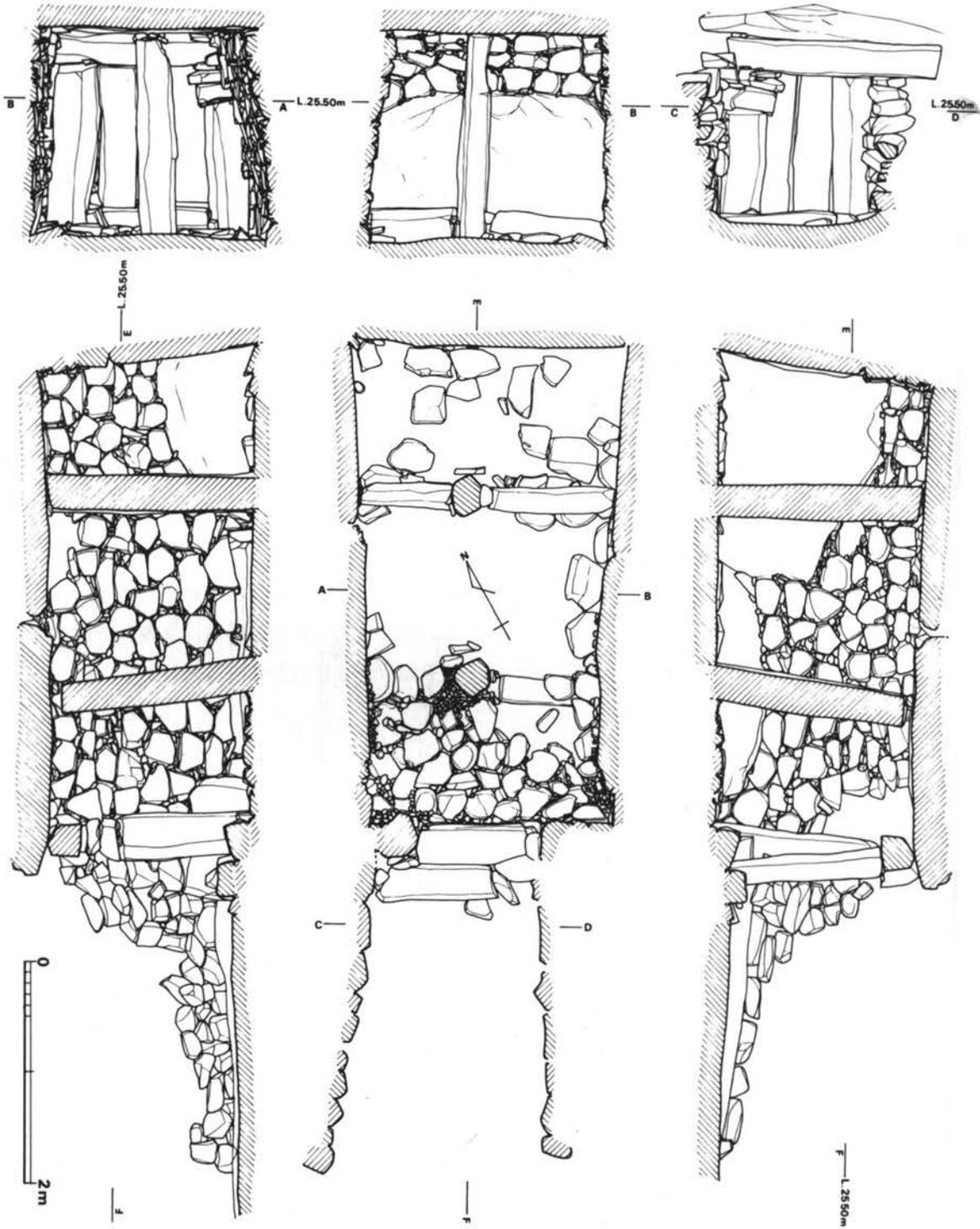


Fig. 23 第41号墳石室実測図 (1/60)

出土遺物

石室は盗掘に会っていたが、後述するように多数の遺物を検出している。なかでも鹿角製装具付きの大刀は30振も出土している。鹿角装具の着装位置は、把頭・把縁・鞘口・鞘尻の4箇所とされており、ここでは把縁は木製であり、木質に漆を塗って材質を強化しており、この部分に直弧文が入る。また鞘口には鹿角装具がつき、全体に遺存状態は不良であるが直弧文が刻まれているのが認められた、なお鞘尻では鹿角装具の着装は確認されなかったが、把頭ではその可能性が認められた、以下。出土遺物を列挙する。

- (1) 鏡 7面
  - 画文帯神獸鏡 (註18) 内行花文鏡
  - 珠文鏡
- (2) 土器 須恵器 1個体 (石室外)
- (3) 武器 鹿角製装具付き大刀 40振以上 鹿角製装具付き剣 4振
  - 素環頭大刀か剣 1振 銀製鞘尻金具 1
  - 鉄 鎌 300本以上
- (4) 武器 短甲片
- (5) 工具 鹿角製装具付き刀子 6本 鉄刀子 21本
- (6) 装装身具 銅釧 1 ガラス連玉 6個
  - ガラス玉 10.565個 (丸玉 8.665, 小玉 1.900)
  - 琥珀製棗玉 92個以上 琥珀製勾玉 8個
  - 碧玉製管玉 4個 ヒスイ製勾玉 1個
  - 瑠 璃 5枚 ガラス製管玉 1個

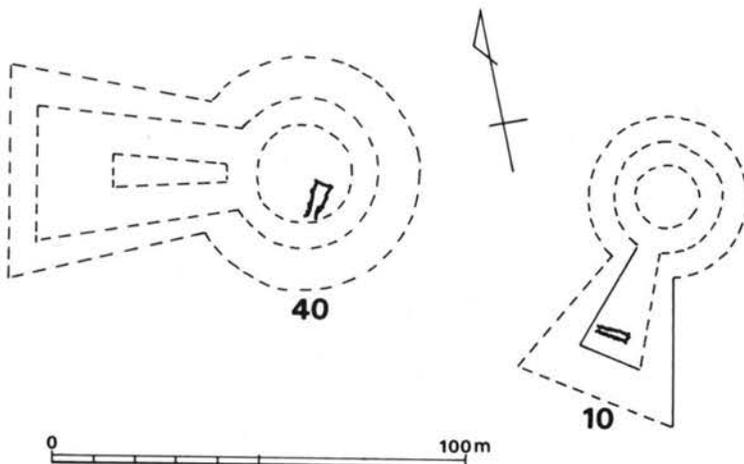


Fig. 24 10・41号墳丘関係図 (縮尺 1/2000)

### 3 勝浦浜第 1 号墳

**所在地** 福岡県宗像郡津屋崎町勝浦浜

#### 墳 丘

調査時には墳丘の半分以上を破壊されて、石室も露出している様な状態であった。残存する墳丘から復元するとその径は約14mの規模となる。石室を構築するに際しては、巾約4m、深さ1.7mの墓壇（掘り方）を、花崗岩バイラン土の地山に切り込んでいる。そして石室と墓壇との空間部には3種類の土砂を裏込めしており、層位はほぼ水平である。外部施設としては巾2mの周溝をもっており、この周溝は地山を掘りくぼめてつくられている。

#### 主体部 (Fig. 25)

古墳の内部主体は、西南西に開口する複室の横穴式石室である。石室はかなり以前から開口していたため、内部は踏み荒されており、また奥壁の一部と天井石の大半は存在しなかった。石室の規模は全長5.1m、後室長2.1m、巾1.5m、高さ1.9m、前室長1.7m、巾1.65mである。石材は腰石の部分には、巾1～1.3m、高さ1.3m大の大石を用いる、腰石上には3～5段ほど持ち送り気味に塊石を積みあげる。天井石は厚さ0.8～1mのものを使用している。羨道部にも、石室内の腰石に用いたものと同じ規模のものを用いていた事が周辺に散乱している石材からうかがわれた。調査時には前・後室内の床面は完全に攪乱されていたが本来は玉砂利を敷いていた事が知られた。また前室袖石の部分にあたる仕切石間の床面から銅鏡が1個体、伏せた状態で出土した。

本墳の構造年代は石室の形態や、出土した須恵器、その他から7世紀初頭に比定されよう。

#### 出土遺物

盗掘のために、出土品は少なかったが、完形品の銅鏡が1個出土している。古墳から銅鏡が出土する例は少く、福岡県内では津屋崎町宮地嶽古墳、粕屋郡古賀町花見古墳、筑紫野市八隈3号墳で出土しており、本墳出土品は4例目である。

出土遺物は次の通りである。

- |     |     |        |        |        |       |
|-----|-----|--------|--------|--------|-------|
| (1) | 容 器 | 須恵器    | 5 個体以上 |        |       |
|     |     | 銅 鏡    | 1 個    |        |       |
| (2) | 武 器 | 鉄 刀    | 1 振    | 鏢      | 1 個   |
|     |     | 銀製金具   | 1      | 鉄 鏃    | 15本以上 |
| (3) | 装身具 | 琥珀製棗玉  | 3 個    | ガラス製丸玉 | 2 個   |
|     |     | ガラス製小玉 | 3 個    |        |       |

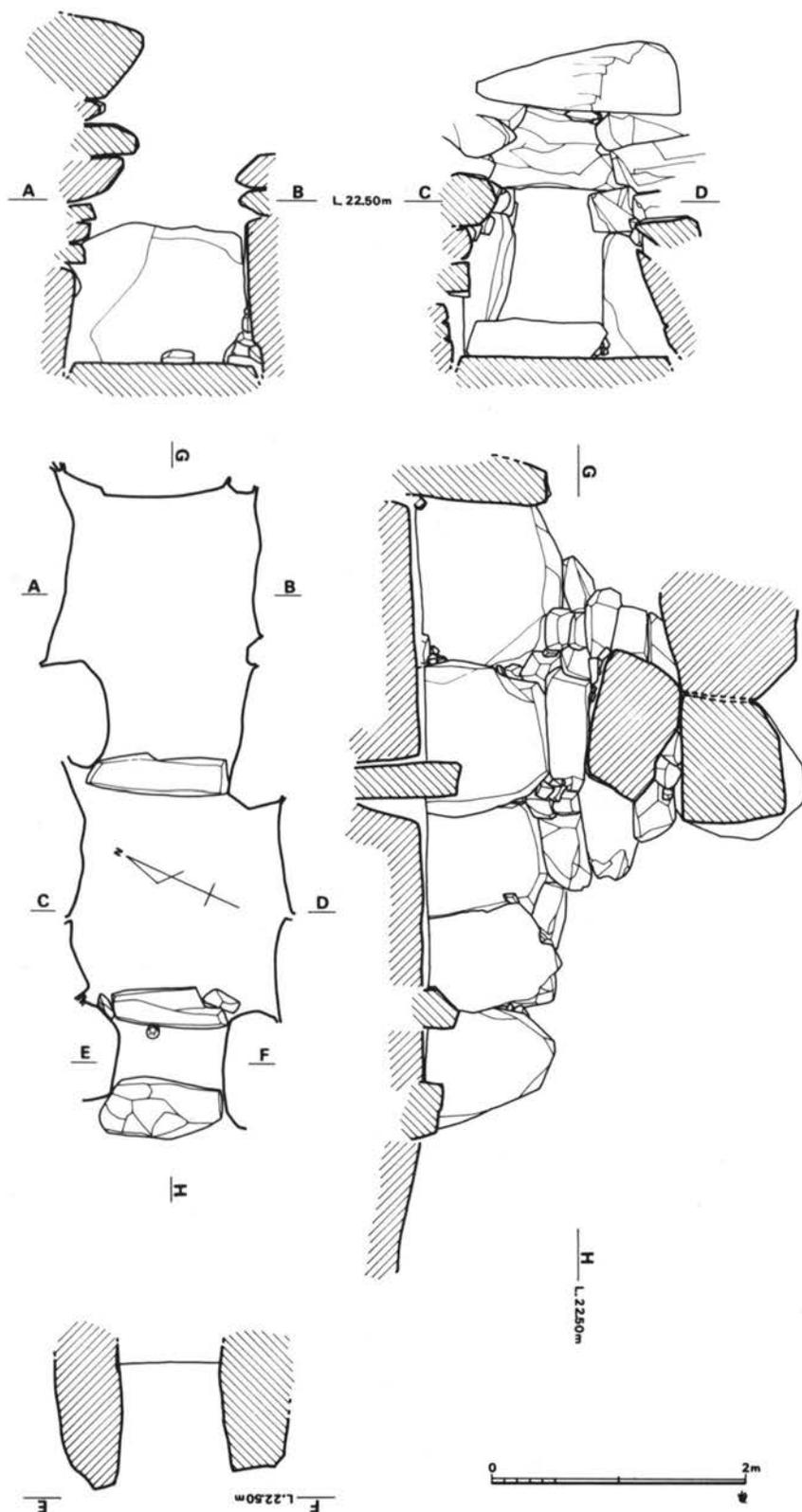


Fig. 25 勝浦浜第1号墳石室実測図 (1/60)

# 鈴

## 4 材 付 鏡 板 (PL. 70 )

昭和41年秋の黄昏時、現九州歴史資料館渡辺正気氏がゆくりなくも発見されたもので、当該地域の古墳文化の特色を象徴する逸品である。採取されたのは、17号墳と123号墳との間の道路東側法面の表土下約30cmとのことである。いずれ詳細発表の機会を得たいが、時期からは17号墳に所属した可能性があるが、石室からの距離と発見時の状態とに疑問が残る。氏の御承諾を得たので、敢えて紹介する次第である。

## 5 甕 (Fig. 26)

ここで紹介する甕は、津屋崎町宮司在住の石津文氏の所蔵品で、同家所有の宮地嶽山麓部山林を開墾中に発見されたとのことである。一見して古式に属する。既に、小田富士雄氏が伝宮地嶽古墳出土遺物の中に含まれていた古式須恵器を、周辺遺物の一部として紹介されている(註19)。本器は、小田氏紹介分と合わせて、宮地嶽古墳に象徴されがちな津屋崎町南端部の古墳文化の異なる一面を表わすものとして注目される。

完形品。口径9.6cm, 頸径5.4cm, 頸高3.6cm, 胴部最大径12cm, 器高10.6cm。口縁と頸部に波状文, 胴部沈線間に楕円文をめぐらす。体部以下を荒削りした後, ナデ調整を施す。灰青色を呈し, 胎土は極めて良好。焼成は堅緻で, 肩の一部と口頸部内面に自然釉がかかる。体部下半の数カ所に小粘土塊が融着しており, 他の器と重ね焼きされている。

TK208とTK23(註20)との中間に位置するのではなかろうか。

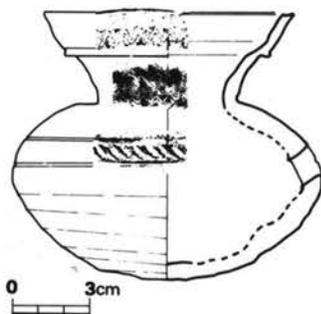


Fig. 26 宮地嶽付近出土甕実測図 (1/3)

## 註

- 註 1 文化課技師川述昭人が担当し、昭和50年11月17日から、昭和51年1月26日まで実施された。なお、同調査には、補助員川述公紀・鹿島英世・沢田康夫・日高正幸・筒井亀君の協力を得た。
- 註 2 昭和49年5月、県教委調査。箱式石棺を主体とし、仿製内行花文鏡等が出土。また、大字在自字堤でも箱式石棺1基が緊急調査され、鉄斧等の副葬品を採取している。文化課宮小路・橋口両氏の御教示による。
- 註 3 所在地の末尾に示す番号は、上述の本年度刊行の分布地図に用いる番号である。なお、第20～29号墳、第125墳の規模についての数値は、かつて当委員会が委託して行なった地形測量図作成の成果に基く。これについては、本報告への掲載準備が整わず割愛した。いづれ期を得たい。他については、筆者と佐土原逸男君との略測による。
- 註 4 拙稿「第12・9号墳の石室構造について」「片山古墳群」〈福岡県文化財調査報告書46〉1970、同「平原古墳群の調査」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ〉1972、を参照されたい。
- 註 5 波多野皖三「スベットウ古墳」『東郷遺跡群』1967。
- 註 6 拙稿「古墳における古式須恵器のあり方について」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ〉1977。
- 註 7 春成秀爾「東郷・高塚古墳」註5文献所収。なお、同墳は宗像町教育委員会編『宗像町埋蔵文化財一覧』のNo. 407にあたる。
- 註 8 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書13〉1939。
- 註 9 昭和51年夏に、津屋崎町教育会にて調査。担当者である県文化課小池史哲氏の御教示による。
- 註 10 前述清田浦古墳群の調査では、鉄鏝が採取されている。小池氏の御教示による。
- 註 11 拙稿「高木B2号墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ〉1977。
- 註 12 石山・川述昭人「原口1号墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ〉1974。
- 註 13 拙稿「環鈴の形態・年代と用途について」〈金鈴20〉1968。
- 註 14 1969年、県教委調査。浜田信也「森原古墳群」『嘉穂地方歴史一先史編』1973に概要が述べられている。
- 註 15 『筑前王塚古墳』〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書11〉の覆刻本による。
- 註 16 増田精一「鏡考」〈東京教育大学文学部史学研究81〉1971。
- 註 17 註13に文献に拠る。
- 註 18 岡崎敬氏の御教示によれば、PL. 57-1については、三重県神前塚古墳出土土鏡（京都国立博物館蔵）と同筭の可能性はある。
- 註 19 同氏「筑前宮地獄古墳の須恵器」〈九州考古学〉19〉1963
- 註 20 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』1966

図 版



1. 奴山古墳群全景 (東側上空から)



2. 奴山古墳群全景 (南東側上空から—上方は玄界灘)



1. 17・123号墳遠景（北側上空から）



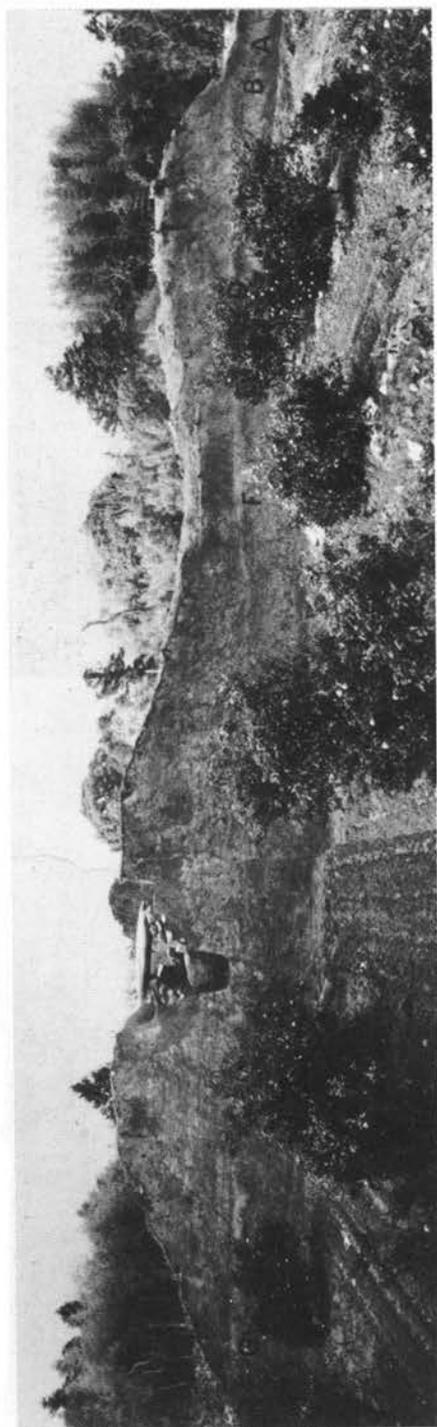
2. 17・123号墳全景（西側から）



1. 17号墳前方部葺石



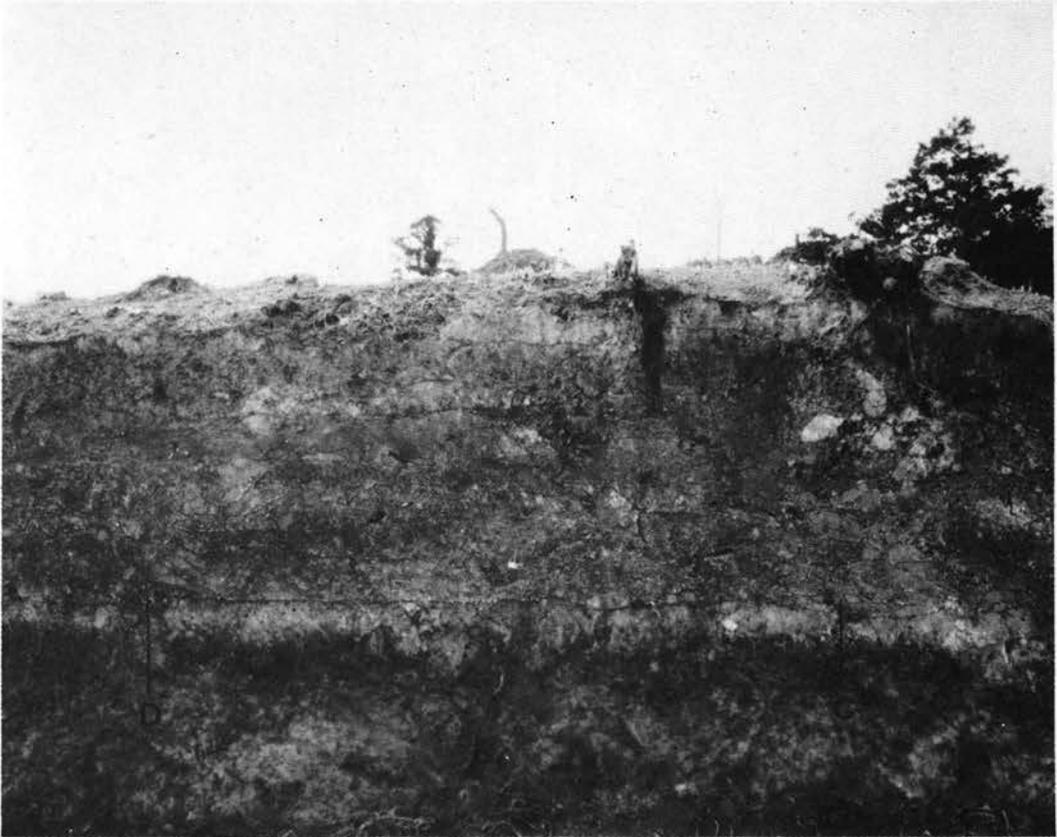
2. 17号墳後円部葺石



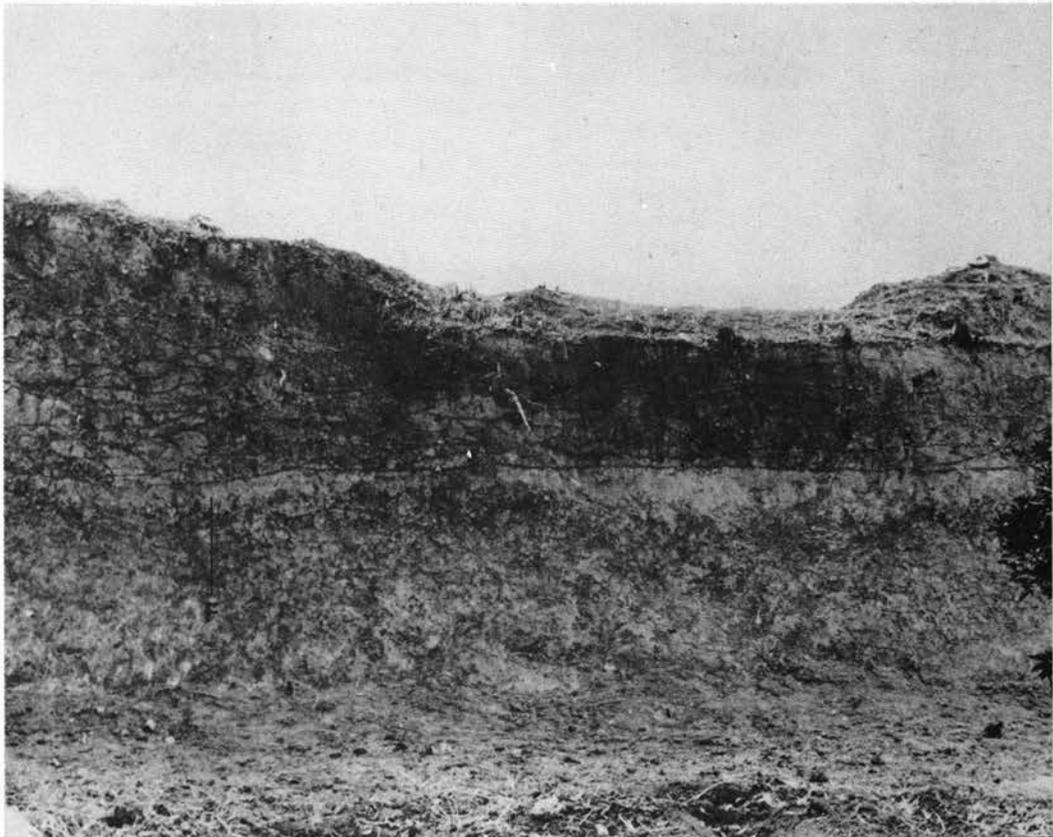
1. 17号墳丘陵縦断面全景



2. 17号墳丘陵前方部縦断面 (B-C)



1. 17号墳墳丘縦断面 (C~D)



2. 17号墳墳丘縦断面 (E~F)



1. 17号墳墳丘縦断面 (F~I)



2. 17号墳石室構築状況



1. 17号墳発掘後全景（西側から）



2. 17号墳石室天井石



1. 17号墳石室前庭部堆積狀況  
羨道



2. 17号墳石室閉塞狀況



1. 17号墳石室閉塞石



2. 17号墳石室横口部



1. 17号墳石室全景



2. 17号墳石室前庭部全景

美道



1. 17号墳石室前庭部左側壁  
羨道



2. 17号墳石室前庭部右側壁  
羨道



1. 17号墳玄室左側壁



2. 17号墳玄室右側壁



1. 17号墳玄室奥壁



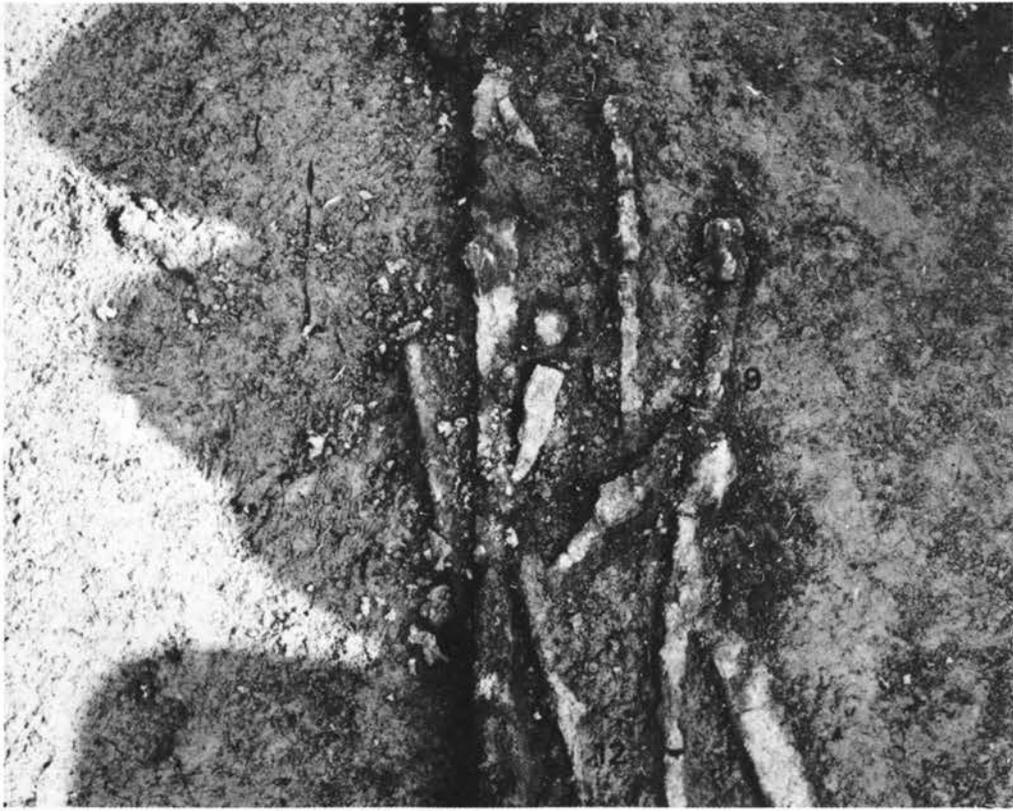
2. 17号墳玄室奥壁左隅



1. 17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（南西から）



2. 17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態（北西から）



1. 17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態 (拡大)



2. 17号墳石室羨道部鉄製工具類出土状態 (拡大)



1. 17号墳石室羨道部第2次床面鉄鏝出土状態（南東から）



2. 同上拡大（北東から）



1. 17号墳後円部甕 (KAI) 出土状態



2. 17号墳後円部甕 (KAI) 据付状態



1. 123号墳全景（東から）



2. 123号墳発掘後全景（西から）



1. 123号墳玄室右侧壁



2. 123号墳玄室横口部



1. 123号墳玄室奥壁



2. 123号墳玄室奥壁右隅



1. 123号墳墳丘内南裾 A・B土器群出土状況



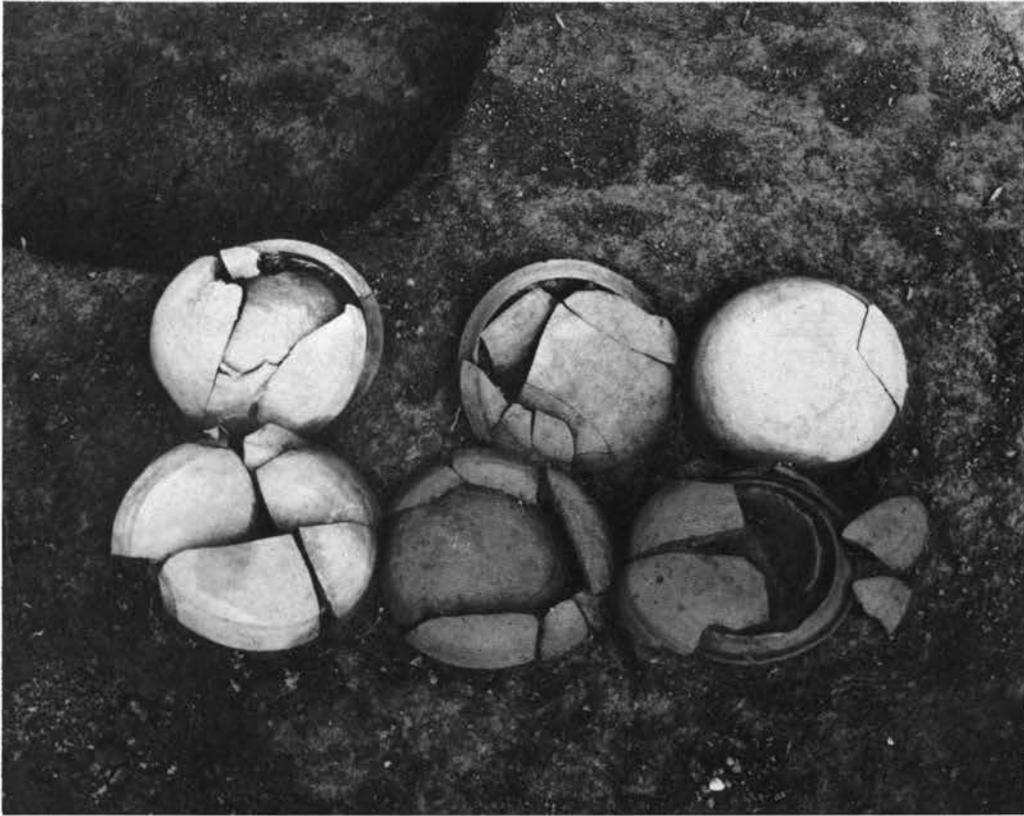
2. 123号墳墳丘内南裾 A・B土器群出土状況 (東から)



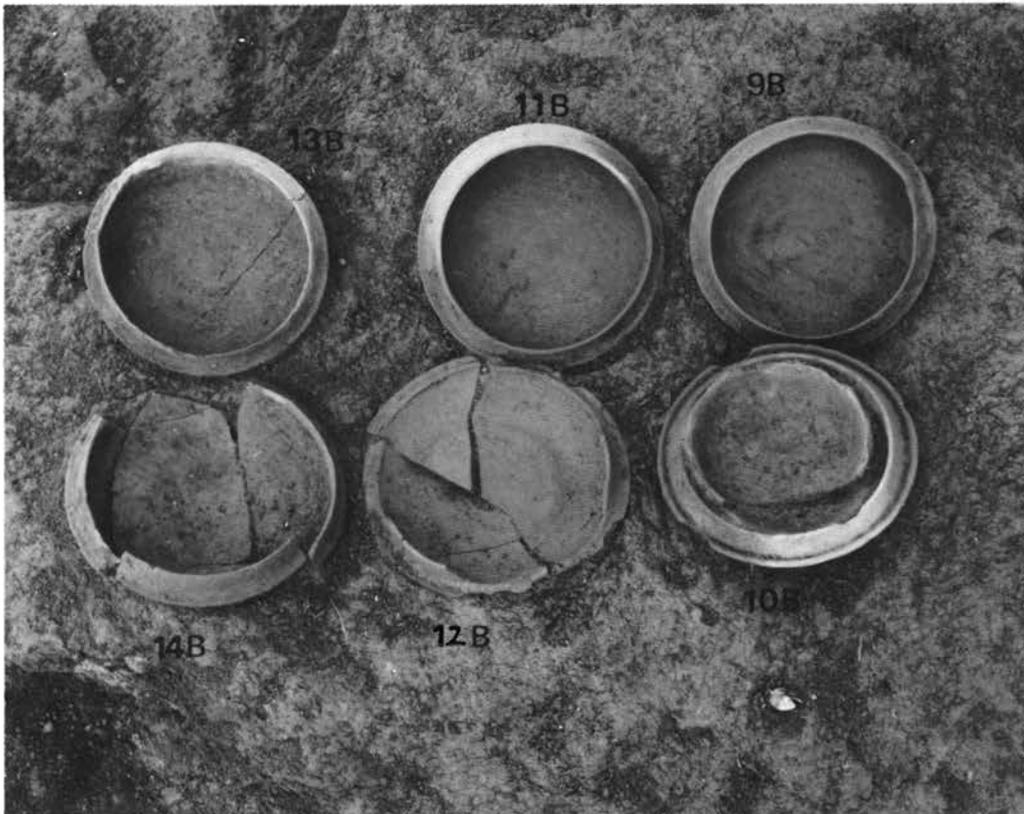
1. 123号墳 A群土器出土状態



2. 同上 (蓋除去後)



1. 123号墳 B群土器出土状態



2. 同上 (蓋除去後)



1. 123号墳 C群土器出土状態 (南から)



2. 123号墳 C群土器出土状態 (東から)



1. 18号墳全景 (南西から)



2. 18号墳石室全景 (西から)



1. 18号墳玄室奥壁



2. 18号墳玄室奥壁右隅



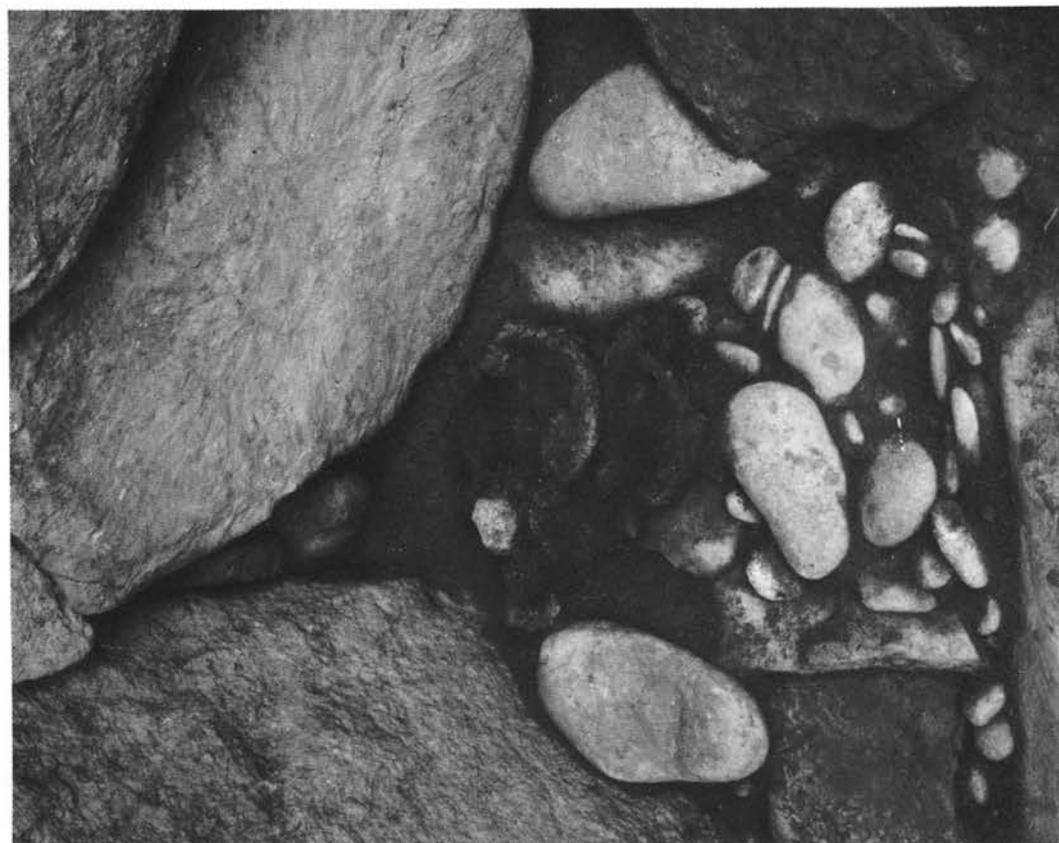
1. 18号墳玄室右侧壁



2. 18号墳玄室横口部



1. 18号墳墓道



2. 18号玄室前壁左隅出土状態



1. 18号墳墳丘内南裾出土土器・盛土関係



2. 18号墳墳丘南裾出土土器 (部分)



1. 18号墳墳丘内南裾出土土器（西から）



2. 18号墳墳丘内南裾出土甕



1. 18号墳墳丘内南裾出土甗



2. 18号墳墓道右肩出土土器・盛土関係



1. 18・124号墳遠景



2. 124号墳近景



1. 124号填石室全景



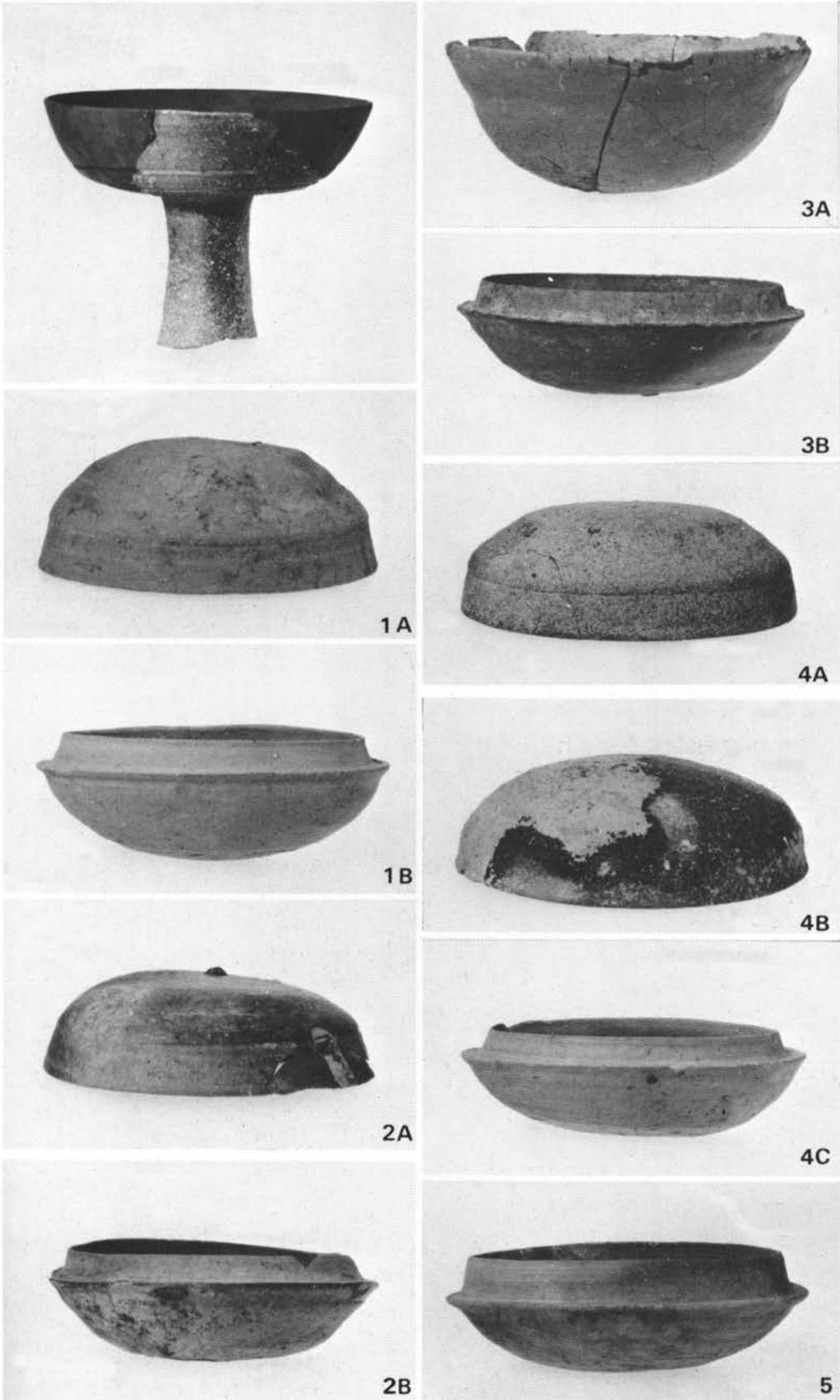
2. 124号填石室近景



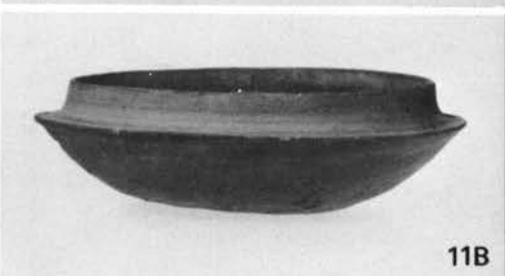
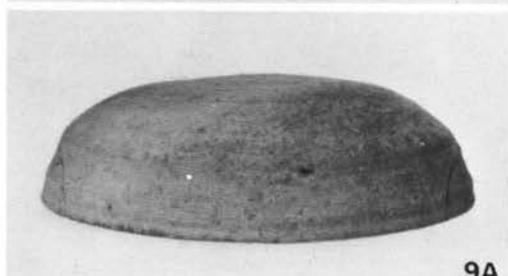
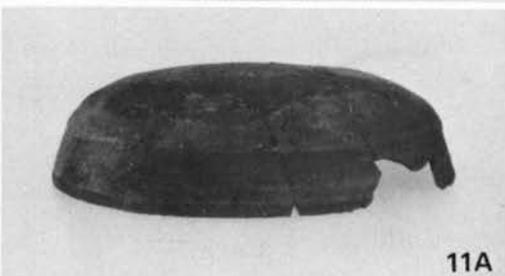
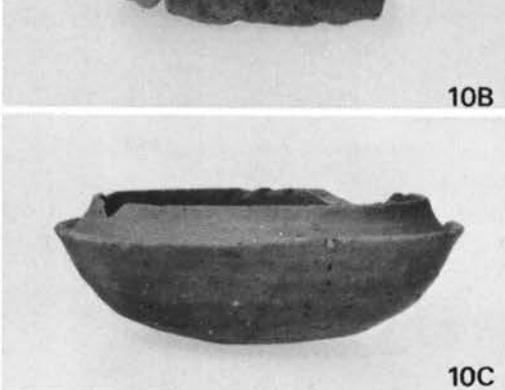
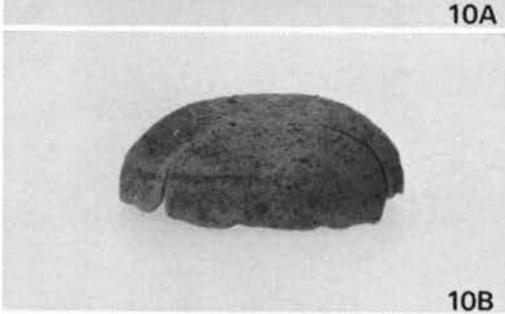
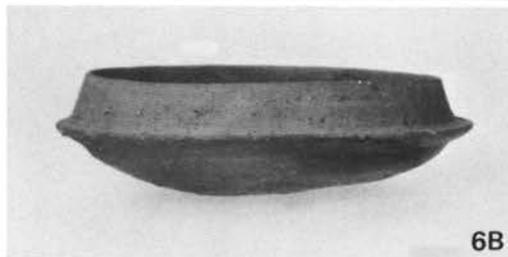
1. 124号墳石室閉塞状態

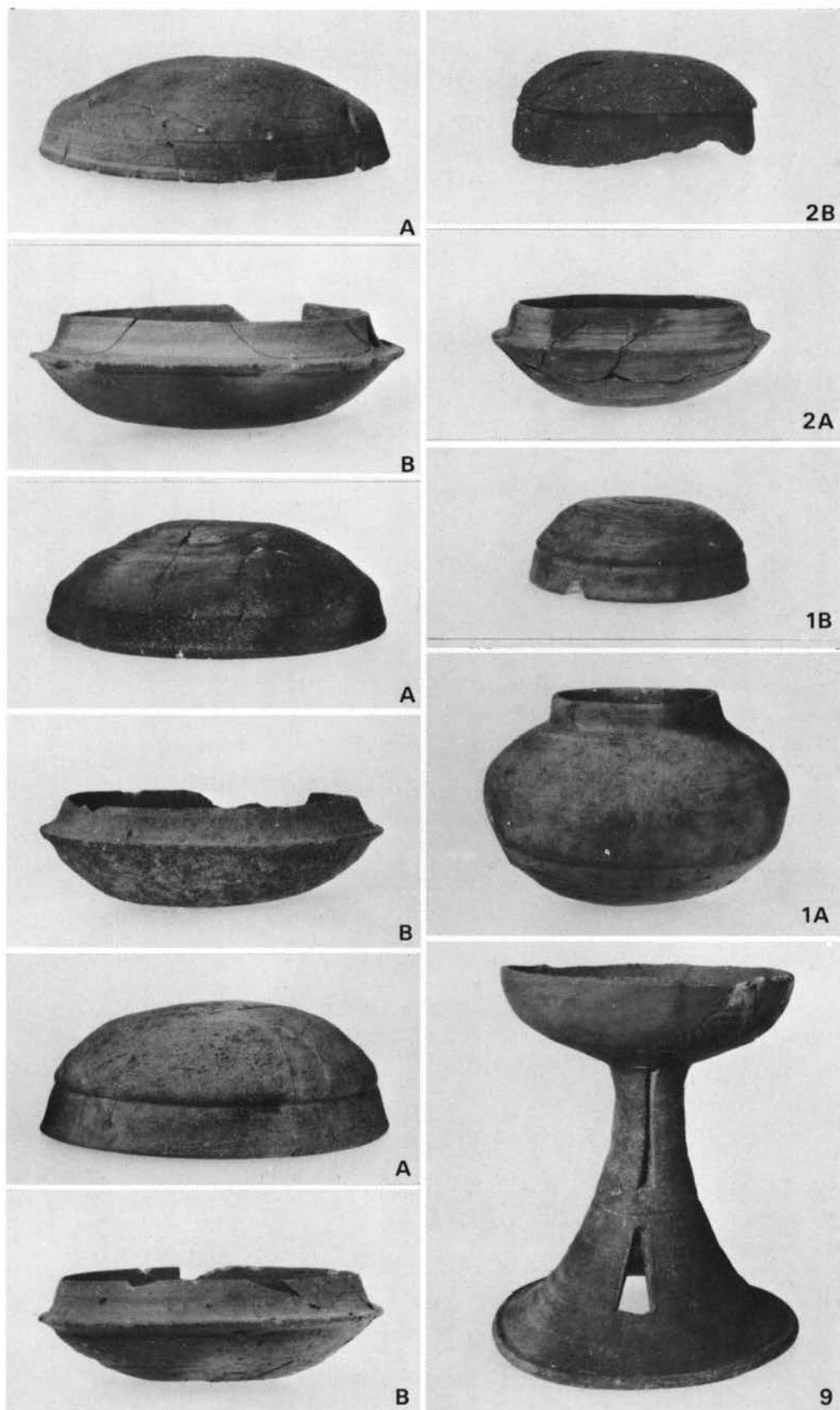


2. 124号墳墓道土器出土状態 (北から)

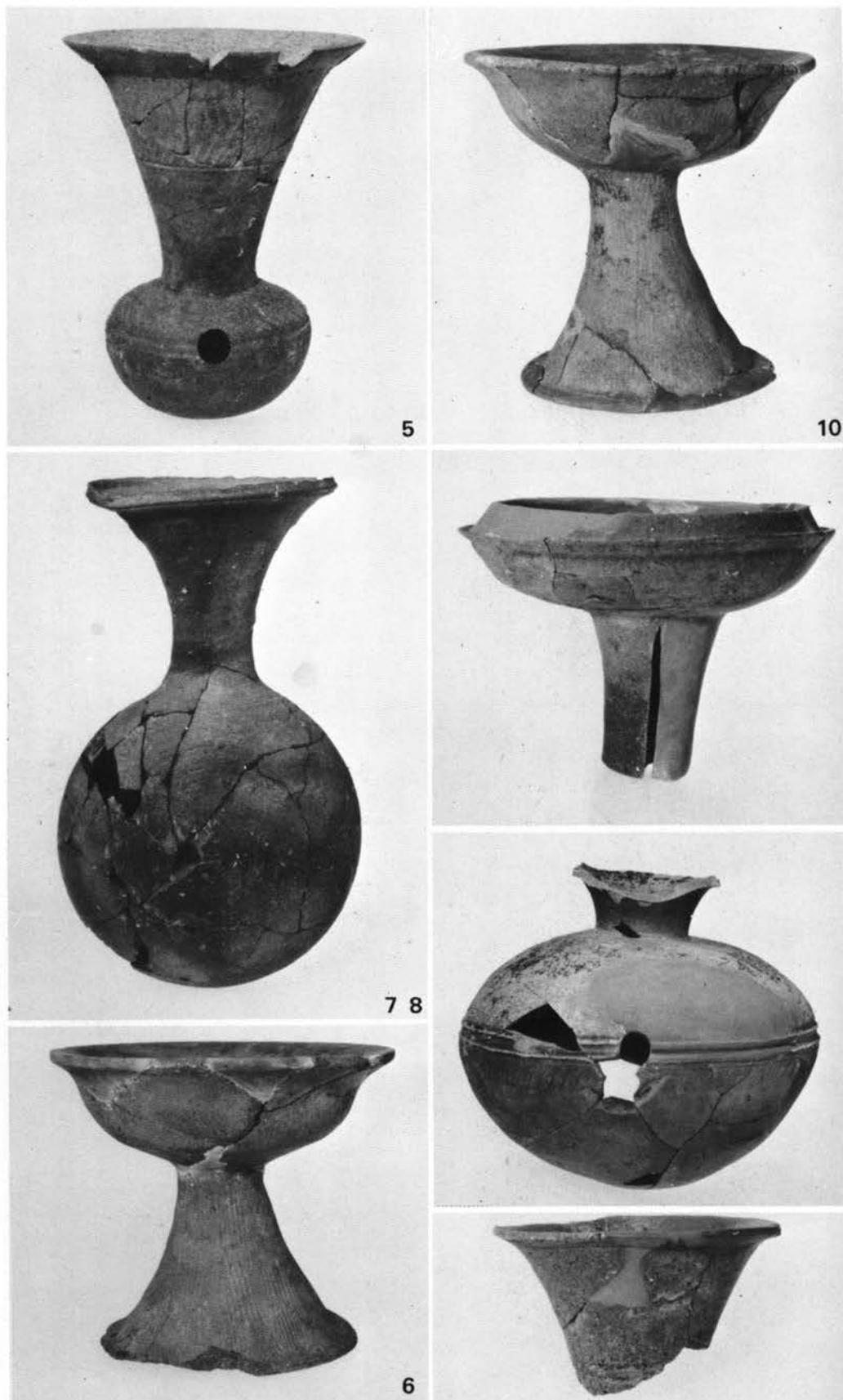


17・123号墳出土A群土器 左列最上段のみ17号墳石室前面外表から出土





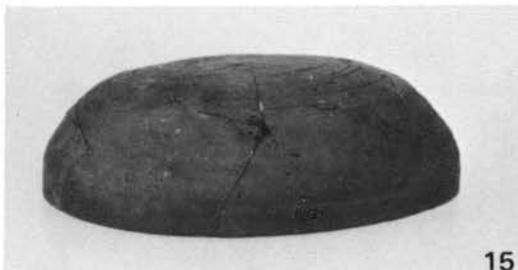
123号墳B・C群出土土器



123号墳 C群・北側周溝（右列第2～4段目）出土土器



123号墳墓道出土土器



15



11



7



13



8



17



9



24



12



6



23



22





18号墳墓道南肩部出土土器



124号墳出土土器



1. 10・41号墳航空写真（南西から）



2. 10・41号墳航空写真（西から）



1. 10号墳全景



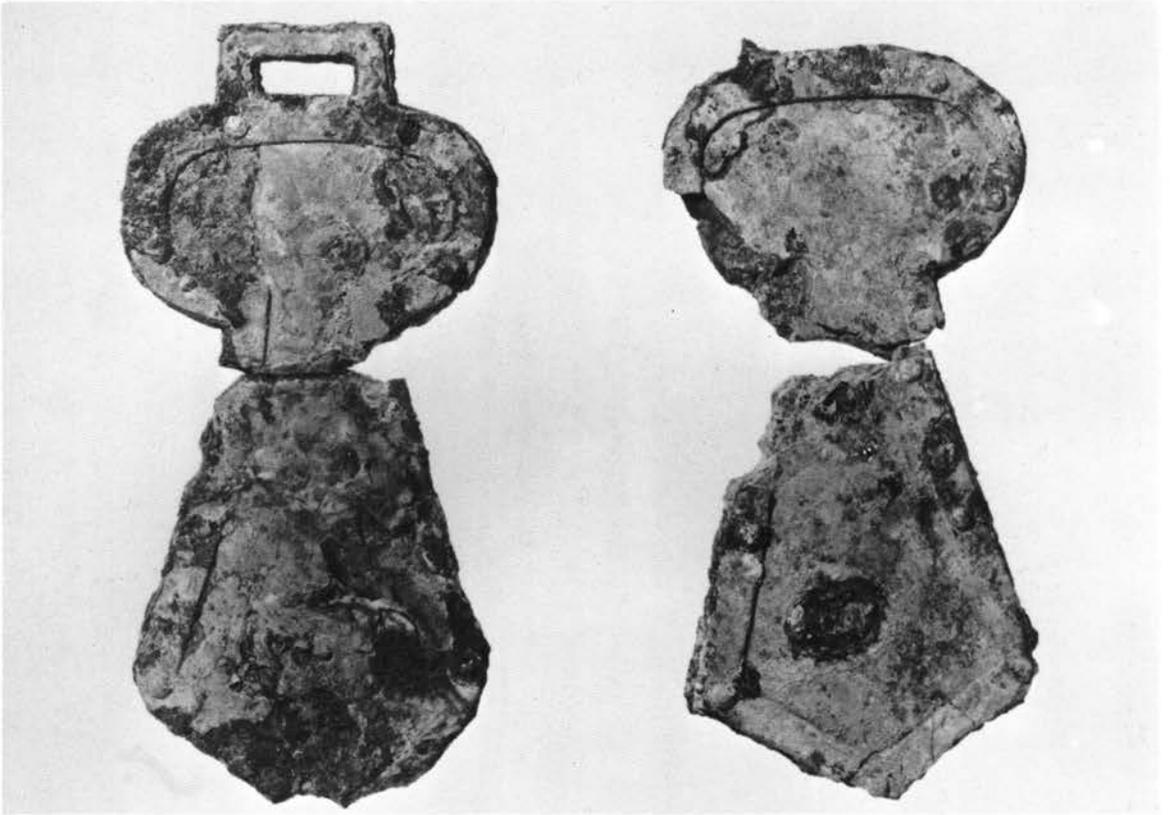
2. 10号墳石室全景



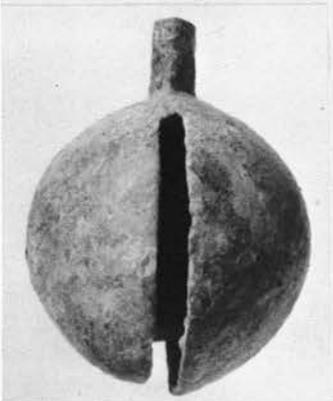
1. 10号墳石室奥壁



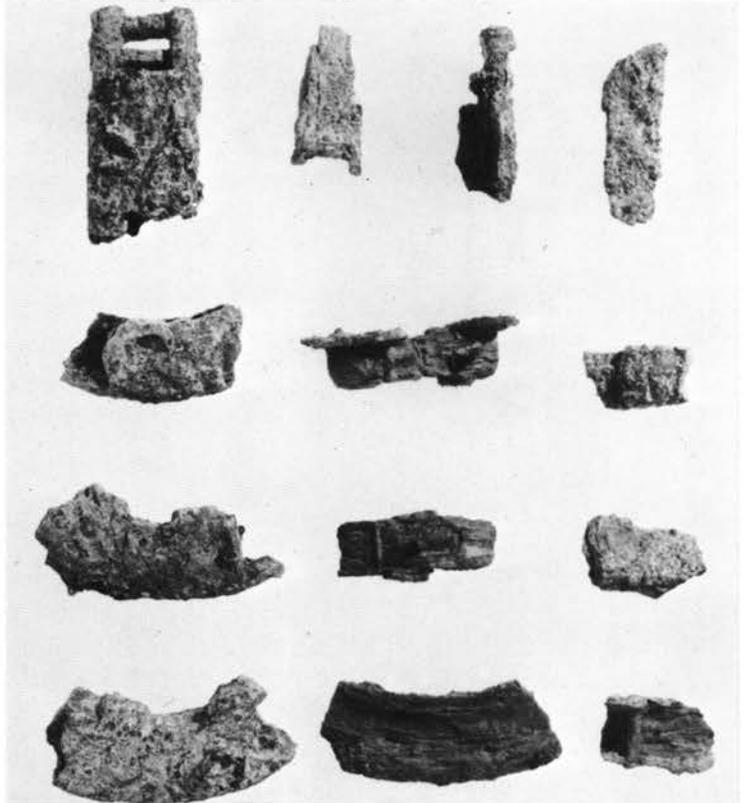
2. 10号墳石室横口部



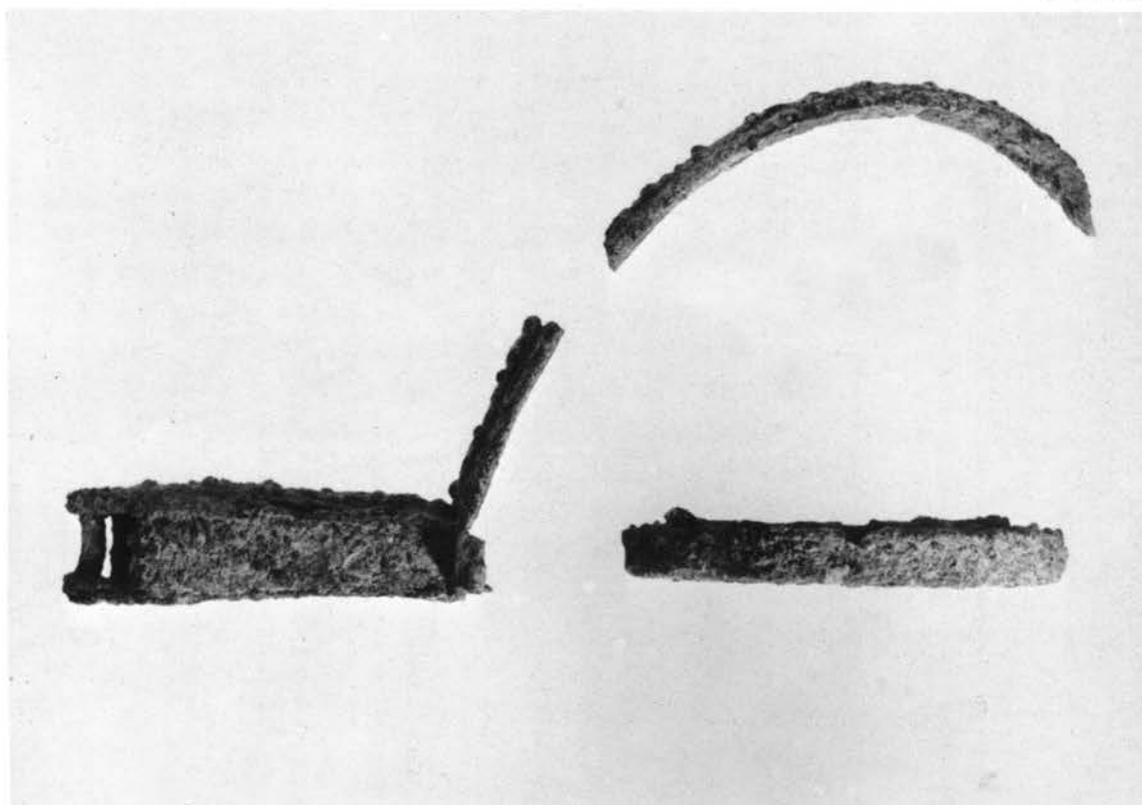
劍菱形杏葉



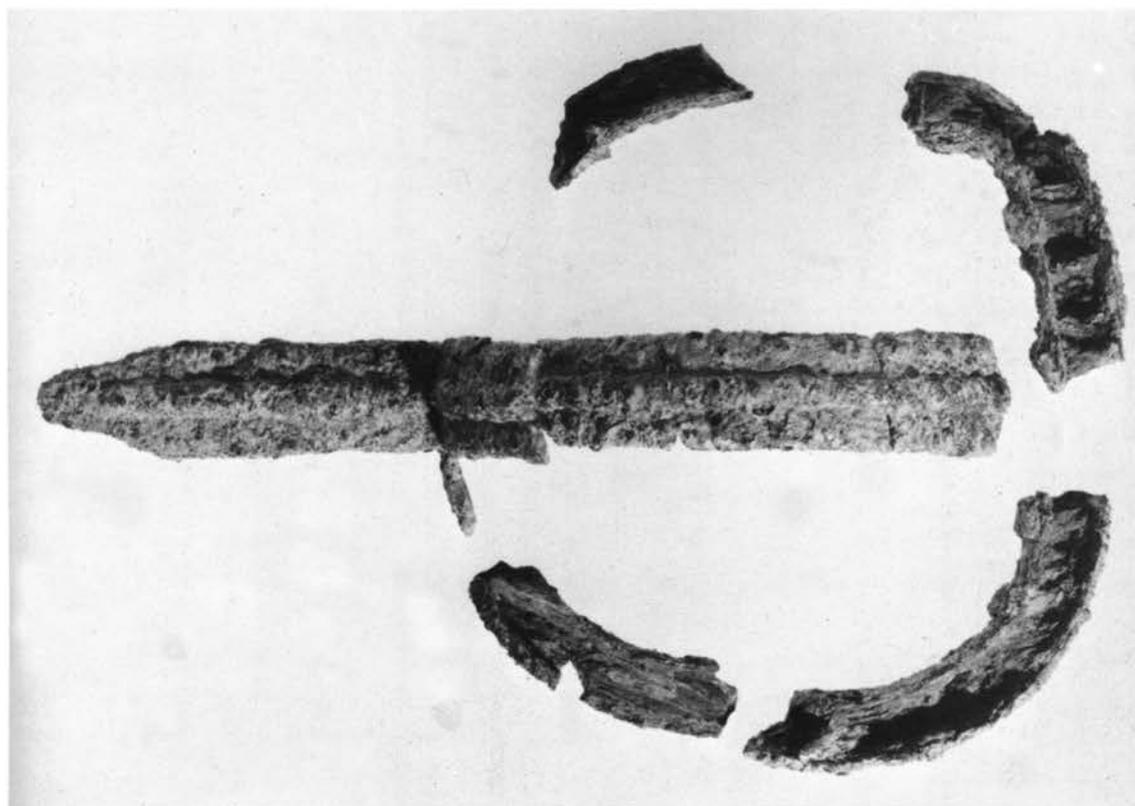
環鈴



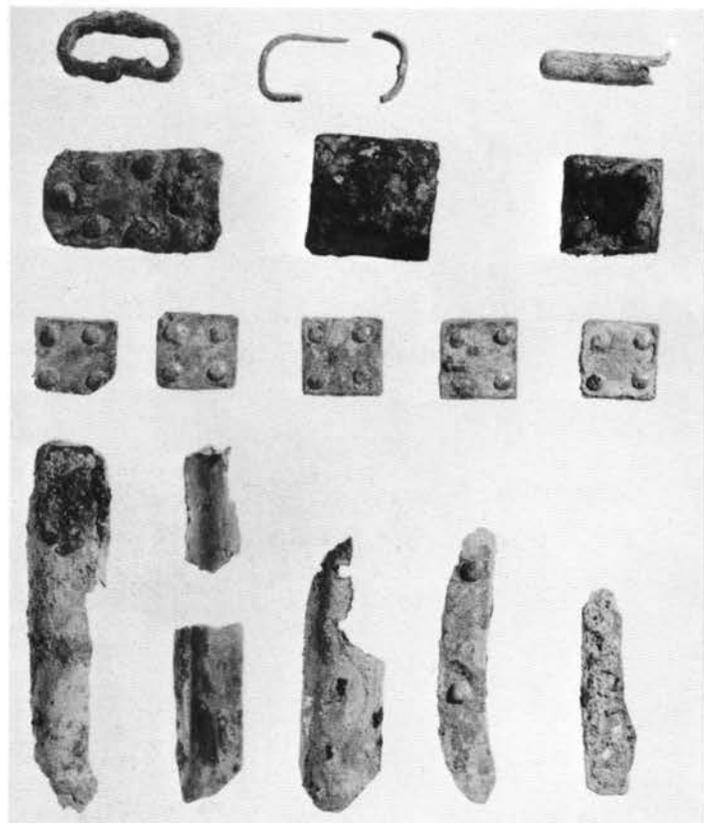
木心鉄装輪鏡



木心鉄装杓子形壺鏡 (側面)

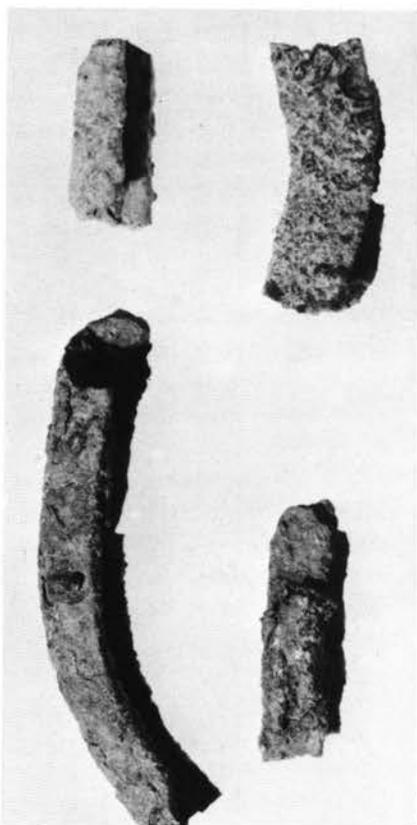


木心鉄装杓子形壺鏡



釘留金具

鞍金具



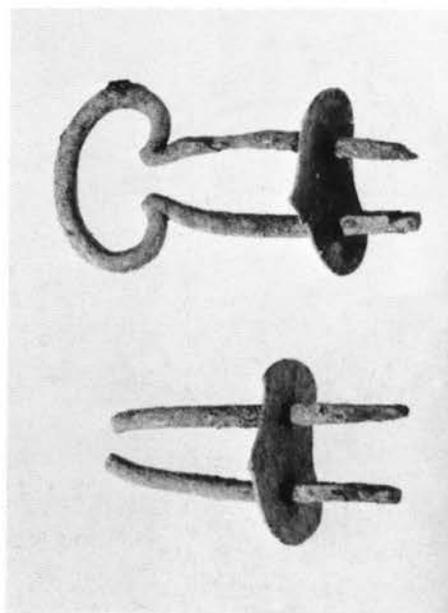
鞍金具

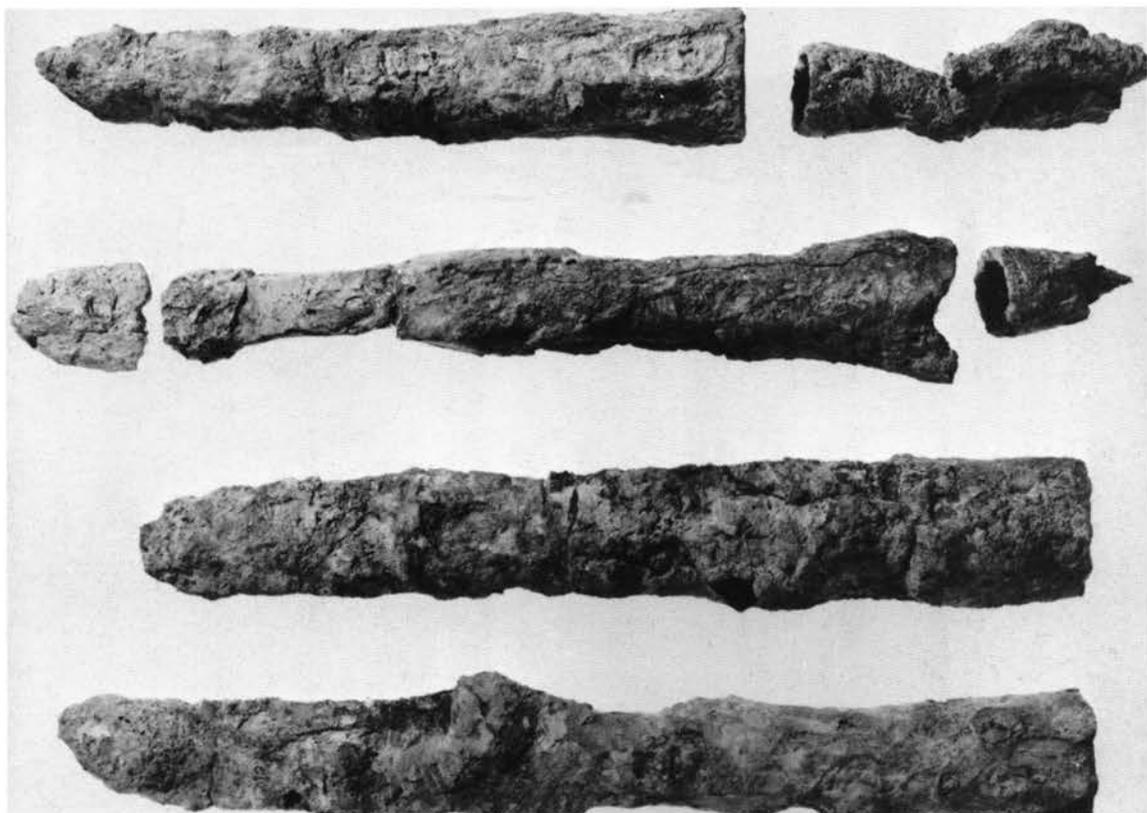


上 鉸具

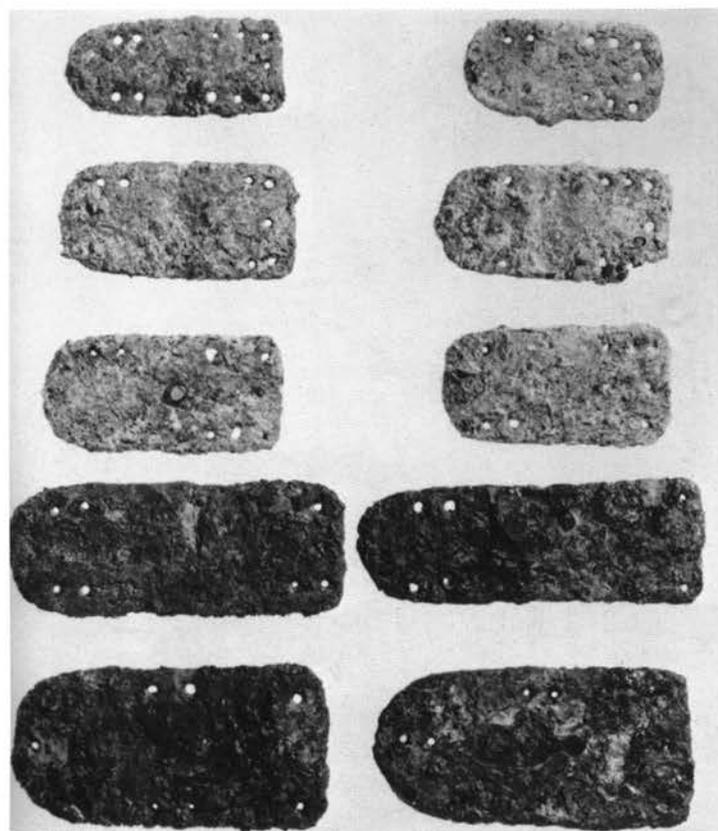
轡

下 銅製鞍轡

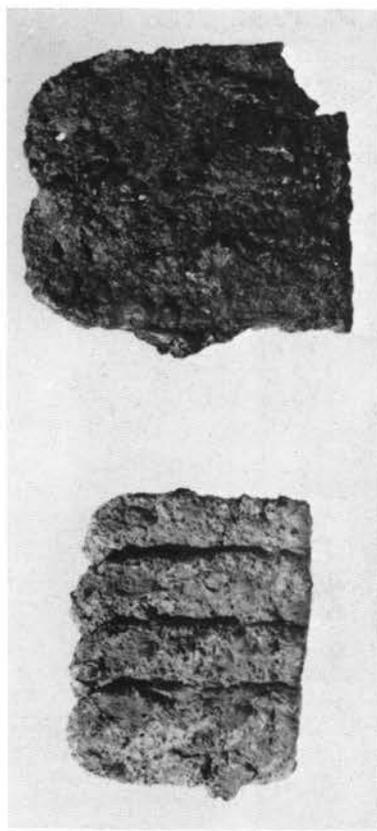




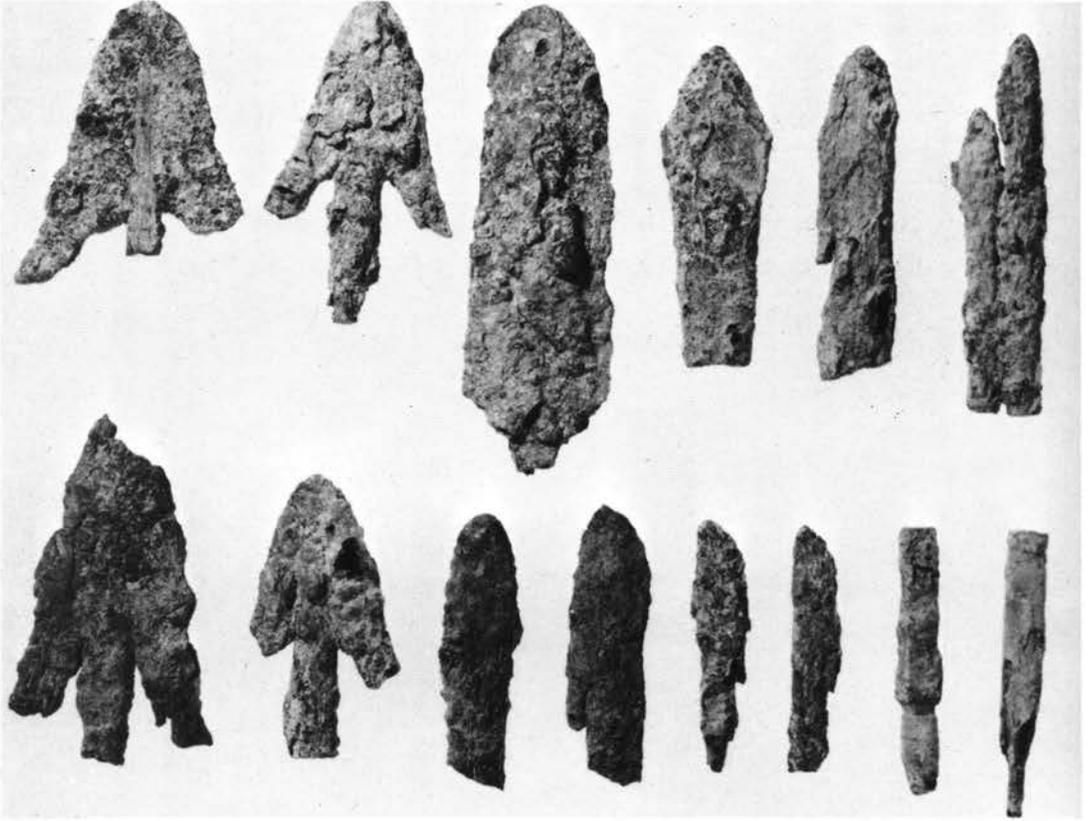
鉄鏃と石突



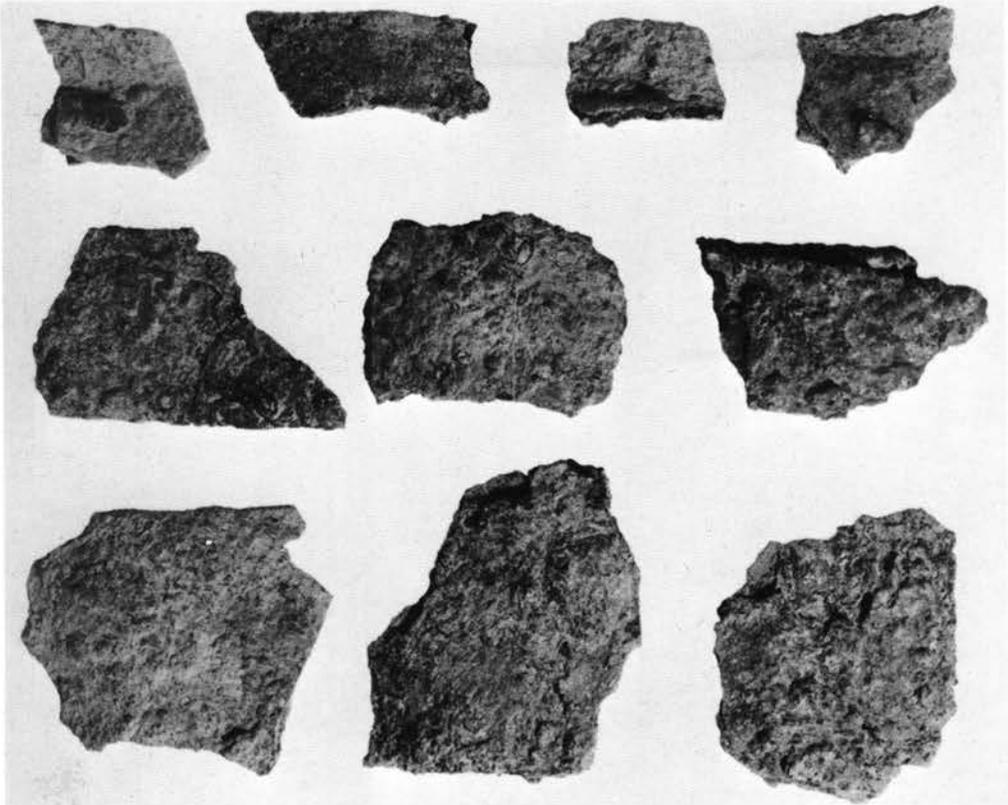
挂甲小札各種



挂甲小札



1. 鉄鏃



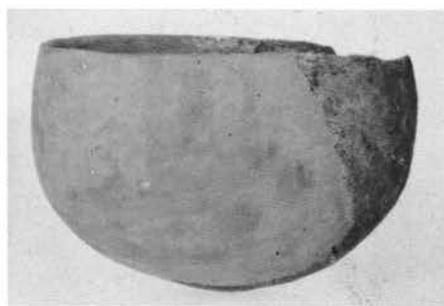
2. 短甲



1. 10号墳盛土下出土住居跡全景



10号墳下 1号住居跡



1号住居跡内出土土師器



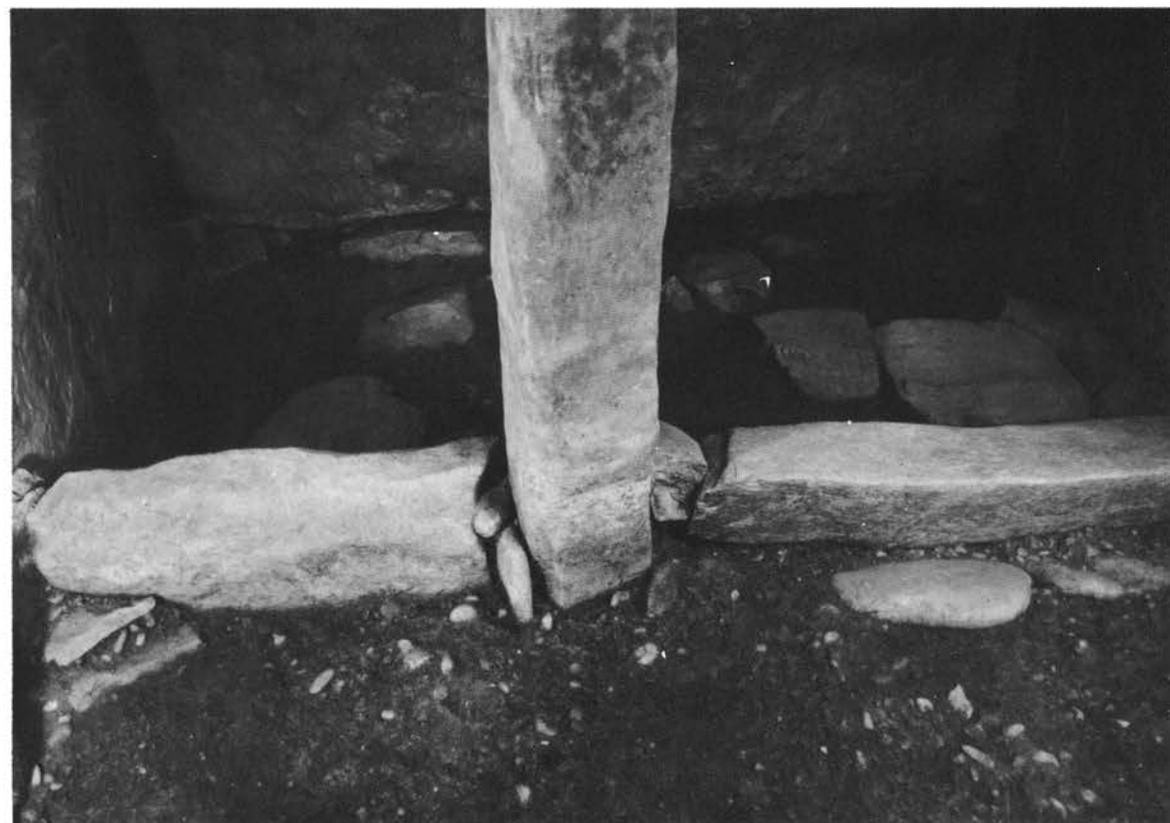
1. 41号墳遠景（東から）



2. 41号墳全景（南西から）



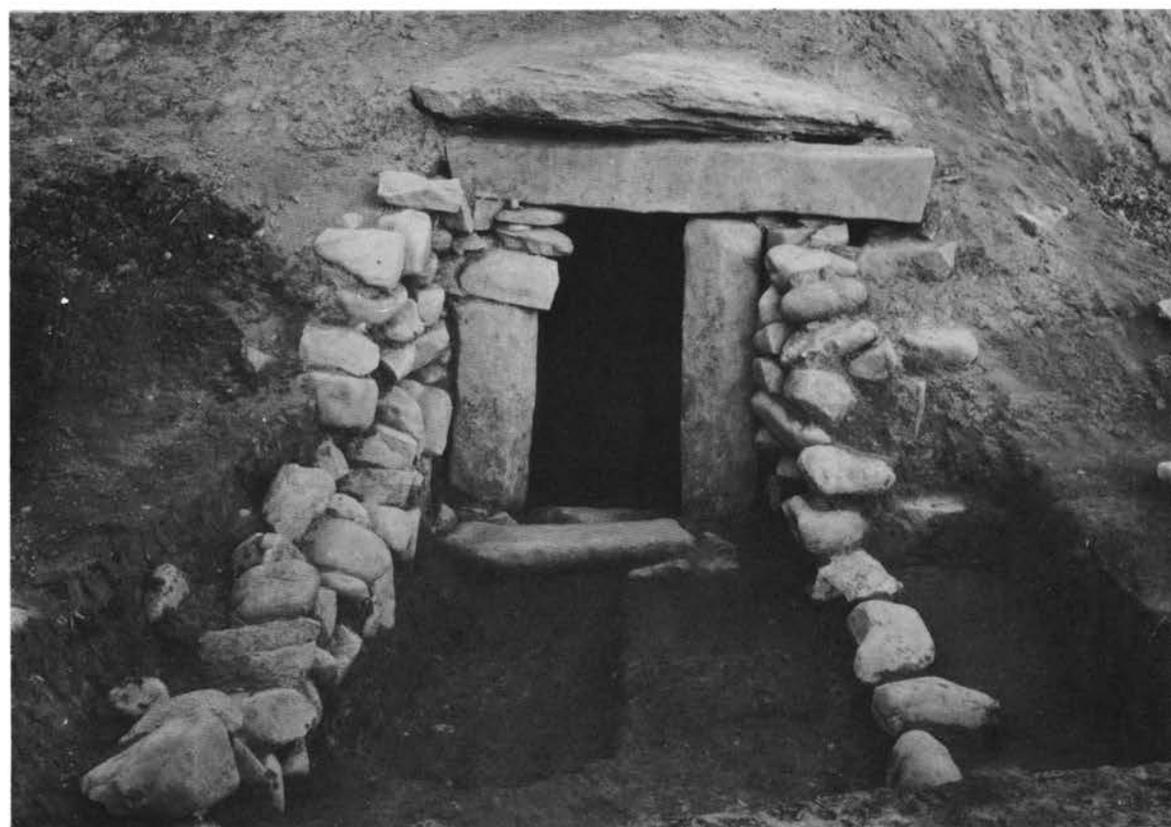
41号墳石室奥壁と石柱



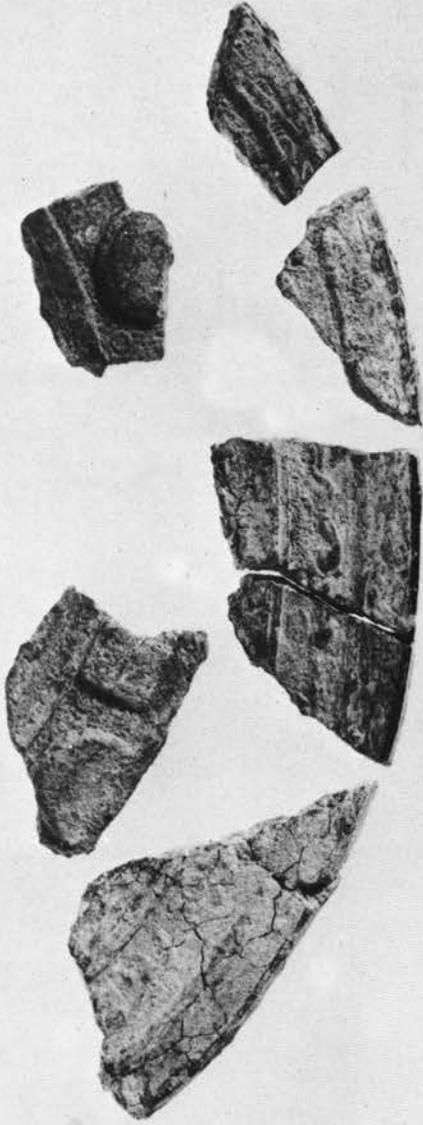
2. 41号墳屍床と石柱



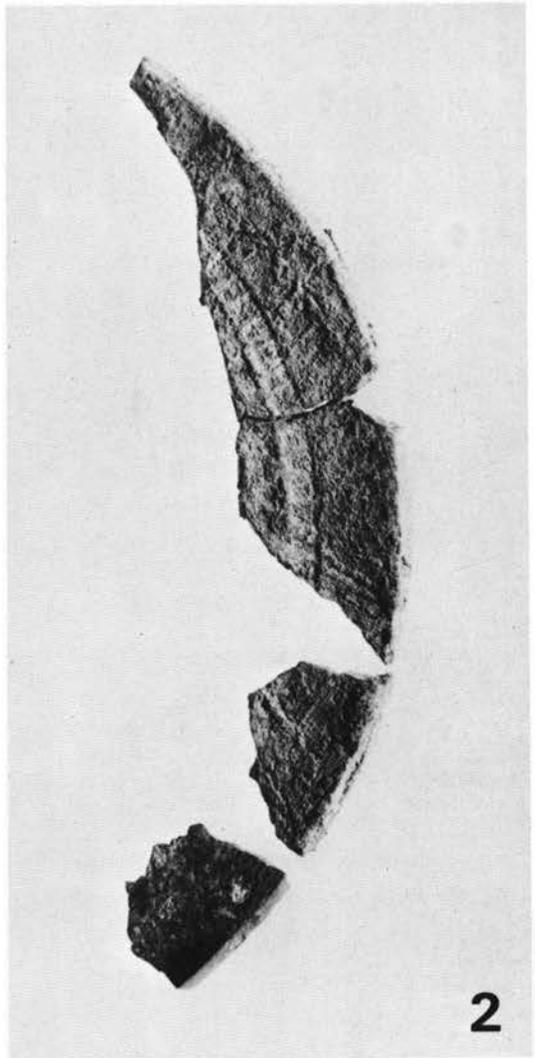
1. 41号墳石柱と側壁



2. 41号墳石室入り口と墓道石積み

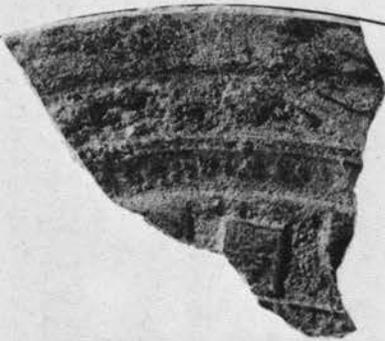


1

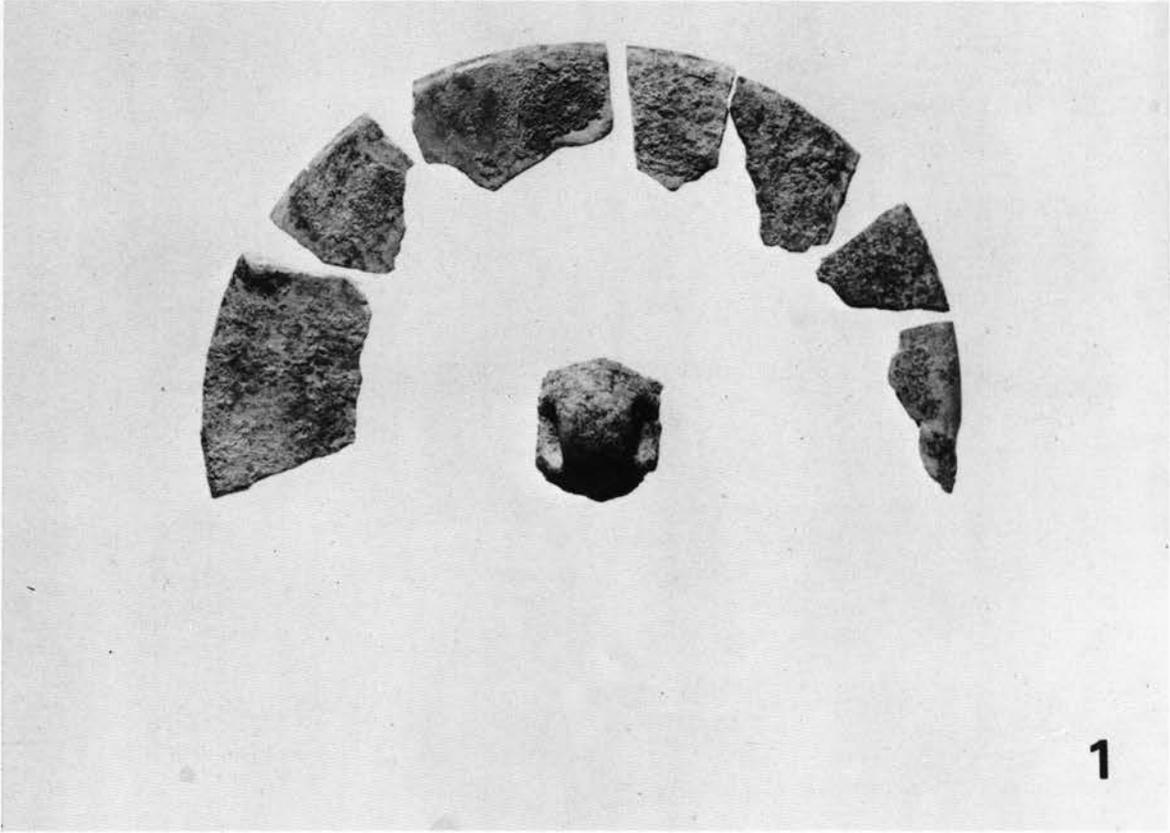


2

- 1. 画文带神獸鏡
- 2. 神獸鏡
- 3. 画文带神獸鏡



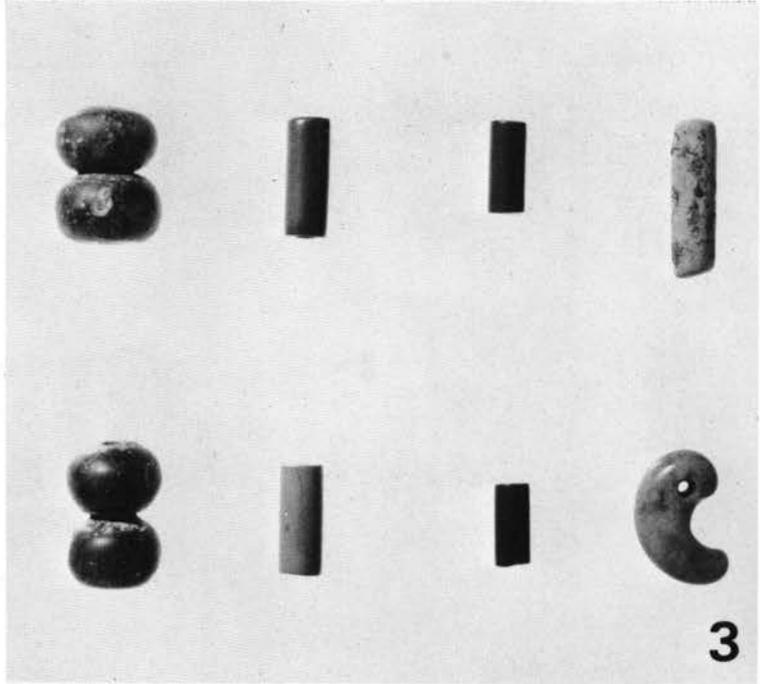
3



1

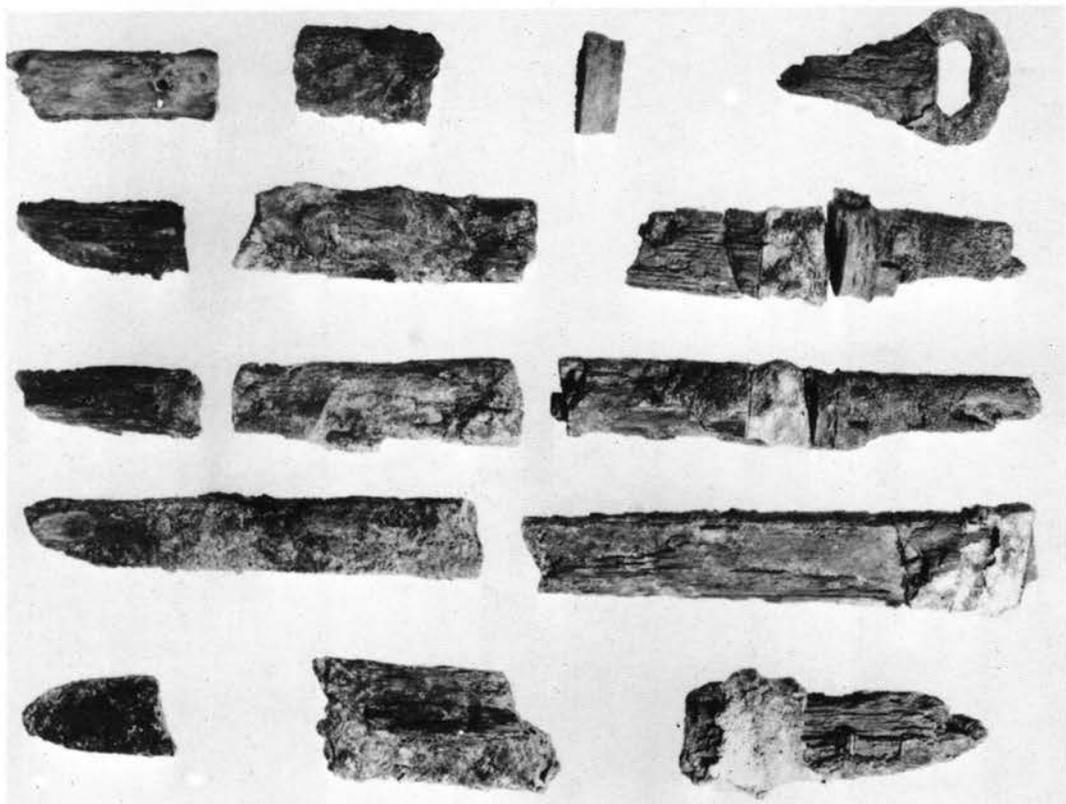


2

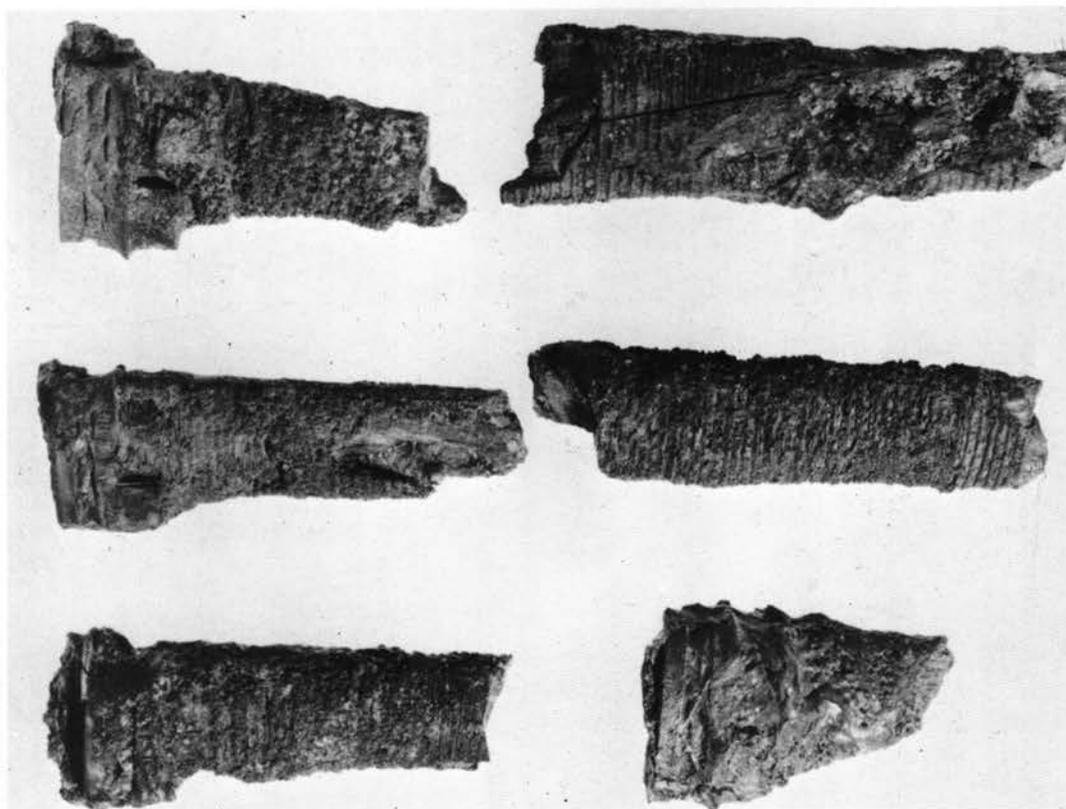


3

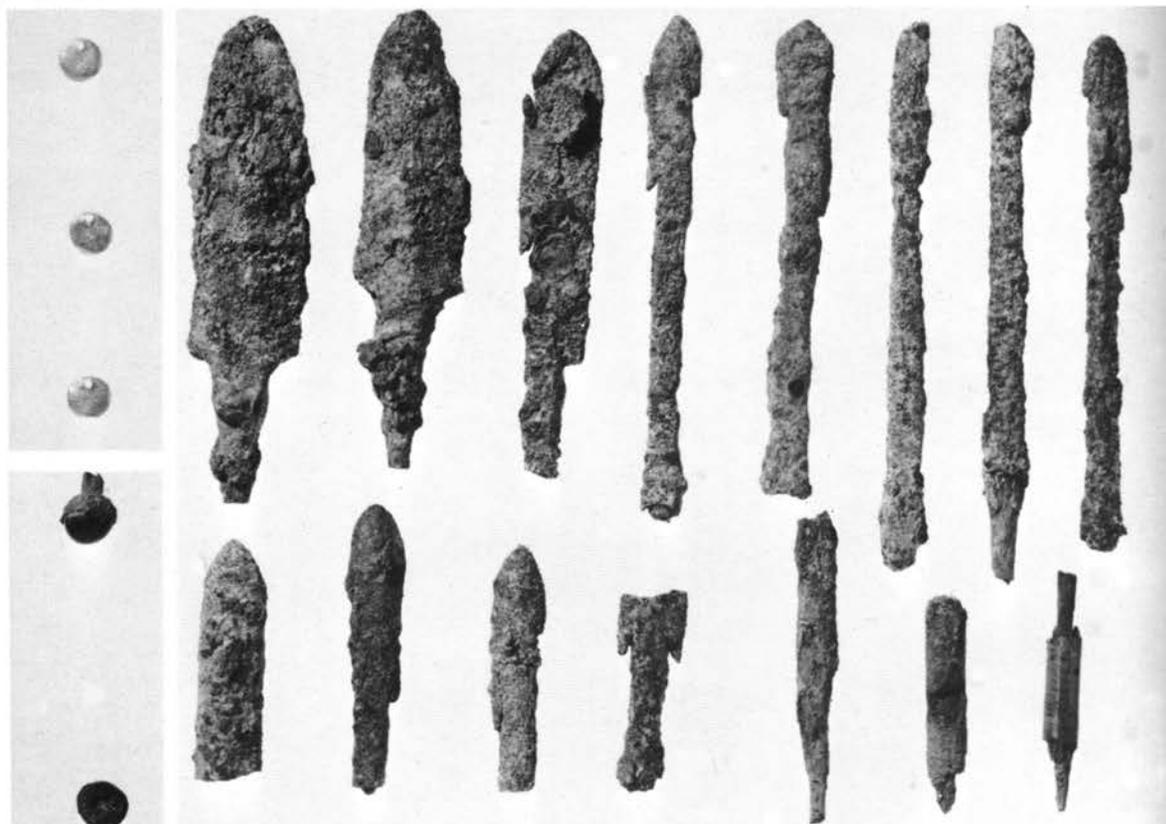
- 1. 内行花文鏡
- 2. 方格規矩鏡か
- 3. 連玉，管玉，勾玉



1. 鹿角装具付きの剣と大刀・素環頭大刀か剣

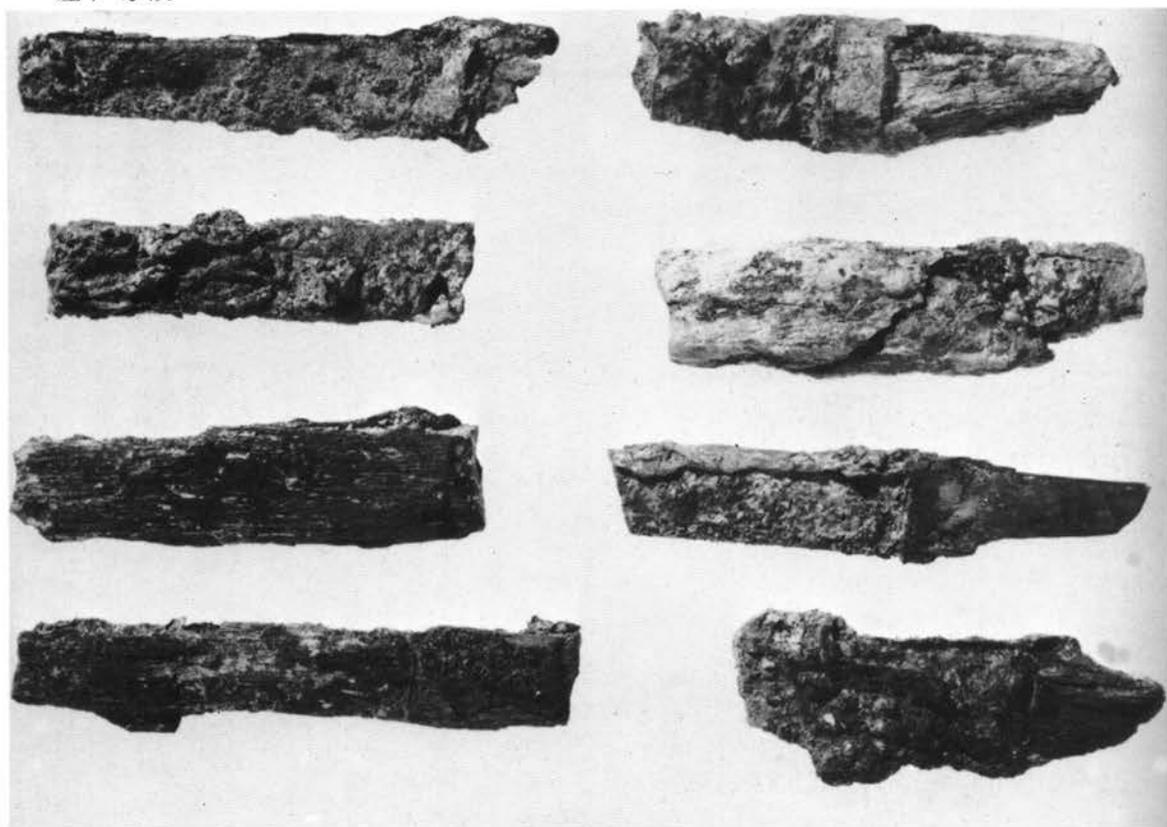


2. 木装把縁の大刀

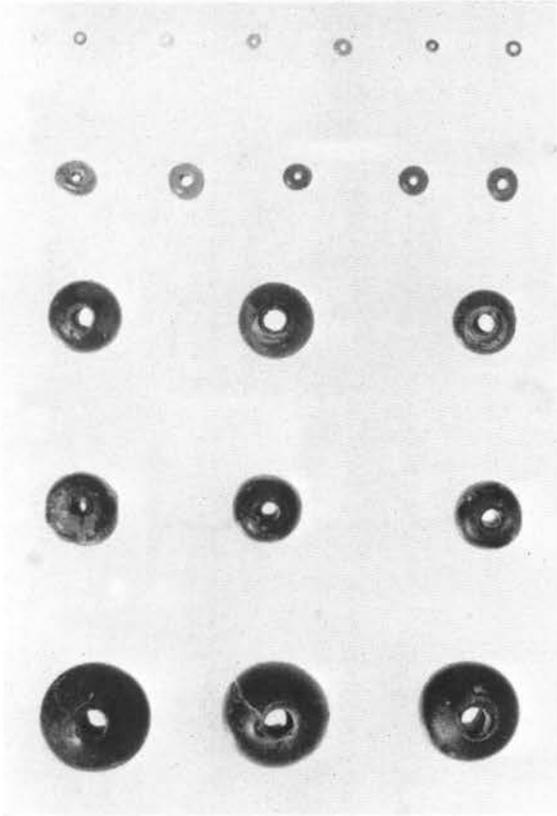


1. 左上 瑛珞  
左下 象嵌

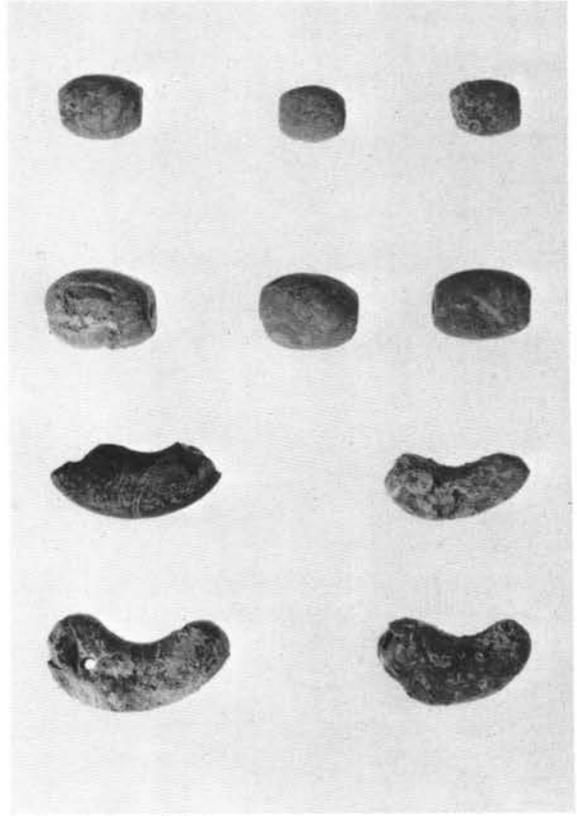
鉄鏃



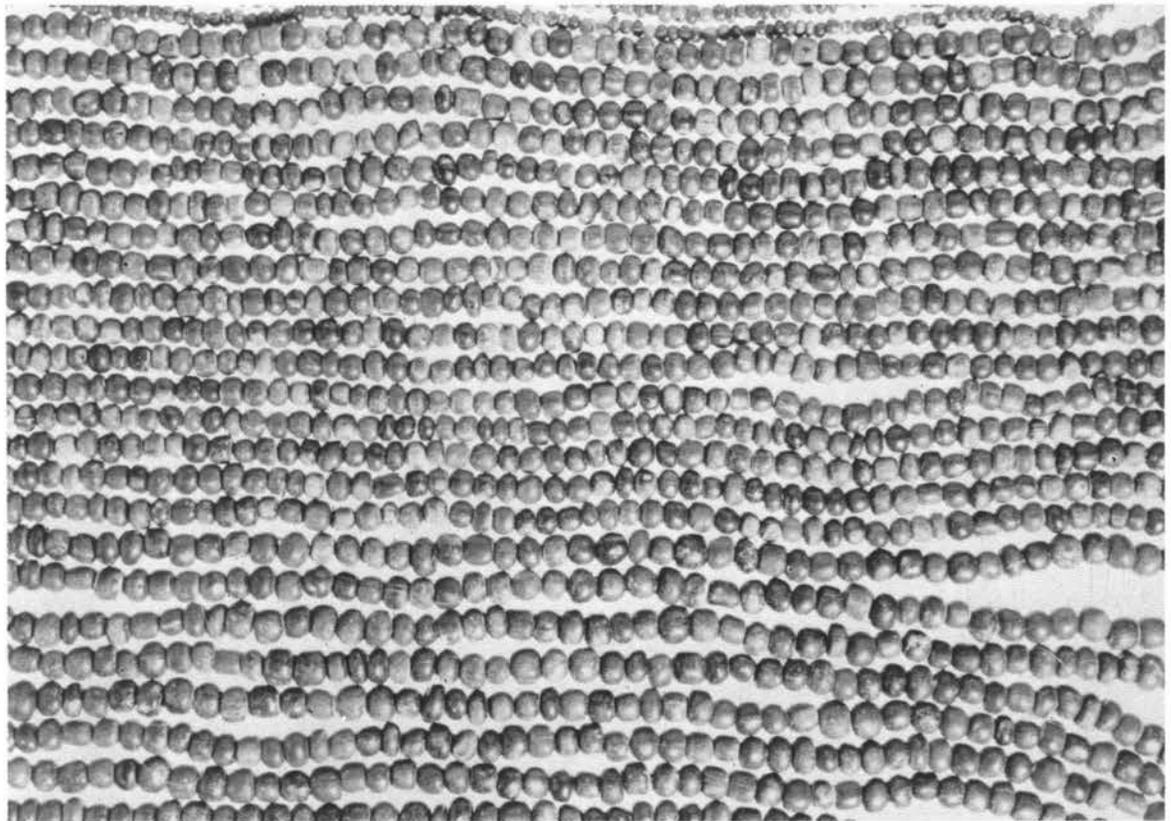
2. 刀子



ガラス玉各種



琥珀製勾玉と棗玉



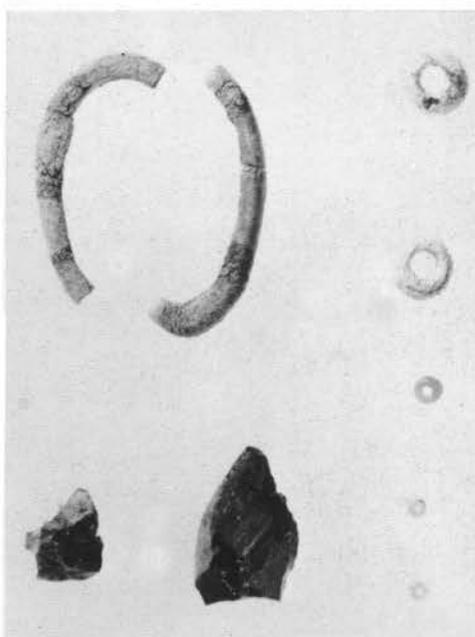
ガラス玉



1. 勝浦浜1号墳発掘前全景



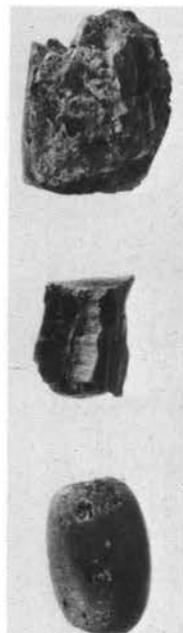
2. 勝浦浜1号墳石室と墳丘土層断面



上 銅鏡 下 右側 ガラス玉  
下 左上 銅止金具, 左下 琥珀棗玉



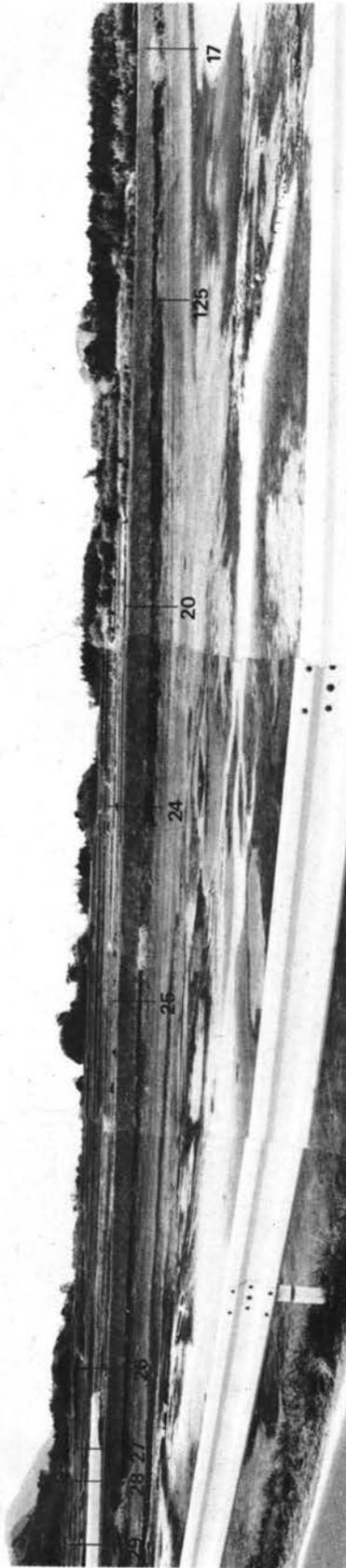
琥珀棗玉



上. 勝浦浜 1号墳石室全景  
下. 勝浦浜 1号墳石室奥壁



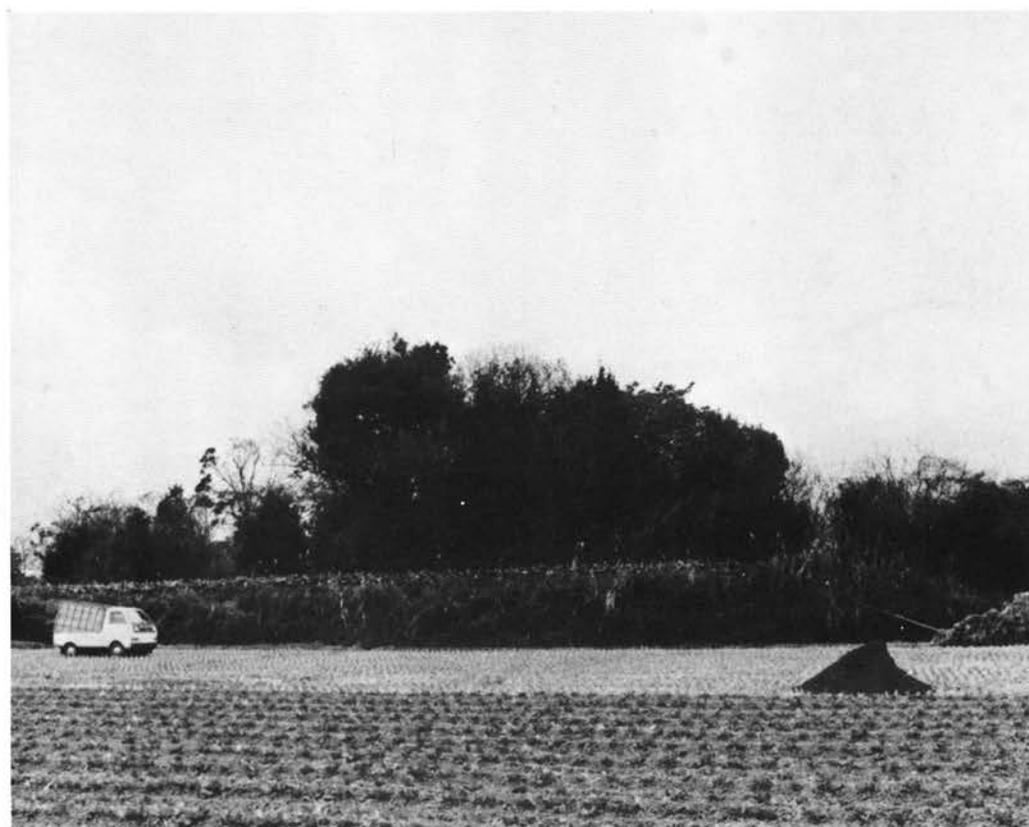
新原・奴山古墳群全景（北西上空から）



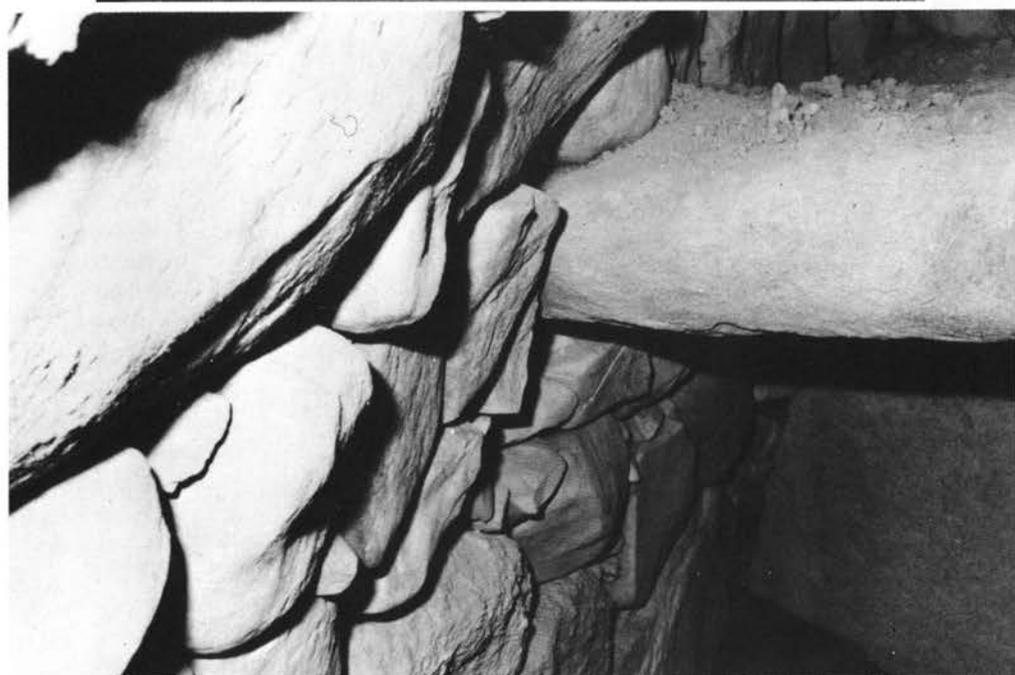
新原・嬭山古墳群全景（北東から）



1. 第26・27号墳全景（北から）



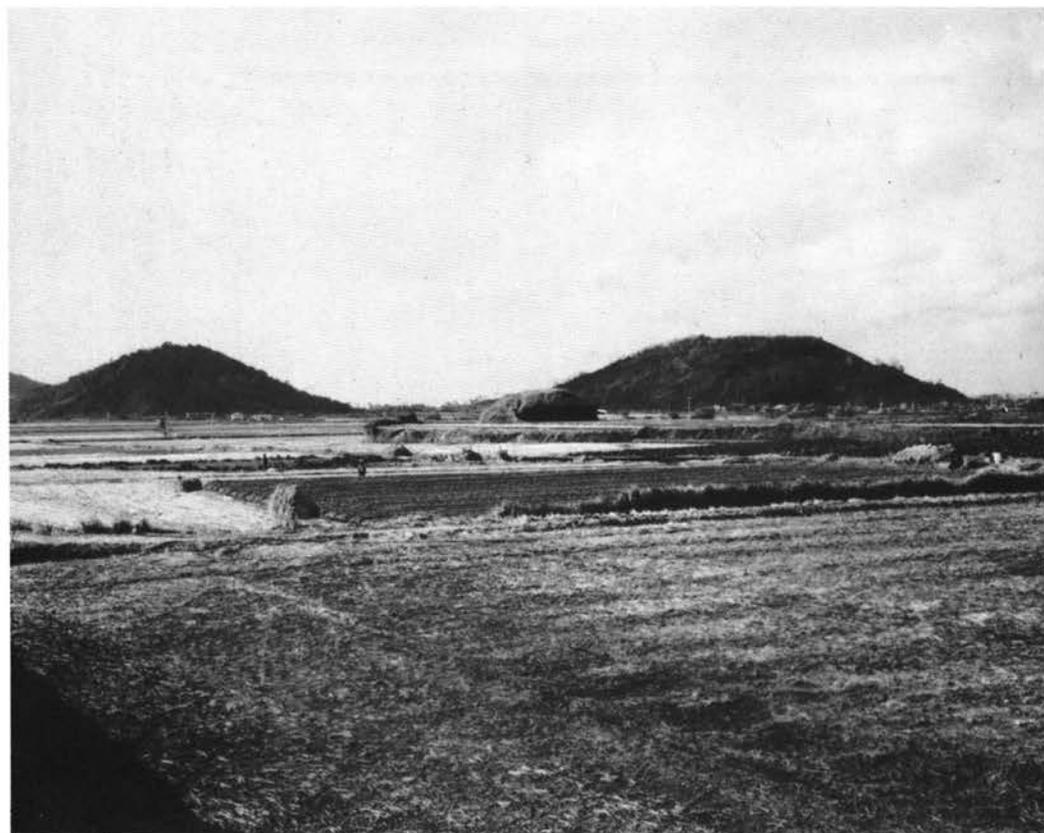
2. 第29号墳全景（北から）



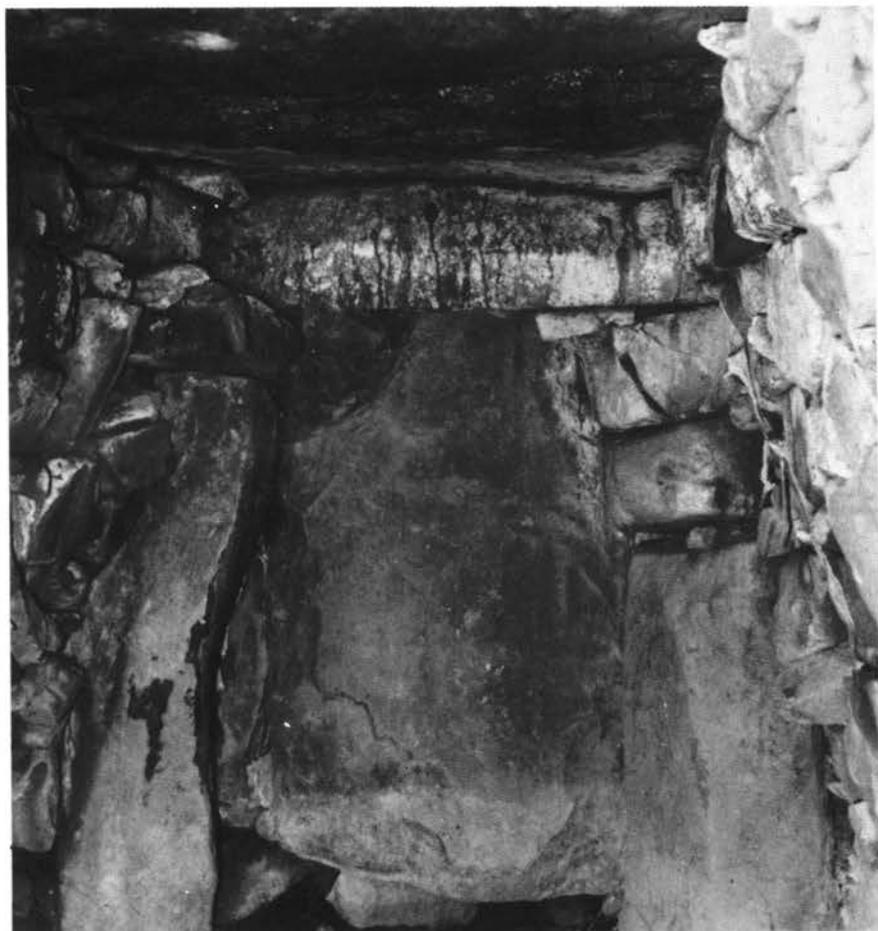
上. 第26号填石棚と奥壁 下. 第26号填石棚と左側壁



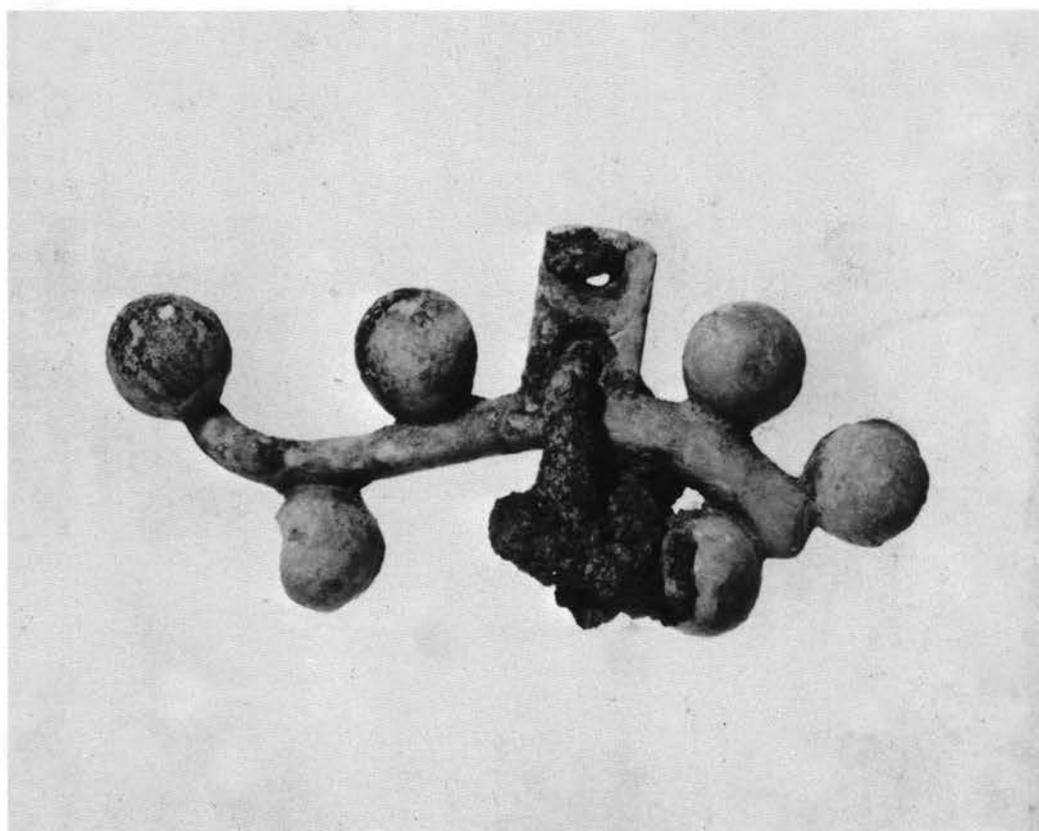
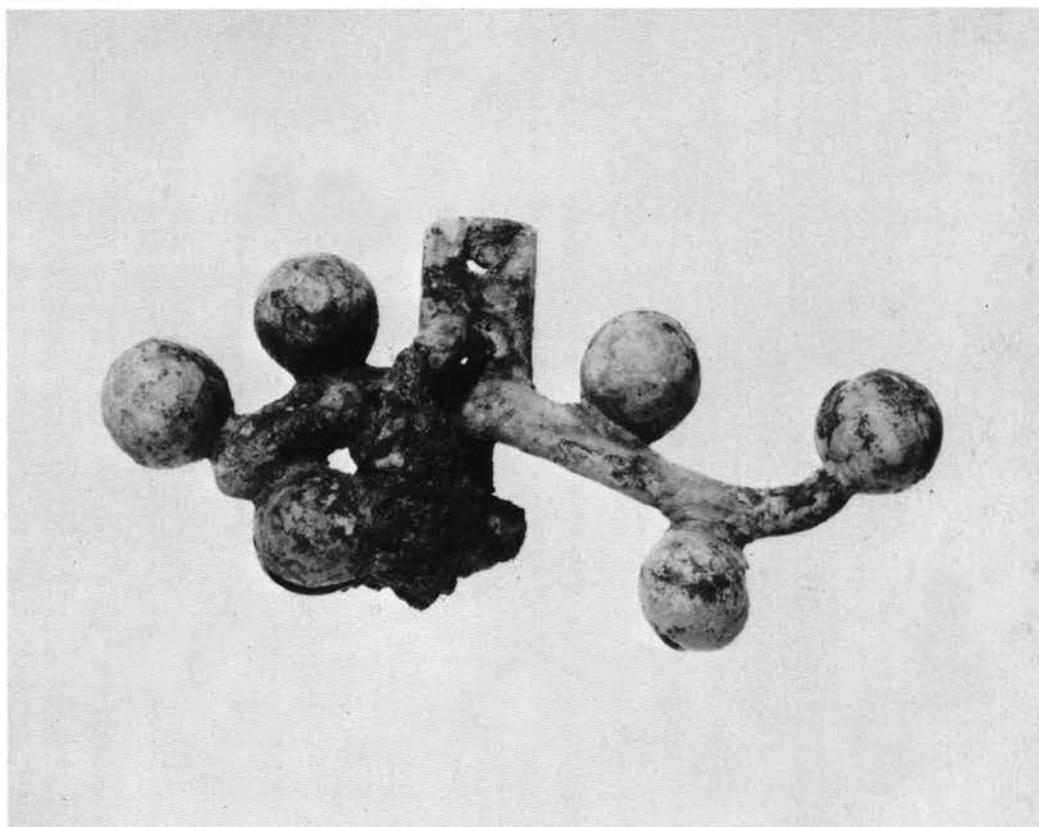
1. 第52～55号墳全景（南から）



2. 第56号墳遠景（南東から）



第56号墳玄室 上一横口部 下一奥壁と左側壁



第17号・123号墳付近採取鈴付杏葉  
鏡板

むざん　にも　ほり　おこされし　まがたま　の  
にぶき　ひかり　の　いたく　め　にしむ

(花田敏昭詠)

福岡県文化財調査報告書第54集

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中州6-29

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区塩原1194の1

新原・奴山古墳群正誤表

頁,行	誤	正
序	花田敏昭に	花田敏昭氏に
目次 PL.8-(1)	前庭部	羨道部
PL.10-(2)	"	"
PL.11-(1)	"	"
PL.11-(2)	"	"
PL.70	鈴付杏葉	鈴付鏡板
1, 24	阿部静男氏	阿部静馬氏
4, 2	順多田	須多田
13, 1	拓壁	坛壁
15, 13	漁撈具	漁撈具
19, 1	1褐色粘質土(ドット)	1褐色粘質土
19, 10	第123号墳墓道態断面図	第123号墳墓道縦断面図
22, 6	基壇底	墓壇底
28, 23	柱状玄武岩天石。	柱状玄武岩天石。
29, 24	PL, 35	PL. 35
29, 26	PL, 35 ~ 37	PL. 35 ~ 37

頁,行	誤	正
29, 27	PL, 38	PL. 38
31, 29	後方後円墳	前方後円墳
41, 1	付付鏡板	鈴付鏡板
45, 註9	津屋崎町教育会	津屋崎町教育委員会
45, 註12	VI	IV
45, 註14	『嘉穂地方歴史-先史編』	『嘉穂地方史-先史編』
45, 註19	<九州考古学> 19	<九州考古学 19>
45, 註20	『陶邑古窯址群 I』	『陶邑古窯址群 I』
PL.8 1	前庭部	羨道部
PL.10 2	"	"
PL.11 1	"	"
PL.11 2	"	"
PL.23 2	i B	12 B
PL.70	鈴付杏葉	鈴付鏡板